

世田谷文学館

収蔵資料

調査と探究

02

石川淳

椎名麟三

「下巻」

## 目次

### 資料写真1

石川淳日記 〈昭和27年1月1日―昭和29年8月25日〉

5

### 石川眞樹氏インタビュー

合理的で自由、そして優しさ―父・石川淳のこと

8

### 資料写真2

椎名麟三講演メモ②

13

探訪 椎名麟三旧宅

16

## 椎名麟三の思索のあと

紅野謙介

22

### 「石川淳日記」

一九五二年―五四年分について

28

山口俊雄

### 資料翻刻1

石川淳日記 〈昭和27年1月1日―昭和29年8月25日〉

39

### 資料翻刻2

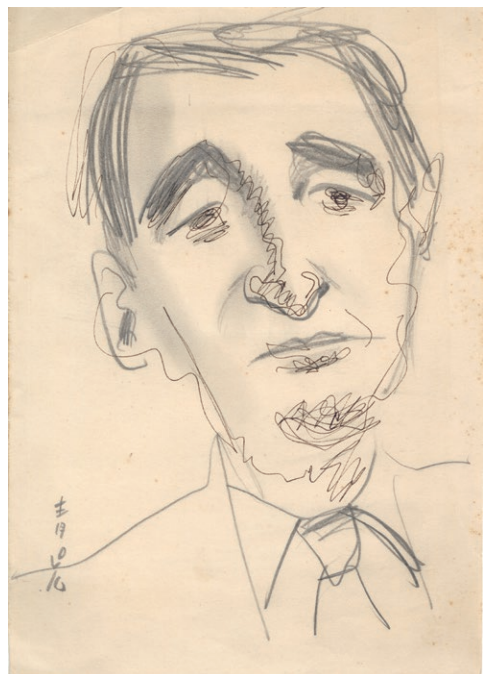
椎名麟三講演メモ②

75

石川淳／椎名麟三 年譜

106

資料写真1  
石川淳日記  
昭和27年1月1日—  
昭和29年8月25日



© Sampo Museum of Art, 24030

上 写真の裏書に「昭和廿七年十二月  
湘南電車中にて 撮影：永井龍男」とあ  
る。翌年4月9日に永井より贈られた写真

下 東郷青児画（紙、鉛筆、ボールペン/  
個人蔵）。昭和28年5月20日の項(p.64)  
に、「…またエスポアに転ず 東郷青児  
余の似顔をかく」とある



「インタビュー」

## 合理的で自由、そして優しさ

### —父・石川淳のこと

石川眞樹氏（石川淳ご長男）



聞き手・世田谷文学館  
撮影・高橋宗正

### 《映画・演劇・音楽のこと》

—ご寄贈いただいた石川淳さんの昭和25年から29年の日記（以下、日記）の翻刻と公開をご快諾いただき、誠にありがとうございます。この中では上映が再開された外国映画をよく見に行かれ、演劇や音楽会にも出向かれますが、眞樹さんがご存じの頃も同じですか。

映画は一緒に行きました。父はフランス映画ではジャン＝ポール・ベルモンドやジャン・ギャバンが鼻唄。ただ「男と女」は5分で寝ちゃいました。ディズニーの「ファンタジア」\*1は最後まで起きて観ていて、「よかったな」と言っていました。褒めたのは初めてですね。それから『狂風記』の頃だと思いますが、渋谷の映画館にヤクザ映画を観に行っていました。若山富三郎のだったか。『狂風記』にちらっとそういう雰囲気を感じられる（笑）。  
—ご自身でヤクザ映画をわざわざ映画館まで観に行かれたんですか？

たぶん一人で。その前に僕が大学生の頃、唐十郎さんの状況劇場、花園神社に2、3回一緒に観に行きました。花園神社って知ってるかと聞かれて、何しに行くとか最初言わない。それで「その恰好じゃ駄目だ、ちゃんと花園ルックを着ていけ」と言うんです。花園ルックが何たるものかよく分からないけれど、ちょっと崩した恰好で行く訳です。

唐十郎はすごく買っていたように思います。\*2  
—演劇では他には？

新劇では「俳優座」。千田是也さんが好きで、俳優では市原悦子さんを若いころからすごく買っていました。安部公房さんのお芝居も全部行ったのではないですか。上野の美術館なども一緒に行きました。音楽では武満徹さん。レコードでは聴かずコンサート、「実物」で。僕が競馬の場外馬券を買ったと母（活夫人）に聞いて、「実物を見ろ、何が場外馬券だ」と怒ってたそうです（笑）。

### 《制度への不信と人への信用》

安部公房さんといえば、胃が悪い父を東大病院に入院させようと自ら運転されて、僕も付いていきました。車中で安部さんが「先生、保険証を持ちましたか」と聞いたたら、「俺は保険というものを信用していない」って（笑）。保険なんていう考え方も嫌。その東大病院も翌々日に脱走してきて、どうしたのかと聞くと、「検査ばかりで気に入らない。治療に行ってるのに何が検査だ」って。検査しなきゃ治療も出来ないのに。確かに正論だとは思いましたけど（笑）。

—安部さんの親身な様子も伝わります。医者にかかるのがお好きでなかったのですか。  
安部さんのことは120%くらい信用しているの

で、安部さんに紹介された後藤先生のごことは信用していました。僕が調子が悪いというと、「おい、この薬を飲め。これを飲めば一発だよ」と処方された薬を勧めるくらい。まだ出たての頃の「ガスター」でした。こうして一たび自分が信用したことは全部信用する、滅多に信用しないけど。

### 《家での様子》

あまり厳しく叱られた記憶がないですが、一度母の作った晩飯に文句を言ったら、えらい勢いで怒られました。もう一つすごく印象に残っているのは、僕が仲間と出かけて、車を駐めておいたらタイヤが盗まれて大変なことになったという話をしていたら一言ぼそっと、「馬鹿は死ななきゃ治らない」（笑）。この僕の高校時代の仲間のことを「ドラ仲間」と名づけてました。

—お子さん方のお友達が家に来られて、石川淳さんが会うこともあったのですか？ 家で読書や執筆されていると近づきたい様子かと思いましたが。ドラ仲間の尾上辰之助（初代）が来た時、「辻留」に食事に連れていってくれました。父には伝えませんが、辰之助はよく読んでいて、『狂風記』を芝居にしたいねとか言っていました。父はドラ仲間を面白がってました。変なことして碌なことしないのが面白いと。ネタにもなったのではないかと。

——眞樹さんは以前、眞樹さんたちの若者言葉を文章に採り入れていたようだと言われていました。

そのあたりは敏感でした。テレビはドラマを一切見ず、ニュースと相撲くらい。「のど自慢」に怒るんです(笑)。それ以外、野球中継とかは我慢して、消しなさいとは言わない。茶の間でそのまま原稿書いてましたから。机が冬は炬燵になって、ここでゴロンと寝て、起きたくなったら起きて、夜中に仕事をして。「痛いよ、痛いよ」と夜中に叫んでる、胃の痛みで。「ガスター」のおかげでだいぶ和らぎましたが。

——胃痛があつても、ずっと牛肉、ステーキを召し上がられたんですね。  
牛肉しか食べないです。うちは焼き焼きも豆腐と葱と牛肉だけ。それ以外の物を入れると怒られる。真夏でも毎日のように焼き焼きとか。エネルギーとして牛肉が必要と信じて疑わなかったのだと思います。胃が痛かろうと。

——お寿司も大トロ一本鎗だったそうですね。これもエネルギーでしょうか。

量は食べないんです。大トロ、それから「巻いてくれ」と鉄火巻。手巻きでは絶対なくて、簾で巻いて切ったものを周りに「食べなさい」と配る。トロと自身と、貝はせいぜい赤貝、それからひかりもの。これ以外に変なもの頼むと、「そんなものは寿司じゃ

ない、お結びだ」と(笑)。今ほど冷蔵も流通も発達していないので、合理的な理由です。今考えると全てが論理的、合理的、不要なもの、至らないものには手を出さない、必要であればどれだけ高くてもそれを求める、そういう合理性です。

### 《住むところへの考え》

——石川淳さんの戦後の住まいは、お生まれの浅草や下町ではなく、世田谷、品川、荻窪、代々木上原、初台、青山と、むしろ城西、城南エリアですね。

戦争中に六本木に住んでいた事があって(昭和18年〜20年頃)、六本木の有名菓子店で土産を貰うとすごく機嫌が悪くなる。その主人が町内会長だったらしくて。防災訓練や竹槍訓練といった同調圧力とか一切駄目で、思い出すのがものすごく嫌だったんだと思います。麻布の辺りにもいい印象がなかった。初台の家から移るために母と家を探した時、麻布の方に良いマンションがあったのに苦虫を噛みつぶしたような顔して(笑)。それから母の話では、若い頃に鎌倉で苛められたらしくて鎌倉も好きでなくて。

——「自分の家を建てる」という発想を持たなかったのですか。

家を持つとか、資産を持つとか、一切ない。どうでもいい。雨露をしのげればなんでもいい。「俺は

聴)さんが、今ほど有名になる前の「越乃寒梅」を航空便で送ってくれたら保険が付いてたと驚いてました。\*3 ホテルのバーに一緒に行くと、こういうところでビールだけは頼むな、こういう場ではウイスキーを飲んでいたら間違いないと。それはおそらく本人が思う品格に則ったことでしょう。TPO、マナーに結構うるさい。マナーを「マナー」と言うので母が面白がっていました。

### 《フランス語への思い》

——古典籍、原書など、後年も本はご自身で買に行かれたのですか？

勿論、自分で行きました。洋書は日本橋の丸善、神田などの馴染みの古書店。

——フランス語といえば、眞樹さんが小さいころ、直接教えていらしたとか。

「楽しいフランス語」というテレビ番組があつて、パリの劇場で俳優、演出家として活躍したニコラ・バタイユや、フランソワーズ・モレシャンとかが講師で。それで「おーい、フラ始まったぞ」と。僕は逃げまくって居なくなりました(笑)。

——そういうときも石川淳さんはテレビ前に端座して聴いておられたんですか。

そうですね。ものすごくフランス語は大事にしていましたね。教科書で教えてもらったことも2、

新宿の駅前の広場で、原稿料貰ったまま一晩寝たけど何ともなかったぞ」と自慢するんです(笑)。

——生まれた浅草のことや、淳さんの祖父母や両親のお話など聞かれたことはありませんか？

いいえ。そういう話題にならなかった。長命寺の桜餅とか、どぜうの話くらい。長命寺の桜餅は昔からお土産に買ってきました。それから空也の最中。人に配るのが好きで、家族が美味しそうに食べるのを見ているのが好きなんです。自分では食べない。羊羹を持ってきた人のことを「気の利かねえ奴だ」と言っていました(笑)。

——やはり辛党。お酒は何でも呑まれましたか。

日本酒ですね、菊正(宗)。丸谷才一さんの故郷の「初孫」はうまいと言っていました。瀬戸内晴美(寂



昭和45年、初台の家で 撮影：榎本良介

3回ありましたけど、音読すると僕の方が発音が良いので、僕の前では絶対音読しませんでした(笑)。フランス語はとにかく好きで晩年もずっと原書を読んでいました。1980年代のフィリップ・ソレルスらが出始めの頃、僕が大学でフィリップ・ソレルスを読んだと言ったら、「それ結構面白いよ」と。何で知ってるんだと思いました(笑)。

——漢籍や素読をと仰られたことは？  
それはないです。言い出されたこともないです。

——大正13(1924)年にフランス語講師として旧制福岡高校に赴任されたとき、和文仏訳で漱石の「夢十夜」を出題されたとか。

一度だけ「漱石と鷗外とはどうですか」と聞いたことがあるんです。「鷗外はすごいよ。実生活でも上り詰めた。漱石はロンドンで頭をやられた。その差だ」と言っていました。だから書いているのはほとんど鷗外について。ただ漱石も尊敬をしていたと思います。それから芥川、谷崎、そして勿論、荷風。ものすごく好きで尊敬していたから最後がっかりしたんでしょう。父の合理性、論理性からいったら、荷風の晩年は納得できなかったのではないのでしょうか。

——眞樹さんが読んでいた本に関心を示されたことはありましたか？

僕が何を読んでいても、何を読めとは絶対言わない。

とにかく本を読め、本の種類は何でもよいからと。父も、将棋をしているとき以外、昼間は殆ど本読んでましたから。感心するのは、読むときは必ずピシッと座って、決して寝転びながらとかではない。

### 《公平さと自由さ》

六本木に行った時、近くのソ連大使館の連中が派手に遊んで飲んでいて、共産国の固いイメージもあつたので「大きい顔して遊んでた」と言ったら、「どうしてソ連の連中が遊んだらいけないんだ」と。ハッとしました。公平なんです。

——革命に共感を寄せられていますか、東京で学生運動が盛んだった時はどういう様子でしたか。

反乱、革命大好きです。勿論すごく共感していましたよ。活動団体から機関紙が送られてきたり。かといって、僕が運動に関わったら嫌な顔したでしょう。「お前なんかにあんな洒落たこととはできるわけない」と高括っていたでしょうけど(笑)。体制とか権力に対する反発、反抗を形にして示すことは、絶対的に必要なことだと思っていました。本当に自由なんです。ただ未だに一つ謎なのは、大学のフランス語の授業でマルクスの「資本論」だったか「共産党宣言」だかを読むらしいと話したら、「そんな下らないものやるんじゃない、何の役に立たない」と言ったんです。真意

はわかりませんが、学生の運動には共感しても共産主義に対してまた別だったのかなど。大事なものは自由なのに、もうその頃は共産主義に自由があるとは思えなかったのか。ベルリンの壁崩壊の時に生きていたら、話を、感想を聞きたかったですね。イデオロギーに関して、他者に押し付けることはなかったです。

### 《認めたものへの優しさ》

何かのインタビューで「戦後は貧乏されましたか」と聞かれて、「俺は貧乏はしたことはない、金が無かっただけだ」と(笑)。

—それでも日記を見ると出版社で前借して若い作家に渡してあげたり。加藤周一さんはフランスからの手紙で、原稿を出版社に届けるお使いを頼んでいます。

—そういう気遣いというか、優しいところがありましたね。加藤周一さんをとっても評価していました。『夕陽妄語』を読むと、父と思考回路が似ていたとわかります。瀧澤龍彦さんもととても買っていました。

—初台の家に訪ねて話し込まれる作家の方はいましたか？ 日記の頃は安部さん、島尾敏雄さん、福永武彦さんなどの若い作家に会われています。

初台の家には安部さんくらい。でも福永さんも認めていて好きでしたね。テレビで野坂昭如さんが

早口で喋ってるのを見ながら「あの喋り方がいいんだ」って。認めている人のことは全面的に受け入れる。三島由紀夫さんのこともイデオロギーは全く違っていたけれど好きで認めていたから、追悼文\*4では何とか理解を示そうとしたんでしよう。一つ認めたら全部認める、そういうところも本当に優しい人でした。

—ところで、今はできるだけ幅広く読んでほしいので、新仮名、常用漢字での出版でOKしています。父本人は新仮名、常用漢字では絶対駄目な人なんだとつくづく思いました。

—下の世代の著作は殆ど新仮名、常用漢字ですが、何か言われましたか？

他の人がすることにはこだわりませんでした。安

部公房さんが使い始めた初期のワープロなんか、恐れ入ってました。「ああいうもので、よくまああれだけの文章が書けるものだ」と。感心、尊敬の念。自分ではできないから素直に受け入れて、頑なさにはなかったです。

2024年10月24日、世田谷文学館にて

\*1 「イメージと図式」(「虚一盈」所収。初出「東京新聞」1955年10月10日)で言及。「ファンタジア」の日本公開は同年9月23日

\*2 『石川淳全集』月報9(1990年1月)掲載の扇田昭彦「石川淳と唐十郎をつなぐもの」で二人の相互影響が示唆されている

\*3 瀬戸内晴美「菊富士ホテルからの子へ」(「すばる」1988年4月臨時増刊「石川淳追悼記念号」)に詳しい

\*4 朝日新聞夕刊「文林通信」1970年12月24日・25日



\*写真2枚とも年月日、詳細不明。





# 探訪 椎名麟三旧宅



1階の応接スペース。暖簾の奥には電話があり、編集者に締切の遅延をよく謝っていたという



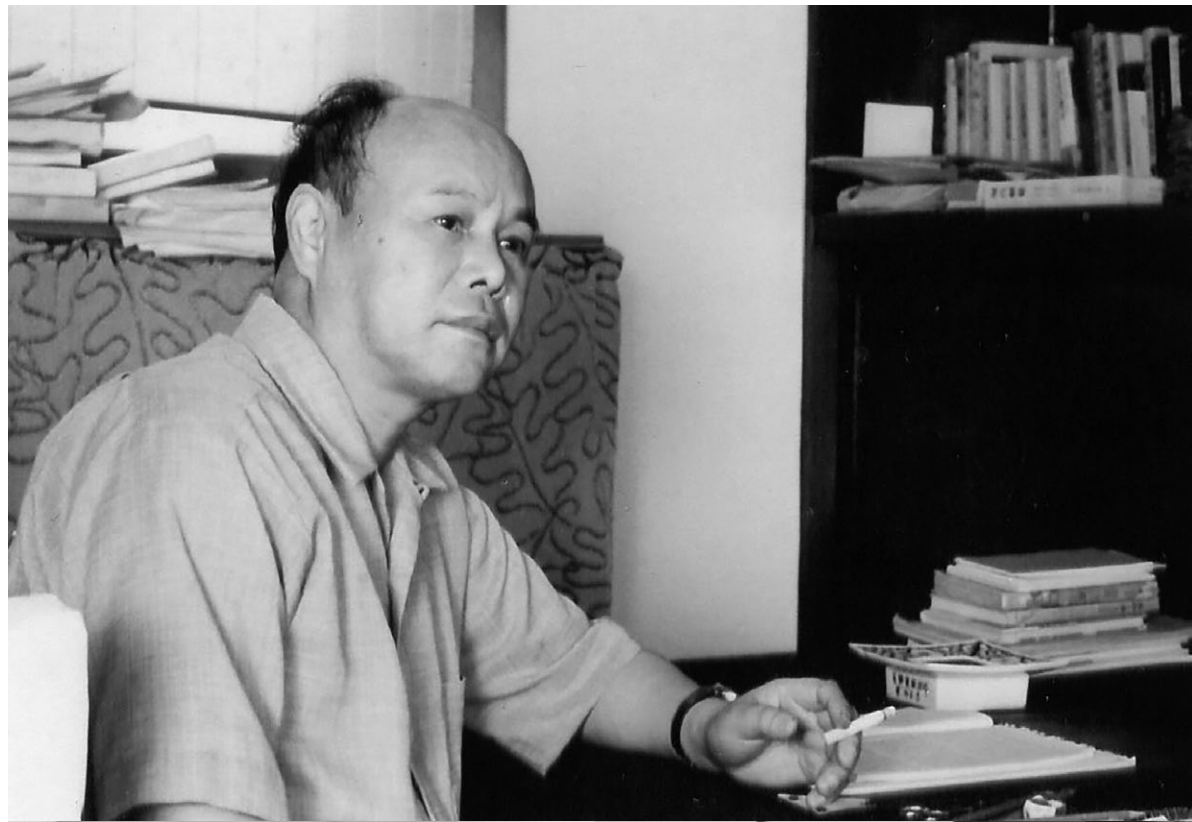
2024年7月19日 世田谷区松原  
撮影：栗原論

2階の書斎へと続く階段



一日の苦学は  
十日の一日だけで  
十分である  
権左藤三

長年執筆をした書斎



自宅での椎名麟三



(上) 愛用の筆記具など  
(右下) 夫人に用があるときはこのベルを呼び鈴代わりに使ったという  
(左下) 愛用の電気ストーブ

# 椎名麟三の思索のあと

紅野謙介

本誌第1号、第2号に載せた「椎名麟三講演メモ」は全部で三〇種類に及ぶ。タイトルがつけられているものが五種類、それ以外のメモが二五種類である。講演のための原稿下書き、心覚えにあたる資料類である。なぜ、それが貴重な資料なのか。それには椎名麟三の文壇デビューとその反響の大きさを説明しなければならぬ。

作家としての椎名の活動は、一九三八（昭和一三）年までさかのぼることができる。この年に小説を書き出しているが、まだ習作で活字になるにはいたらなかった。初めて活字にすることができたのは、一九四一（昭和一六）年一月、同人雑誌「新創作」においてである。「新創作」は一九三九（昭和一四）年七月の創刊。

も断られた。筑摩書房では編集長だった白井吉見の即断で掲載が決まった。

この一挙掲載によって新人作家として注目を集め、四ヶ月後には、「重き流れのなかに」を同じ「展望」（一九四七年六月）に発表。「深尾正治の手記」（「個性」一九四八年一月）などを出すかたわら、同年同月に『重き流れのなかに』（筑摩書房）と『深尾正治の手記』（銀座出版社）の二冊の創作集をあいっいで刊行した。いかに評価されたかが想像される。その後も悪戦苦闘しながら、六月に長篇小説『永遠なる序章』を河出書房から書き下ろしで出した。

ちなみに三島由紀夫の『仮面の告白』も同じ河出書房の書き下ろし長篇小説シリーズの一冊である。刊行されたのは一九四九（昭和二四）年七月で、『永遠なる序章』の一年後。その直前、大蔵省に勤務していた平岡公威（三島の本名）の文学志望に懸念を抱いた父・平岡梓は、わざわざ鎌倉文庫の編集者であった木村徳三のもとを訪ね、「……あなた方は、公威が若くて、ちよつと文章がうまいものだから、雛妓、半玉を可愛がるような調子でごらんになっているのじゃありませんか。あれで椎名麟三さんのようになれるものですかね。朝日新聞に載るような一人前の小説家になれますか」と聞いたという（『文芸編集者その遣音』、TBSブリタニカ、一九八二年六月）。まさに高級官僚が息子の行く末を心配し、「一人前」として比較対象にあげるくらい、「椎名麟三」の名前は一般に知られたのである。

初めは「創作」というタイトルだったが、翌年、改題した。同人には寒川光太郎や船山馨、佐々木翠らがいた。しかし、原稿を書いてもなかなか掲載にいたらなかった。同人間でも椎名の小説は評価を得られなかったのである。

それでも船山馨は椎名の文学を買っていた。一九四二（昭和一七）年には椎名の長篇小説の原稿を河出書房に持ち込んだが、時局に合わないということで不採用。そのまま預けられた原稿は戦災で烏有に帰したという。

椎名麟三の名が知られるようになったのは、「展望」（一九四七年二月）に掲載された「深夜の酒宴」からである。これももともとは船山の勧めで、あちこちの出版社に持ち込まれたが、いずれ

新人作家が突然、クローズアップされて、文壇に振りまわされることは文学史をみても決して珍しいことではない。文壇や出版社はつねにそうした新星の登場を待っていた。敗戦直後は、既存の価値観や伝統的な規範がいったんすべて懐疑の目を向けられたときである。政府にも軍隊にも裏切られた人々は、とりわけ信頼すべき言葉と、経験に裏打ちされた確かな思索を待ち望んでいた。椎名麟三はそうした期待を集めた稀有なひとりだった。

では、椎名麟三の小説はどのようなものだったか。実質デビュー作の「深夜の酒宴」を例に見てみよう。舞台は両国の運河沿いで、焼け残った倉庫を改修した貧相なアパートである。その地名を聞けば、東京の下町が二年前の大空襲によってどこまで焼き尽くされたか、多くの読者は共有していたはずである。

刑務所の病棟にいたことがある「僕」には、そのアパートの一室は光も射さない、独房のように感じられる。その眼差しに、希望もなく、疲労と絶望を漂わせたアパートの住人たちが描き出される。隣の部屋に住むのは、窃盗の前科二犯である荷扱夫とその妻と子どもである。彼女は喘息持ちで、夜中、ずつと咳き込んでいる。暴力的な夫を抱え、彼女は昼間はのべつ愚痴と感傷にひたっている。反対側には謄写版原紙の製版を仕事にしている戸田とおぎんの夫婦がいる。戸田は怠け癖があり、「僕」としばしば議論をする。しつかり者のおぎんはアパートの管理人代理と女中役をつとめている。おぎんはつねに戸田に文句を言い続けている。向

いの部屋にいるのは加代という売春婦である。夜な夜な若い男が訪ねて騒がしい。

アパートを所有しているのは「僕」の伯父で、かつて「僕」は伯父のもとで働いていたが、ある件で逮捕されて刑務所に入れられたときにその会社をつぶす羽目に陥った。だから伯父は、ずっと「僕」を「罪人」だといひ、「恥を知れ」「首をくくればいい」と罵る。そして加代はその伯父の妾だった女の連れ子の娘だという。この出口のない絶望的なアパートでの日々が描かれ、作中で住民二人が栄養失調や病気で亡くなる。伯父から悪罵をあげせられた「僕」は渡された町内会の紅白の綱を自分の首にまいて絞める真似をする。それを見ていた加代が笑い声をあげる。

こんな一節がある。

いや、これらの人々は僕に深い絶望を与えるのである。僕の心のなかにある或る憧憬を救いようのない絶望に陥れるのだ。だが、それが却つて今の僕には快い。僕は自分の絶望を愛しはじめているのである。勿論その愛は憂鬱だ、だが憂鬱という奴は、夜寝床へ入るときのような楽しさを与えて呉れるのである。

椎名麟三の絶望は決して意匠ではない。警察官の父と、女中をして母のあいだの私生児として生まれ、母は自殺未遂を何度か重ね、実際に最後は自殺に成功した。両親の不和のなか、中学を退学して家出し、野宿をしたり、見習いコックや出前持ちなど

ぜキリスト教を信じたことができたのか。

椎名麟三の肉声を聞きたい。そういう声が押し寄せ、一九五〇年代になると椎名はさまざまところで講演に呼ばれるようになる。冬樹社の『椎名麟三全集』別巻の「年譜」は、斎藤末広による実に丹念な労作だが、たとえばその一九五二（昭和二七）年の項を見ると、五月に東京大学の五月祭で、六月にはYMCAと國學院大學で、七月には名古屋、横浜YMCAで、八月には箱根、伊豆下田、東電文化会館で、十一月には京都大学、同志社大学、文芸首都の会東京支部例会で、なんと十一回の講演が記録されている。おそらく、それも一部であろう。他の年にはいろいろな大学はもちろん、高校での講演も記載されている。



1952年11月、京都大学での講演時

の仕事を取つたりしたこともあった。母の何度目かの自殺未遂を契機に、家にもどり、宇治川電気鉄道（現在の山陽電気鉄道）で車掌となった時期もあった。しかし、このとき労働運動に参加。日本共産党に入党したが、二〇歳のときに検挙され、さんざん拷問を受け、懲役四年の一审判决を受けた。控訴して未決囚となったが、一九三三（昭和八）年に転向し、懲役三年執行猶予五年の判決を受け、釈放された。それから十年近く、表だって仕事につくことはできず、筆耕のアルバイトをしながら、結婚した妻寿美の経営するおでん屋で生計を立てたという。ニーチェ、ドストエフスキーが文学への導きの糸となった。

イデオロギーも思想も、もちろん自分自身も信じられない。戦後民主主義にも、そして椎名がかつて参加した左翼運動にも絶対的な共感はない。戦争末期に世田谷区松原に移り住んだが、その直後には妻の実家のあった本所区は東京大空襲で焼け野原になった。自分の過去は焼け跡と廃墟ばかりがつづいている。しかし、その一方で、この文章には絶望の虚妄、居心地のよさをねじれたかたちで凝視するまなざしがある。それは絶望をつきぬけたところに、「ほんとうの自由」「ほんとうに生きる」場所への希求につながっている。

椎名麟三は、こののち一九五〇（昭和二五）年一二月、日本基督教団上原教会で赤岩栄牧師のもとで洗礼を受け、キリスト教に入信した。ここまで深く絶望し、絶望の認識を深めた作家がな

そうした背景を見ると、椎名麟三の講演メモがこれほど多く残されていた理由も分かる。今号に収録されていた「椎名麟三講演メモ11」を見てほしい。戦時中、文学活動を開始した椎名は、さかんにさまざまな実作者の小説入門を読んだという。木村毅『小説研究十二講』（新潮社、一九三三年）、加藤武雄『小説の作り方』（新潮社、一九三六年）、川端康成『小説の研究』（第一書房、一九三六年）、『小説の構成』（三笠書房、一九四一年）など。そして違和感を抱いた。そこには「朝起きて顔を洗って、朝御飯を食べて、会社へでかけたというようなことを書いてはいけないといういろいろな禁止事項」が出ていた。「私たちの日常生活で、習慣的となつているようなことは書くな」。しかし、ほんとうにそうだろうか。「深夜の酒宴」では、禁止事項を犯して、「わざと、むやみやたらに繰返し」という。日常を生きているということがどれほどたいへんか、人間生活においていかに重要であるかを考えていたからである。

敗戦後の食糧事情を想像してみよう。交通網はもちろん、物流が寸断されたため、食材は都市に流通しなくなっていた。都市生活者にとって食料の調達は必須のことになっていた。政府は配給制によって需給調整をしようとしたが、それは戦地や旧植民地から引き揚げてきたものたちを加え、人口が一時的に増大した日本国内では焼け石に水に過ぎなかった。配給の行列に長時間、並び、

少ない食料を手に入れることが人々に欠くべからざる習慣になっていたのである。徒労になることが多い待ち時間は、蓄積した鬱憤をはらす場にもなる。無駄に待ちつづける女たちの愚痴やため息が、情けない男たちの傷口に塩をぬりこむ。「僕」が洩らす「腹が減つて仕方がないんだ」という言葉はこの小説に描かれた絶望が観念的なものだけでなく、まさに物理的生理的なものでもあることをよく伝えている。

「おいしいお団子ですよ。いかがですか。おいしいお団子ですよ。いかがですか。安いですよ。十円ですよ。いかがですか」と、アパートに暮らす幼い子どもたちが廊下で口々に叫んでいる場面がある。このセリフは三度もくりかえされるのだが、それを聞きつけた売春婦の加代が子どもたちに、客からもらったもなかを渡して、これ売りなさいと言ったら、瞬く間に、売ることもなくすぐ口に入れた。加代は「僕」の部屋に入ってきて、笑いこぼしながら、「食べているの！ これ売りなさいと少し上げたら、売らないで食べているの！」と言う。

闇市の売り子を真似した子どもたちのふるまいは、彼らの飢えを物語っている。十四歳の少年は栄養失調で亡くなった。日常の習慣とは、それを成り立たせる社会的な諸条件があつて初めて維持される。しかし、そのあまりに深刻な飢えがときとして笑いをもたらす。残酷かつ痛ましい笑いである。そしてそうした小説の表現を通して、既存の小説概念に「シヨック」を与えようとした

のである。

人気作家となった椎名麟三は、盟友船山馨と、一九四八年五月に「次元」という雑誌を創刊している。わずか五号で終わってしまった雑誌だが、「われわれの時代に対する真剣さに於て、無名の人々の発言を発掘し、雑誌に発表することによって、一つの社会的存在までに高めたい」という目的を掲げた。実際に、創刊号には荒本守也の「アンティ・クリストの誕生」、第二号には安部公房「異端者の告発」、第四号には福田恆存の長篇戯曲「最後の切札」が掲載された。安部はまだ新人で、福田は批評家としてのみ知られていたが、劇作家としての本領はまだ発揮していなかった（「キティ颯風」が発表されるのは一九五〇年一月）。荒本にいたつてはこの長篇評論を脱稿したあと、腸閉塞であつけない死をとげ、椎名を悲しませた。戦後派文学は、花田清輝のいた真善美社の「綜合文化」や、河出書房の「序曲」など、新しい文学表現につねに門戸を開こうとしたが、「次元」もそこにつらなっていたのである。

椎名の講演活動はこうした小さな運動ともつながっている。講演メモを読んでいくと、いかに椎名が真正面から大きな課題に取り組んでいることがわかる。「この世のなかには、ほんとうの自由も、ほんとうの救いもない」、自分は小説でそう書いている。とすれば、「この世のなかには、生きて行く意味がない。生きて行く意味がないならば、だから当然小説を書くという意味もない」

ことになる。最終的には、自分の書いた小説から「何故死んでしまわないのか、という問いが跳ねかえつて来る」という。

先にふれたように、椎名の母は自殺未遂をくり返し、実際に自殺して亡くなった。生と死の境界線を行き来して、向こう側に落ちやすい人だったのだろう。不実な父を抱えながら、椎名はこの母に育てられ、成長した。左翼運動による逮捕と獄中生活をへて、転向後はみずからも自死の誘惑にかられた。戦争により死はいたるところに存在し、数々の黒焦げの遺体となって目の前にも現れた。おそらく、大なり小なり、戦争をくぐりぬけた人々には、この世に生きて行く意味はあるのか、なぜ死なないのかという問いが冷たい刃のように刺さっていた。講演メモはそうした問いに向き合いながら椎名麟三が重ねた思索の足あとを残している。

もちろん、問いに対する正解はない。椎名は最終的にキリスト

を信じた。椎名はイエスの「復活」がみずからの回心をもたらしたと語っている。イエスの「復活」とは何か。それは講演のなかで何度か説明しているが、それでも分かりにくい。この世の不条理、不合理を見尽くしたなかでイエスは処刑された。すべては無意味だ。しかし、絶望の奥底で、イエスは三日後に甦る。その甦りにおいて、すべての言葉、すべての感情、すべての行為が意味を取り戻す。これを欺瞞だと言う人もいるかもしれない。正否はべつとして、こうした思索家の言葉はやはりわたしたちの心をとらえる。わたしたち自身をさらなる問いに導くからである。ウクライナやガザの惨状が報道されるたび、わたしたちは同じ問いの前に立たされる。椎名麟三がしばしば使った「堪える」という言葉が身近に感じられるのはそんなときである。

（日本近代文学研究者）

# 「石川淳日記」一九五二年～五四年分について

山口俊雄

昨年度末、世田谷文学館所蔵「石川淳日記」の一九五〇年・五一年分が翻刻・公開されたのに引き続き、今回、残りの一九五二年～五四年分も翻刻・公開される。

作家という個人事業主としての営業活動に関わる必要不可欠な記録、備忘録としての性格は基本的に変わっていない。ただ、この期間の特に後半、転居や離婚といった私生活上の大きな転換が生じていることもあってか、一九五三年十二月あたりから記載が間遠になり、記録としての網羅性は残念ながら減退してゆくことになる。

以下、拙稿では、(一) 洋書から古典籍にわたる書籍の購入状況、(二) 執筆活動、(三) 他作家らとの交流、という大きく三つの面に着目して、「石川淳日記」一九五二年～五四年分の特徴をスケッチしてみよう(引用文中の「」内は、山口による補いである)。

## (一) 書籍の購入

二月二十二日 サルトル(二冊)

三月二十八日 ヴアレリー、リュシアン・ローラ

四月八日 ガブリエル・マルセル、カミュ、ヴァレリー、ルネ・クレール

四月二十八日 クロード・アヴリーヌ

五月二十七日 《フランス書七冊》タイトル等不記載

七月十五日 ヴアレリー、アルマン・ホーグ

八月十三日 フランソワ・モリアック、ヴァレリー

九月二十八日 モリアック、サルトル

十月十日 マルタン・デュ・ガール、ヴァレリー

十一月十七日 ピエール・ド・ボワデフル、ヘンリー・ミラー

十二月二十二日 エチャンブル、マックス・ブロット

一九五三年一月二十六日 アンジェロス、「新フランス評論」

アランへのオマージュ号

三月十四日 ヴアレリー、ジャン・スレロール、ミシエル・

カルージュ、リルケ、ジッド、詩のアンソロジー(一冊)

四月十一日 クローデル、ジャム、リルケ

五月二十日 ヘンリー・ミラー、アルベール・ラザール、モリス・ペメル

七月二日 モリス・ペメル(注文書)、『プチ・ラルース』

八月二十三日 サルトル

九月二十八日 クロード・モリアック

(購入場所不明 一九五三年後半頃 ルネ・ラング、ジャン・ジュネ)

## 洋書

前号に、《作家である以上、書くために読まなければならない。とりわけ石川淳のようにブッキッシュな作家の場合、なおさらである》と書いたが、今回翻刻分にも多数記載されている。すべてフランス語文献である。

購入書店、日付、著者名を網羅的にリストアップしておこう。

## 丸善

一九五二年一月二十八日 コクトー

八月五日 「新フランス評論(La Nouvelle Revue Française)」

ジッド記念号

一九五三年一月十九日 ジッド、マルタン・デュ・ガール

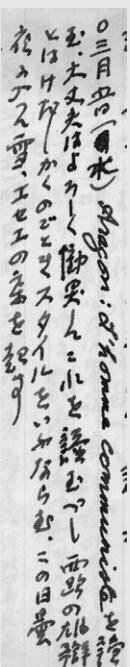
## 紀伊國屋書店

一九五二年二月三日 ミシヨール、ヴェルコール、マルセル・

アラン、ジャン・デュトール

前号の時期もそうだったが、やはり丸善よりも紀伊國屋書店から購入することが圧倒的に多かったことが分かる。

読後感の記載は少ないが、例えば、一九五二年三月五日、《Aragon : L'homme communiste》を読む、大丈夫はよろしく働哭してこれを読むべし 西欧の雄弁とはけだしかくのごときスタイルをいふならむ》とあり、読了したアラゴン『共産主義的人間』(一九四六)について、この日記の中では異例にも見えるかなり感情的な文言が記されている。紀伊國屋書店で購入したのは一九五一年九月八日のことだったが、読了後直ちに四日後の同月九日欄筆のエッセイ「歌う明日のために」で主題的に取り上げられることになる。



同年十月三十一日、『夜 Roger Martin du Gard : Notes sur Andre Gide』読了。ジイドとロン・ミュニスムについて記したところおもしろし(100)ジイドはおそらく高齢にはいさゝかの盲目的行動ありてもさして配慮すべきにあらずと考へたるものゝ如しとある。同年一九五一年二月十九日に物故したジッドについて、「ジイドむかしばなし」(「文学界」一九五一・四)を書いた石川だが、関心を持ち続け、ジッド没後に刊行されたばかりの新刊書にも目を

通し、興味を引かれた点を記している。

この書籍が広く読まれるべきと感じたのか、福永武彦に邦訳を勧めたことが日記の記述から分かる。

一九五三年一月一日、《福永武彦にはがきを遣る、出版についての用談あればなり》。同月十二日、《福永武彦に書を裁して遣る、翻訳出版についての件なり》。同月二十六日、《福永武彦来話。「略」文春クラブにて福永を鷺尾洋三に紹介す 翻訳の件也》。五月二十八日、《加藤周一福永武彦より来信、加藤は南仏カテドラルの美を論じ福永はローヂェマルタンデュガールの小著の翻訳成れるを告ぐ》。石川は文藝春秋新社の鷺尾洋三に福永を紹介、一九五三年九月、文藝春秋新社から、ロジェ・マルタン・デュ・ガール(著)、福永武彦訳『アンドレ・ジイド：1913-1951』が刊行された。

読後感是他に、一九五二年三月二日(サルトル著書)、同年六月十日(アラン著書)に記されている。

他に取り上げておきたいのが、一九五三年一月十八日、《夜旧訳法王庁の抜穴を一関す岩波文庫より再刊のむねをいひおこせられた也》。翌十九日、《午後日本ばし丸善におもむきて Andre Gide : Les Caves du Vatican [略] を購ふ Cavesは文庫本増刷について参考とするため也》とあることである。増刷に際して象嵌訂正を視野に入れた再読であろうが、他の訳書の再刊——例えば、アナトー・フランス『赤い百合』(三笠書房「三笠文庫」、一九五三・六)——についてはこのような記述が見当たらず、ジッド「法王庁の

抜穴」への石川の思い入れが窺われる。同年四月一日、《岩波書店より文庫本法王庁の抜穴十部送り来る、十余年ぶりにての増刷也》と言及がある。

## 和書

次に、古典籍の購入である。古書店ごとに購入日を網羅的に拾うと次のようになる。

文行堂(上野) 一九五三年二月五日

山本書店(神田) 一九五三年二月十六日、三月三十一日、六月十七日、七月十日(購入書の到着)

村口書房(神田) 一九五二年四月二日\*、六月十七日、十月一日\*、十一月十一日、十二月一日、二十四日、一九五三年三月六日、五月二日、十月二十二日\*

一誠堂書店(神田) 一九五三年三月八日

竹苞書楼(京都) 一九五三年十月十四日

店舗不詳(本郷通り沿いの古本屋) 一九五三年六月五日

村口書房の\*を付した日付は、石川が強く関心を示していた蜀山大田南畝に関わる書籍等の購入日である。

他にも、一九五二年三月三十日、《神田古書会館に琳琅閣古書売立の下見におもむく、ほとんど見るべきもの無し》といった記述

もあり、熱心に古典籍漁りをしていたことが分かる。

読後感も拾っておこう。

一九五二年十一月二日、《南畝手写本長祿記応永記を読む 金閣銀閣建立の世に私闘の殺戮絶えず 政争のごときものか その規模の小なること生活の貧困を語るに似たり》とある。これら「応永記」「長祿記」といった南畝手写本の軍記物はのちの「修羅」(一九五八)のヒントの一つになったと思われるが、その時代の政治に見られる《生活の貧困》を逆に乱世の面白さを語る小説へと転じた石川の着想が興味深い。

一九五二年十二月五日、《夜南郭先生燈下書を読む、作詩作文の法を論じてところへ聴くべきの言あり、僻韻險句を忌むべしといへるは詩にあつてはまさに然らむ 散文にては必ずしも深く忌むべからざるにや》。ここに挙がる「南郭先生燈下書」はこの当時に既に近代の活字本の翻刻があり、石川の購入日も確認できず、石川の接した書物形態は不明であるが、韻文に対する散文の自由への言及が興味深い。

## (二) 執筆活動

次に、石川淳の執筆活動に関わる記述から注目し値する点をいくつか拾い出してみよう。

一九五二年四月七日、《夜来小説他人の自由の稟をついで暁に

成る、五十七枚、別冊文藝春秋に寄せむがためなり、ことし小説を草したるはこれを以てはじめとす》とある(傍線、山口。以下同じ)。その一つ前に書かれた小説「春の葬式」(別冊文藝春秋一九五二・二二・二五)は一九五二年二月十日擱筆であり、「他人の自由」(別冊文藝春秋一九五二・四・二五)擱筆までおよそ四ヶ月近くが経っている。そして「他人の自由」の次に書かれる小説「乞食王子」(文藝一九五二・八)の擱筆が六月十六日、その次の小説「アルプスの少女」(文藝同・一一)の擱筆が九月二十四日、あと年内に書かれた小説はもう一作「蜘蛛」(別冊文藝春秋一九五二・一〇・二五)のみであり、その擱筆が十月十四日となる。

従って、一九五二年に書かれた小説は、計四作にとどまる。なぜこれほどまでに小説執筆が減ったのか。それは、エッセイ執筆に力を入れたからである。ひと口にエッセイと言っても三種類を数えることができる。

まず、「首尾」(「群像」一九五二・三)、「歌仙」(「群像」一九五二・六・七)という連句を盛り込んだエッセイ。次に、前年から続いている「文学界」八月号まで毎月掲載され、のちに『夷齋俚言』(文藝春秋新社、一九五二・一〇)にまとめられるエッセイ群、さらにもう一タイプ、「文学界」九月号から翌年八月号まで毎月連載される《夷齋清言》というエッセイ群がある。

「首尾」「歌仙」は、自作の連句を提示しつつ、句作の経緯や句意の説明を加えたものである。独吟の連句を詠むところから始め



て、それなりに手間が掛かるであろうことは容易に想像が付くし、日記の文言からもある程度大変さを窺うことができる。

あとの二つの連載エッセイであるが、〈夷齋俚言〉がもっぱら時事・政治を扱う一方、〈夷齋清言〉は文芸・文化・文事を扱い、主題的には大きく異なるのだが、いずれも必ず具体的な書物（洋書・古典籍）を紹介しながら論じるという点は共通しており、すなわち、これらのエッセイを書くために、書物入手（洋書・古典籍）し、読み、そして自分の考察をまとめるという過程を踏まねばならず、それなりの時間とエネルギーを要することは見やすい。

このように手間暇のかかるエッセイに石川が傾注していた以上、小説の執筆が減るのはやむを得まいが、数少ない小説四作の内、児童文学翻案（パロディ）ものが二作を占める点を考慮すれば、ここに浮かび上がってくるのは、小説に消極的になっていくというよりも、小説では現代小説だけでなく翻案ものにも、エッセイでは、連句に時事エッセイに、そしてそれとは一八〇度方向転換したような文事に関わるエッセイに、とさまざまな試みにチャレンジする石川淳の姿である。

一九五二年六月二十五日、《菅原国隆「新潮社」来話、原稟依頼されたれども確約せず、夜文学界に寄せるためにエセエ革命とは何か二十八枚脱稟、エセエの政治談にわたるものはこれにて打切」とし来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり」とある。傍線部のチャレンジ宣言の爽快さは言うまでもないが、新

潮社からの原稿依頼に確約を与えないところから、いま一番やりたいことに傾注したいという姿勢が窺われて興味深い。（このあと、「鳴神」（「新潮」一九五四・三）まで石川は新潮社の雑誌に全く書かない。）

一九五三年に入ると、石川はまた新しい試みに手を染める。四月一日、《雨月物語を読む》これが新釈を出せよと別冊文藝春秋の請あれば也」とあるが、〈新釈雨月物語〉の連載である。

実は石川は過去に「雨月物語」現代語訳を出版したことがあるのだが（『現代訳日本古典 秋成・綾足集』小学館、一九四二）、鈴木貞美が《全くの新訳と考えるべきである》（「解題」『石川淳全集 第十七卷』筑摩書房、一九九〇、五七二頁）と述べる通り、訳文は全く異なっており、新しい試みであることは動かない。「吉備津の釜」から「蛇性の姪」までの九篇が隔月刊の「別冊文藝春秋」第三十三号（一九五三・四・二八）から第四十一号（一九五四・八・二八）までに掲載された。

「群像」一九五三年三月号に「鷹」が掲載される。「鳴神」（「新潮」一九五四・三）などとともに〈革命小説〉と括られることもあるこの作品は石川淳の代表作の一つと言いついて得る作品であるが、日記か

ら着想から完成までの経緯を窺うことができる。

前号に翻刻された箇所であるが、一九五〇年七月十六日、《邦訳エーリヒ・ケストナー「エミールと軽わざ師」新潮社」これも本を読む、さしたることも無き本ながらこの筆法をもつてコミニニスト少年物語を書かばおもしろかるべしとおもふ」とある。石川が手にしたのは高橋健二訳『エミールと軽わざ師』（新潮社、一九五〇・六・三〇）だが、もちろんこのケストナー作品自体はコミニニスト少年の物語ではない。

このアイディアが実現したと仮定して石川淳作品史をたどってみると「鷹」「鳴神」がそれに相当すると考えられる。最初の着想から三年ないし四年近くもかかることになるが、一定のヴォリュームのある中篇小説に結実するまでにそれなりに時間を要したということだろう。『エミールと軽わざ師』の子どもたちが、問題解決のために力を合わせる中、大人の思惑を知り、世の中の仕組みを学びながら対処法を編み出して行ったように、「鷹」の国助は失業を大きなきっかけとして、「鳴神」の柿夫は軍需転換を目の当たりにして、体制の実態を学び、世の中の仕組みの把握が進むとともに自分の果たすべき役割に目覚め、同志たちと連帯して行く。《この筆法》として括られるべき共通点はこのあたりだろう。

「鷹」について、その後の経過は、一九五二年十一月一日、二十四日、一九五三年一月二日、七日、十四日の記述にたどれるが、二回に分けて「群像」担当者に原稿を渡し、特に後半部分に難渋

したことが分かる。名作の誕生は難産だったのである。

表題作として収録する『鷹』（講談社、一九五三・七）が、二刷り（千五百部）、三刷り（二千部）と増刷りを重ねたことが、同年八月二十五日、十一月九日の記述から分かる。

海外の児童文学から着想を得た中篇小説の執筆は、おそらく児童文学翻案作品の執筆というそれ自体新しい試みとも関係し合いながら、こちらもまたこの時期の新しい試みと数えられよう。反響も上々であった。

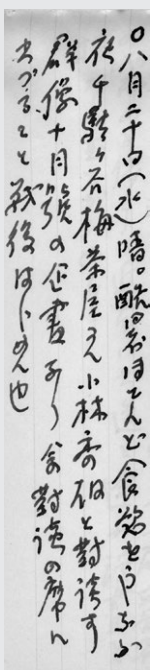
単行本『夷齋筆談』（新潮社、一九五二・四）についても触れておこう。初出の連載の成立までの紆余曲折には前号で触れた通りだが、一九五二年五月二日、《夷齋筆談二部届けらる、この本は発売とともに板元にては売切のよし》という記述が目を引く。限定一千部、和本仕立ての高価な書籍で、石川の造本へのこだわりを押し出した印象が強かったが、しっかり売れたわけで、版元サイドとしても手応えを感じたようだ。さればこそ、文藝春秋新社の出す「文学界」連載であったにもかかわらず、『夷齋清言』は新潮社が出版を申し出、こちらもやはり限定版和本仕立てで上梓されることになるのである。

一九五二年に入っの『夷齋筆談』関係の記述は、一月三十日、二月一日、十九日、二十七日、三月七日、十五日、十八日、二十二日、四月三十日、五月二日、十六日、六月十日にある。そして次に単行本『夷齋清言』（新潮社、一九五四・四）である。

初出の連載が《来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり》との宣言とともに始まったことは既に見た。一九五三年七月十日、《新潮社新田敏より電話にて夷齋清言を限定板にて上梓すべきよしを告げ来る》とあり、先ほど触れたように単行本化を新潮社が引き受けることになる。九月二十五日、《夜帰宅せるに京都の紙屋（岡忠）来る 夷齋清言の用紙の件也》とあり、使用する紙を念入りに選定していることが分かる。他に、七月十四日、一九五四年一月六日、二月五日、十七日、十八日、二十五日に言及がある。

ここで、この時期の石川の「初めて」エピソードを二つ拾っておこう。

一九五二年八月二十日、《夜千駄ヶ谷梅茶屋にて小林秀雄と対談す 群像十月号の企画なり 余対談の席に出づること戦後はじめて也》とある。「現代文学の諸問題」と題して「群像」十月号に掲載される。



もう一つ、一九五二年七月二十五日、《夜NCBの迎へに依りてその社の録音室におもむきはじめて放送をぶつ、講演といふこともまた初めて也、漫然たる随想を語る。》ラジオ放送への出演である。

る。ラジオ出演への言及は、他に、同年七月二十四日、九月二十六日、二十八日、十月七日、十月十二日、十四日、十九日、一九五四年二月十一日、十六日にある。

### (二) 他作家らとの交流

次に、同業者である作家・文筆家との交流も見ておこう。日記本文にはさまざまな名前が出て来て楽しめるが、紙幅の都合もあり、数名に絞ることにする。

#### 永井荷風

一九五二年十二月二十二日、《マンハッタンにてはじめて永井荷風に逢ふ》とある。「断腸亭日乗」には《十二月廿二日。晴。午後中央公論社。夜銀座マンハッタン》（『荷風全集 第二十六卷』岩波書店、一九九五、一六六頁）とある。石川は同年四月からこの店で飲むようになり、荷風はもつと遅く同年十一月中旬から飲むようになったようで、いずれ顔を合わせる成り行きだったわけだが、この時、荷風は七十三歳、石川は五十三歳。その文業を評価し私淑し続けてきた荷風に初めて対面することとなり、石川はいったいどのような言葉を荷風と交わしたのだろうか。

とを告ぐ。その著『飢餓同盟』を贈らる。講談社の招きに応じて安部と、ともに池袋の沖繩料理におもむき沖繩をどりを観る。高橋新吉山之口猷に逢ふ》とある通り上梓に至ったわけだが、ゲラ刷への朱入れにどのくらい石川の意見が反映されたのだろうか。

#### 山内義雄

次に触れておきたいのが、作家ではないが、石川の東京外国語学校仏語科の先輩に当たり、石川の福岡高校への就職にもあずかった山内義雄（一八九四〜一九七三）との再会とそれに続く交流である。

一九五二年三月二十八日、《新宿紀伊国やにPaul Valéry : Souvenirs Poétiques, Stalin, La linguistique et l'impérialisme russe. Par Lucien Laurat.をあがなふ、その書庫の中にてたまたま山内義雄に逢ふ、じつに十数年ぶりなり》。十数年ぶりの再会が、洋書漁りに来た書店の書庫だったとは！

同年六月二日、《白水社泉川某来話 山内義雄訳窄き門の新版を出すにつきその新潮社刊の初板に附したる余の跋を再録せんことを乞ふ おもへば余がこの跋文を撰したるは関東大地震の年の五月に係る、すでに三十年のむかし也 余かかる若年の述作をふたたび出すことを好まざれども山内との旧誼をおもひこれを承諾す、但原形のまゝにて一字一句をも改めず、山内にはがきを書き句を添へてやる さみだれやふと見つけたる古日記》。七月二十四日、

#### 安部公房

石川のサポートなどもあつて芥川賞受賞作家となったあとの今回の時期でも石川と安部公房との交流は依然として続き、それほど衰えない。一九五三年一月十四日、十六日、二月二十一日、二十五日、三月十三日、四月五日、十六日、二十八日、五月六日、二十二日、六月十四日、七月八日、八月十三日、九月九日、十月二十一日、十一月二十日、二十二日、十二月十一日、一九五三年一月五日、二十九日、二月十三日、四月十四日、六月十八日、八月三十日、十月一日、二十六日、一九五四年一月五日、八日、二月六日に、安部公房への言及がある。

これらの中から安部のある作品をめぐる興味深いエピソードを拾っておこう。

一九五二年五月二十二日、《留守中窪田啓作安部公房来れるよし、窪田はその訳著エリユール詩集をまた安部はその書下し原稿を置いて去れり》とあるが、これは「飢餓同盟」の原稿であり、石川のチェックを求めて持ってきたのである。同作への次なる言及は一九五四年一月八日、《安部公房書下し小説飢餓同盟のゲラ刷を読む これ板元講談社より送り来れるものも 部分おもしろけれども全体いまだしの感あり》というもので、石川の評価もさることながら、ゲラ刷が著者その人ではない石川に送付される手はずになっていた事実が面白い。その日から一ヶ月足らずの二月六日には、《午後安部公房来話 さる四日立春の日に女子誕生したるこ

《午後白水社瀬尾正明来話、山内義雄使として窄き門並にコニヤツク二本届け来る、「略」山内にはがきに句を書きて遣る、めぐり来て二十九年の涼しさよ 註 新板窄き門は初板の時より二十九年目にて初板に寄せたる余が跋文もここに再び剗削に附されたり》。再会に続いて今度は約三十年ぶりの再刊の話。挨拶の発句も含め、懐旧の情に溢れた記述である。

翌一九五三年一月十六日、《帰来山内義雄より早稲田の大学校に出講せむことをすゝめられたれば教師商売には気乗せざれども旧友の言無にしがたくともかくにもとて履歴書といふものをしてたゝむ すなはち感あり／ 五十年かく恥も無き寒さかな／ 又／ かく恥のつも利てこゝに五十年あと白雪の消なば消えなむ》  
一月二十一日、《山内義雄より来信。早稲田大学教授会にて余の出講を議決したるよし これも浮世の義理なるべし 山内に承諾のはがきを遣る 鳩舌をあやつる芸の日永かな》。

旧友からの依頼を《浮世の義理》と引き受ける石川だが、かつて福岡高校でのフランス語講師を一年足らずで辞め、作家稼業に転じた者として、さまざまな思いが脳裏に去来したことだろう。発句二句、狂歌一首が生み出された。

こうして石川は早稲田大学政経学部で一九五三年四月から一九五五年三月までフランス語非常勤講師を務めることになる。関連記述は、一九五三年一月二十六日、四月六日、二十二日、五月六日、二十日、六月十七日に見出せる。

#### 句歌

約三十年ぶりに《教師商売》に就くに当たって〈句歌〉が生み出されたのを眺めたタイミングで、〈句歌〉について触れておこう。以下の日にちに石川自作の〈句歌〉が記されている。

一九五二年

一月一日（発句と狂歌）、二日（首尾）へ）、六日、十六日、三月十一日、十七日（歌仙）へ）、二十五日、四月十八日、二十日（山川朝子宛）、五月七日、十一日（加藤周一宛）、十七日、六月二日（山内義雄宛）、五日、十四日、十六日（堀辰雄宛）、七月十五日（小林秀雄宛）、二十四日（山内義雄宛）、十月二十五日（堀口大学宛）、十二月十九日

一九五三年

一月一日（三ツ物）、十日、十六日、二十一日（山内義雄宛）、二十三日（西東三鬼宛）、二月二日（西東三鬼宛）、五月九日、七月九日、十月十二日（久保田万太郎との付け合い）、十五日（京都・芸妓宛）、十九日、二十八日（永井龍男宛）

一九五四年

一月一日（三ツ物）、十七日（永井龍男宛）

公表の予定のないまま備忘のために記した句歌は私的なものだし、礼状などに添える句歌なども、他者との交流の中に置かれる

という意味では半ば公的な面もあるが、公刊とは言えない。そんな中、注目したいのが、先に「(二) 執筆活動」のところで、エッセイの「タイプ」として触れた「首尾」「歌仙」という一九五二年の試みである。

「首尾」については、一月二日、六日、十六日の記述を追ってゆけば、正月二日に試みた三句仕立ての〈三ツ物〉の連句を、「群像」に寄稿すべく十二句からなる〈首尾〉に膨らませて行った経緯がたどれ、「歌仙」については、三月十七日、四月九日、四月十八日、五月十七日の記述を追ってゆけば、石田波郷を含む酒席の同席者に三句を贈ったという座興をきっかけに、こちらも「群像」に寄稿すべく〈歌仙〉三十六句の独吟へと膨らませて行った経緯がたどれる。

「首尾」も「歌仙」もジャンルのにはエッセイと括られようが、おそらくこれらの試みの延長線上に小説「しぐれ歌仙」執筆という約二年後の挑戦、「群像」一九五五年一月に「第一回」が掲載されたのみで中絶した試みが位置しよう。これらのことについては、未発表の続稿の翻刻も含め小池智子・山口俊雄「石川淳未発表原稿「華嚴」「しぐれ歌仙」続稿・翻刻と解説―世田谷文学館所蔵資料より」（日本女子大学大学院文学研究科紀要）二八、二〇二二・三三 <https://jwu.repo.nii.ac.jp/records/3359>）を参照されたい。

他に、亡き太宰治関係として、津島美知子とのやり取りを拾っておくと、一九五二年三月二十八日、《小山清来話、太宰未亡人の

ために書きたる夷齋狂歌箱書をわたす》とあるが、『夷齋狂歌』という公刊物は存在せず、津島美知子のために特製した一点物だろう。一九五三年三月十一日、《小山清来話、津島未亡人よりのことづけて故太宰治の本二冊（創芸文庫）を贈らる》などからも、両者の関係の継続が窺われる。

#### (四) その他

前号翻刻分でも時事への言及は、朝鮮戦争や金閣寺放火事件、レッドページぐらいとごくわずかであったが、今回翻刻分では、一九五二年五月二日、《昨日のメーデーは一部暴動化せりと伝ふ》といういわゆる血のメーデー事件への言及のみとさらに少ない。

他方、私生活をめぐっては、転居および離婚と、二つの大きな出来事が書き込まれている。

港区芝高輪南町から杉並区清水町の片岡光恵（故片岡鉄兵夫人）宅への転居については、一九五三年一月十七日、《山川朝子来話。荻窪の片岡氏余のために家を借さんといふ、朝子斡旋也》というところから話が始まったことが分かる。同月二十八日、二月五日、八日、十一日の記述を挟んで十二日に転居、十五日、二十八日も関連記述がある（なお、同宅には、安部公房と交流のある勅使河原宏が一九五〇年頃住んでいた）。

もう一つの大きな出来事、離婚については、一九五四年三月

二十五日の記述に明記されている。赤坂区役所とあるのは、旧赤坂区役所庁舎を引き継いだ港区役所赤坂支所のことである。離婚ということがあったことについては、石川自身が「往復書簡 坂口安吾、石川淳」（「新潮」一九五四・一〇）で公表することになるが、日記ということでは、離婚相手の（毛利）米子について、かつて付き合ひのあった伊藤整がその日記の一九五四年十月十三日の記述の中で触れている（『伊藤整日記1 一九五二—一九五四年』平凡社、二〇二一）。

離婚届を出したのと同じ日の記述に、『池田忠雄をその家に訪ひいく子とのことをいふ』とあるのは、その後の再婚相手となる女性の夫に直ちに話を付けに行ったということだろう。再婚相手は、日記では概ね「よし」「A」といった暗号で記されてきた——ただし、一九五二年十一月九日には『池田生子』、一九五三年八月二十四日には『池田活子』と記されている——人物で、一九五四年一月二十七日、二月八日—十日、十七日、二十三日などの記述に關係の深まりが窺える。

以上、許された紙幅の中で、日記を読む際にぜひとも注目しておきたい点について一通り触れてみたつもりである。ご覧の通り石川淳という作家の創作に関わるさまざまな情報が得られる貴重な日記であったが、一九五三年十二月三十一日、『日記を記すに懶くはなはだ怠る』、一九五四年二月五日、『このごろ日記をつけることはなはだ懶し』と、やや尻すぼみ気味となつて行つたのは、実生活上の大きな転機が関わつていて仕方がないとは言え、やはり残念ではある。

しかし、無いものねだりをして嘆く暇があるのであれば、公表された日記から汲み出せるものを汲み出すことにまずいそむべきであろう。石川淳ならびにその作品について、同時代の作家たちとその關係について、同時代の出版事情について、同時代の洋書受容について、同時代の古典籍受容について、同時代の飲食店の事情について……石川淳日記から汲み出せることは実に膨大なのだから。

（日本女子大学教授）

# 資料翻刻Ⅰ

## 石川淳日記

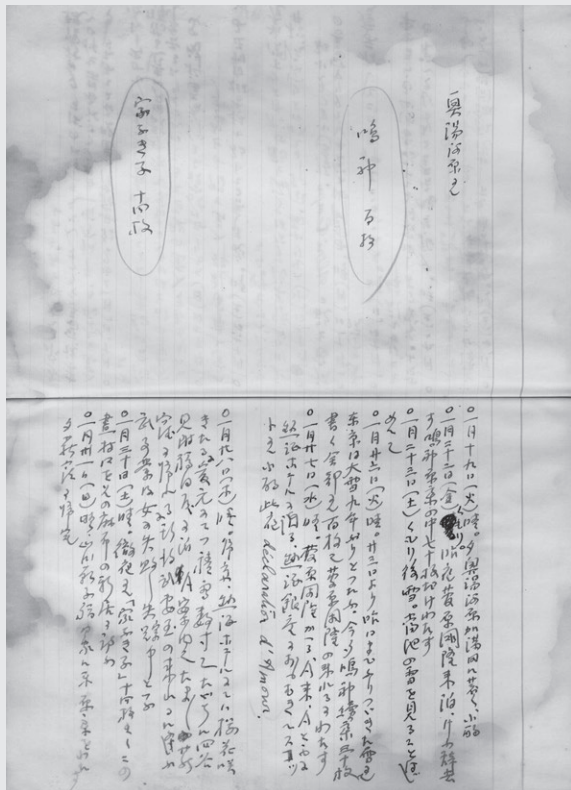
昭和27年1月1日—  
昭和29年8月25日

昭和28年に越した杉並区清水の家の書齋にて



【資料概要】

- 資料番号 129124 《石川淳日記 昭和27年1月1日—12月31日》  
A4判大学ノート（縦300mm×横210mm）50枚綴り、  
縦書、自筆部分54面、ペン書、一部赤鉛筆書
- 資料番号 129125 《石川淳日記 昭和28年1月1日—12月31日》  
A4判大学ノート（縦300mm×横210mm）50枚綴り、  
縦書、自筆部分45面、ペン書、一部赤鉛筆書
- 資料番号 129126 《石川淳日記 昭和29年1月1日—8月25日》  
A4判大学ノート（縦300mm×横210mm）50枚綴り、  
縦書、自筆部分7面、ペン書、一部赤鉛筆書



石川淳日記 昭和29年1月1日—8月25日

三点とも、石川眞樹氏寄贈（令和元年度）。日記本文は大学ノート見開きの右面に縦書で書かれ、左面（縦書なので上段に当たる）には入稿記録、旅行先、メモ書きなどを記載。

本資料は、石川淳（明治三二—二八九九）年〜昭和六二（一九八七）年による昭和二七（一九五二）年、二八（一九五三）年、二九（一九五四）年の自筆日記。前巻で翻刻紹介した昭和二五、六年分の日記（資料番号129123）と同体裁の大学ノートで、書き方、内容（執筆、入稿記録、書籍購入と読書録、外出先での交友、来訪者対応など）もこれを踏襲し、全集未収録の自作句などが詠み込まれているのも同様。ただし、年を追うごとに記載は少なくなっている。

【凡例】

- 漢字の旧字体は新字にあらためた。ただし、人名・固有名詞などは一部表記（旧字）通りとした
- 仮名 表記通り（ほぼ旧仮名、但しカタカナ表記の撥音便は表記通り）
- 数字・記号 表記通り
- 読み易いように文と文の間に適宜一字空き挿入。なお句読点の配置は表記通り
- 外国語 フランス語・英語・漢文の表記通り。適宜訳を（一）で補記した
- 本文中の住所について、個人情報保護の観点から一部を■■■■で表した
- 本文対面頁（上段）に本人筆の脱稿記録、覚書および翻刻者註（\*）は各日末尾に記載
- 註は適宜。本誌上巻で入れた事項、人物は省略。店名は業態が判りづらい場合や頒出店で店名表記が揺れる際に入れた

資料翻刻1

# 石川淳日記

（昭和27〜29年）

昭和二十七年壬辰 一九五二年

○一月一日（火）晴、日あたゝかにして無事さいはひに訪客のわづらはしきものなし、燕居して戸外に羽根の音を聞く 羽根の音冴ゆるも春のたよりかな、夜クローデルとシユアレスの往復書簡を読む、呉竹の夜のいとなみは辰の春 雲の通ひ路ふけて入らなん

○一月二日（水）晴、終日家居、たはむれに三ッ物俳諧をこゝろむ\*  
発句 羽根の音軒に冴えたる寒さかな ワキ 袖ひるがへす色のとりく  
第三句 春さきの物見の支度せはしくて

\*この三ッ物は一月十六日の項に記載のとおり表裏十二句となり、随筆「首尾」  
〔群像〕同年3月号初出、「夷齋俚言」収録 に発表

○一月四日（金）晴。鳩居堂にて色紙をあがなふ、よし田にて小酌、夜三越階上の芝居小屋にて俳優座「ウインゾアの陽気な女房たち」を観る、佐藤美子に逢ふ、帰途鳥森若竹にて小酌、ともに酒をくむもの小林秀雄河上徹太郎今日出海中村光夫\*福田恆存神西清也、よし田にてプーチャンより唐津焼の茶碗をおくらす

\* 中村光夫 文芸評論家、小説家、劇作家

○一月六日（日）雨まじりの雪ふる、山川朝子を世田谷なるその家に訪ひて深更にかへる、さる二日つくりたる三ッ物を色紙に書いて朝子にあたふ、但第三句を春はまた物見の支度とあらたむ

○一月七日（月）晴。銀座よし田におもむきて小酌。この店客あしらひよろしきにつき贈るに河野通勢筆梅花図\*をもつてす 帰途若竹にてまた小酌

\* 河野通勢筆梅花図 本誌「上巻」の昭和二十五年三月十八日の項で入手とある 一幅か

○一月九日（水）晴。昨夜徳田雅彦鈴木貢と銀座にてのみはなはだ疲れたり 今日菅原国隆来話、またともに銀座よし田におもむきて小酌、弁護士正木晃といふひと未知のひとなれどもはがきを寄せ来て余の随筆模倣の効用を愛読せりといふ

○一月十二日（土）晴寒し、終日家居、群像川島勝来話、夜に入つて窪田啓作来話、窪田咄に齋藤寛は窪田妻の伯父にあたるよしにて寛今日にては進駐軍に就職し鶴沼なる某家物置に住みてその状ほとんど虚脱

に似たりといふ

- 一月十四日(月)雨。港稅務事務所より(芝茸手町、神谷町電停前)「事業税」と称して不当の税金を徴収督促に来れるにつき同所長瀬山龍雄宛に抗議を提出す 夜安部公房勅使河原宏桂川寛\*来話、閑談数刻、勅使河原父よりホワイトホース一本クレーヴンA二缶を贈らる
- \*桂川寛 画家。安部公房、勅使河原宏らと「世紀の会」に参加、安部の「壁」の挿画も担当

○一月十六日(水)晴。夜来首尾十八枚を草す、群像三月号に寄せんがため也、首尾十二句左の如し、但はじめの三句はさきにつくりたる三ツ物をもちみたり

羽根の音軒に冴えたる寒さかな

袖ひるかへす色のとりく

春はまた物見の支度せはしくて

二階にひとり觸政\*を読む

物干にながれる月の明けやすき

戸口の声は早立の客

湖上はるか秋のおもひは神にあり

故国の友を文にいましむ

ましはりはもみちの紅と散るものか

鏡台深く残る香水

花のかけ顔は二つにほひけり

絵具の売れる町のうらゝか

この日安部公房夫妻迎へに来りともに三田なる勅使河原蒼風稽古所に於ける新年宴会におもむく 盛会なり 岡本太郎藤川栄子徳田雅彦其他列席す、帰途徳田とともにエスポアルにおもむく 徳田及みな子高

輪に來りて濱田に泊る

上段・首尾十八枚

\* 觸政 明代後期の詩人・袁宏道が著した飲酒指南書「觸政」のこと

○一月十七日(木)晴。群像川島勝来、首尾の草稟をわたす、徳田雅彦と三人にて濱田にて語る

○一月二十一日(月)晴。午後一時より Marcel Carné 製作 Les enfants du Paradis\*の試写を読売ホールにて観る、フランス風の世話狂言にてジャン・ルイ・バロオの演技よし但マリヤ・カザレスはミスキャストにておもしろからず 帰途川島勝と吉田及若竹にて小酌

\* Les enfants du paradis 正しくは Les enfants du paradis 『天井桟敷の人々』マルセル・カルネ監督のフランス映画

○一月二十六日(土)晴。夜来エセエ藝術家の永遠の敵を草しこれを文学界にわたす(二十八枚) 東京温泉にトルコ風呂に浴す 夜花房満三郎\*と新はしにてのむ

上段・藝術家の永遠の敵 二十八枚

\* 花房満三郎 文藝春秋社の編集者

○一月二十八日(月)曇小雨、丸善におもむきつ Jean Cocteau : Le Rappel à l'ordre をあがなふ、この店建物は新築したれども内容貧弱にて昔日のおもかけ無し、窪田啓作を東京銀行に訪ひ近くの喫茶店にて閑談、帰途銀座吉田及烏森若竹にて小酌 よねにすしをみやげにもちて帰る

○一月二十九日(火)曇小雨、ブリッヂストーン館におもむき石橋コレクションの展覧を見る、帰途はせ川にて城左門に逢ひともに神楽坂の待合におもむきて小酌 城芸者をともしなひて飯寓に來り深更にかへる芸者は城のなじみのものと見えたり

○一月三十日(水)晴、終日家居、新潮社より送り來れる夷齋筆談再校を一閱す 今冬あたたかにして大根みな太しと八百やの咄

○二月一日(金)雪ふる、夷齋筆談再校を閲してこれを新潮社にわたす、夜日比谷公会堂にてモンブラン\*ヴィオロン演奏を聴く、伴奏ジョア、この女史のピアノ佳なり 徳田雅彦と吉田エスポアルム小笹\*などのみあるく 徳田は高輪にて濱田泊

\* モンブラン レイモン・ガロワモンブラン。作曲家、バイオリニスト

○二月三日(日)曇、いさゝか寒し、新宿紀伊国屋におもむきてフランスの本をあがなふ。 Henri Michaux\* : L'espace du dedans ; Ailleurs, Vercors : La marche à l'étoile, Marcel Arland\* : Lettres de France, Jean Dutourd\* : Une tête de chien. 帰途銀座よし田にて小酌、飯寓のまへに住む大野といふ青年昨夜今夜ともに佐藤美子の手紙を届け來る、オペラの案内状なり

\* Henri Michaux アンリ・ミシヨ。フランスの詩人、画家

\* Marcel Arland マルセル・アルラン。フランスの小説家、文芸評論家、脚本家

\* Jean Dutourd ジャン・デュートル。フランスの小説家

○二月四日(月)雪ふる。夜銀座におもむきて佐藤美子に逢ふ、乱酔深更にかへる、節分也、美子とは premier baiser 也 (dans la voiture.)

○二月五日(火)立春、晴れたれどもはなはだ寒し、早朝東和商事におもむきてホフマン物語\*の試写を観る、この写真美しくてよし、帰途東京温泉に浴し吉田にて小酌、佐藤美子川島勝に逢ふ。文学界にて借

\* ホフマン物語 マイケル・パウエル、エメリック・ブレスパーガー監督のイギリス映画

○二月六日(水)晴。寒し。終日家居、Jean Dutourd : Une tête de chien を読む、軽妙読むに堪へたり

○二月七日(木)曇。群像川島勝来話、濱田初枝来話 群像より借、濱田に二千円支払、夕方より雪ふりはじむ 夜アニーパイルにて佐藤美子のオペラ「ミカド」を聴く、帰途美子其他と土橋小笹\*しにて小酌、雪ますくふりしきる、美子と品川駅にて別れ積雪を踏んで飯寓にたどりつく

○二月十日(日)晴。Yにはじめて文を遣る。

○二月十一日(月)晴。夕銀座よし田にて窪田啓作と語る。ひとりルビコンにてのむ。帰途由比と三浦とに逢ひまた銀座裏の狭き酒場にて小酌、深夜に帰る

○二月十八日(月)一昨夜来の雪やみたれども曇さむし 山田有勝三木偵\*来話 沢渡恒遺棄出版の件につきて語る、夕銀座吉田にて小酌

\* 山田有勝三木偵 山田有勝、三木偵、沢渡恒はともに同人誌「カルト・プランシユ」に参加

○二月十九日(火)夜来またも雪ふる、新潮社大田美和来話、群像川島勝来話、夷齋筆談三校閲了これを大田にわたす

○二月二十一日(木)晴。山川朝子来話。河出書房の窮状につきて語る。夕交詢社にてフランス活動写真を観る、Marcel Carné, La Clef des songes\*, 窪田啓作安部公房に逢ふ、帰途吉田にて小酌、帰宅深更におよんで文学界四月号のために藝術家の人間條件二十八枚を書く

上段・藝術家の人間條件 二十八枚

\* La Clef des songes 正しくは Juliette ou la Clef des Songes 『愛人ジュリエット』マルセル・カルネ監督

○二月二十二日(金)晴。文学界にエセエの草稟をわたす、鈴木貞徳田雅彦と新宿トトヤ\*にてのむ、紀伊国やにてサルトルの本を二冊買ふ L'Etre et le néant ; L'existentialisme est un humanisme.

\*トトヤ 他に「ととや」「と、や」の表記あり

○二月二十五日(月) くもり。夕東中野モナミにて堀田善衛\*芥川賞受賞の会合に列す、帰途安部公房とともに新宿ととやにて小酌、深更雪ふる、雪中車にて帰宅

\*堀田善衛 小説家、評論家

○二月二十七日(水) 晴。午後新潮社におもむきて夷齋筆談の装釘を見る。文藝春秋社にて高田保\*の告別式に列す、銀座吉田にて小酌、尾崎士郎\*に逢ふ 鈴木貢と新宿トトヤに転じてまたのむ

\*高田保 劇作家、随筆家

\*尾崎士郎 小説家

○二月二十八日(木) 新宿におもむきて靴を購ふ、銀座にて東京温泉に浴す、よし田にて小酌、また烏森若竹にてひとりのみ 堀口大学\*に逢ふ、昼晴夜曇深更雪となる

\*堀口大学 詩人、フランス文学者

○二月二十九日(金) 雪のち曇。夜三越劇場にて文学座五十回公演マリウスを観る、佐藤美子に逢ふ 帰途銀座数軒にのみ泥酔深夜に帰る

○三月二日(日) 晴あたたかし、終日家居、さきごろ山田有勝より沢渡恒遺藁集四月刊行予定のために序をもとめられたるにつきすなはち序三枚半を草す J-P Sartres : L'existentialisme est un humanisme を読む、考ふべきこと多くにはかに所感を記しがたし

○三月五日(水) Aragon \* : L'homme communiste を読む、大丈夫はよろしく慟哭してこれを読むべし 西欧の雄弁とはけだしかくのごときスタイルをいふならむ、この日曇夜に入つて雪、エセエの藁を起す

\* Aragon ルイ・アラゴン。フランスの小説家、詩人、評論家

○三月七日(金) 小雪夜に入つて大雪となる、新潮社大田美和来 夷齋

筆談扉千五百枚届け来る、大田と銀座におもむきて吉田にて小酌、夕

松竹試写室にてイタリヤ映画にがい米\*を観る、帰途福田恆存豊田三郎\*と有楽町にてビールをのむ、また烏森若竹にてひとり小酌、ウヅラ焼太だ美也 けふは余の誕生日也

\*にがい米 ジュゼッペ・デ・サンティス監督作品

\*豊田三郎 小説家

○三月九日(日) 晴、夜に入つて雨。昼銀座におもむきて東京温泉に浴し吉田にて小憩、夜文学界のためにエセエ歌ふ明日のために二十八枚を草す 暁におよんで雨声のはげしきを聴く

上段・歌ふ明日のために 二十八枚

○三月十日(月) 晴、文学界に昨日の草藁をとどける 鈴木貢と吉田にて小酌、山田有勝を丸ビルの事務所を訪ひ沢渡恒遺作集の序をわたす、夜若竹におもむく小林秀雄三好達治青山二郎と逢ふ、青山とウーピー及プーサンにてのむ、またともに麻布一ノ橋におもむきて小料理屋にて小酌 深更女どもをしたがへて帰宅

○三月十一日(火) 曇小雨、鳥尾敏雄来話、小岩の新居におちつきたりといふ、鳥尾をともなひて文藝春秋社におもむきまた松坂やにて二科展を観る、画の観るべきもの無し、吉田にて小酌、のちひとりにて東京温泉に浴す、夜はせ川におもむく 城左門山田有勝に逢ふ、城と他のバーにおもむきて深更に帰る、はせ川にて句を書く 石竹は淡紅水は温むへし

○三月十三日(木) 晴。安部公房来話、安部母の手作りなるネクタイ二本贈らる。ともに銀座におもむきてビルゼン\*にてビールをのむ

\*ビルゼン ビアホール「ビルゼン」のこと。以降もしばしばビルゼンと表記

○三月十五日(土) 晴。春暖。新潮社に夷齋筆談の署名扉五百九十七枚

をとどける、文藝春秋社におもむきて鈴木貢とブルドッグにて昼食、

日本ばし壺中居\*にて青山二郎の装釘展を観る、久保田啓作を東京銀行に訪ひて喫茶店にて小憩帰宅、夜窪田来話 ローマイヤのミートパイを贈らる

\*壺中居 古美術商

○三月十七日(月) 晴。角川書店におもむきて近江屋にて小酌 石田波郷\*に逢ふ、句あり\*

春浅きストーフ黒し明治軒 近江やに

売れて困る文庫本水温むなり 角川に

雛白酒の色に出でたり矢大臣 桂郎\*に

くれなゐの花には季無し枕もと 波郷子に

\*石田波郷 俳人

\*この時の句作をもとに随筆「歌仙」(群像)同年6月号、7月号初出「夷齋俚言」収録)が起稿された(五月十七日の項に脱稿記録あり)

\*桂郎 俳人で波郷門下の石川桂郎のことか

○三月十八日(火) 曇、夜小雨、川島勝来話、群像へノ約束の寄藁を来月にのぼす、新潮社大田美和夷齋筆談の扉五百十五枚とどけ来る、昨夜角川書店より取り戻したる窪田啓作短篇集の原藁を酔余省線電車中に置きわすれたれば今日東京駅遺失物係に問合せにおもむかんとしたるをり窪田より電話あり 無名氏窪田に電話してその原藁を拾得したれば今夕七時半品川駅にてそれを渡すべしといひ来りたりとなん、

けだし原藁入封筒に東京銀行の電話番号記しおきたればなり 夜窪田角川書店の鎗田をともなひて来る、原藁つゝがなく入手したりと語る

○三月十九日(水) 暴風雨、銀座よし田におもむきて小酌、河上徹太郎に逢ふ、それより若竹におもむきたるに青山二郎に逢ひともにウー

ピーに転じて博奕す、プーサンに立寄りて帰る

○三月二十日(木) 晴。風強し、文藝春秋社におもむく、碓伊之助\*に逢ふ、徳田雅彦鈴木貢とジュリヤンにて閑談、よし田におもむきてプーサンのカズ子を呼ぶ、菅原国隆に逢ふ、林せい子の勤めるバーに行く、菅原と別れてひとりエスポアルにて小酌 深更に帰る

\*碓伊之助 洋画家

○三月二十二日(土) 晴。新潮社に夷齋筆談の署名扉を届ける、東京温泉に浴す、銀座よし田にて小酌、吉田健一に逢ふ、コロンビヤ試写室にてカルメン\*を観る、愚劣にがにがしきものなり

\*カルメン チャールズ・ヴィダー監督のアメリカ映画

○三月二十五日(火) 晴、風つよし、岩波書店発行文学\*の編集者来話、原藁依頼をことわる、わか宿はうつゝか夢の花蓋 かき寄せるへき言の葉もなし

\*文学 文芸誌

○三月二十六日(水) 晴。東和商事試写室に『Sous le ciel de Paris, coule la seine\*を観る、佐藤美子に逢ふ、敬\*と三人にて三笠会館にて小酌、東京画廊におもむきてピカソ\*の版画を観る、鳩の図みごととなり、帰途ひとり若竹におもむく、小林秀雄今日出海青山二郎堀口大学に逢ふ

\*Sous le ciel de Paris coule la seine 「田里の空の下セーヌはながれる」ジュリアン・デュヴィエイ監督のフランス映画

\*敬 洋画家で佐藤美子の夫・佐藤敬のことか

\*ピカソ パブロ・ピカソ。スペインの画家

○三月二十八日(金) 晴。小山清来話、太宰未亡人のために書きたる夷齋狂歌箱書をわたす、新宿紀伊国やに『Paul Valéry : Souvenirs poétiques, Stalin, La linguistique et l'impérialisme russe. Par Lucien

Laurat.\*をあがなふ、その書庫の中にてたまたま山内義雄\*に逢ふ、じつに十数年ぶりなり、また河盛好蔵に逢ひともに銀座に出て吉田にて小酌 夕五時より歌舞伎座にて文藝春秋三十年記念祭を観る、佐藤美子に逢ふ、帰途川端康成に逢ひふたゝび吉田にて小酌

\* Lucien Laurat リュシアン・ローラ。本名オットー・マシユル。オーストリアの作家、マルクス主義者

\* 山内義雄 フランス文学者

○三月三十日(日)晴。神田古書会館に琳琅閣古書売立の下見におもむく、ほとんど見るべきもの無し、帰途連雀町やぶそばにて少酌

○四月一日(火)くもり小雨、夕方東京温泉に浴し吉田にて小酌をこころみたるに今日出海来、すなはちともにマンハッタン、ルーベンス、若竹とのみあるく、帰途深更におよんで徳田雅彦丸岡明\*英国人スコットといふものを伴ひて訪れ来る、これを濱田につれ行きて談笑す

\* 丸岡明 小説家

○四月二日(水)曇小雨、寒し、神田村口におもむきて蜀山手写水戸義公行実\*二冊を購ふ、帰途若竹にて少酌

\* 水戸義公行実 徳川光圀の正伝

○四月四日(金)晴。早朝井澤義雄御影より上京し来る、白鶴一升蒲鉾一籠を贈らる、夕方町をあるき若竹にて小酌、若竹所在の地をさくら小路と命名す、けだし烏森神社は古く桜田社なるに因めるなり、留守中沢渡未亡人山形より訪ね来りビスケット一缶所贈

○四月五日(土)晴。昼ブリヂストン美術館におもむきて画を観る。帰途銀座ビルゼンにてビールをのみて帰宅、井澤義雄雑誌現在\*発刊の相談会に出席して帰来 その会合のやうすを報告す、安部公房弁論大いにつとめたるよし

\* 現在 同年6月発刊の文芸誌(発行元：書肆ユリイカ)現在の会、発売元：月曜書房

○四月六日(日)晴、あたゝかなり、島尾敏雄来話、島尾とともに井澤浅草に行く、ストリップを見物したるよし

○四月七日(月)晴。夜来小説他人の自由の稟をついで曉に成る、五十七枚、別冊文藝春秋に寄せむがためなり、ことし小説を草したるはこれを以てはじめとす 午後文藝春秋社に草稟をわたし吉田におもむきて吉田健一と小酌、井澤義雄現在の会に出席したるに発刊の議はまだまとまらずといふ

上段：他人の自由 五十七枚

○四月八日(火)晴、井澤義雄神戸にかへる、新宿紀伊国屋におもむきて本を購ふ。Gabriel Marcel\* : Journal métaphysique, Albert Camus : L'homme révolté, Paul Valéry : Degas Danse Dessin, René Clair\* : Réflexion faite. 帰途吉田にて小酌、また若竹におもむく、梅茶屋主人\*二好達治に逢ふ

\* Gabriel Marcel ガブリエル・マルセル。フランスの哲学者、劇作家

\* René Clair ルネ・クレール。フランスの映画監督

\* 梅茶屋主人 美術評論家、古美術収集家の秦秀雄

○四月九日(水)晴。夕東京温泉に浴しビルゼンにてビールをのみ 東京画廊に佐藤敬の展覧会を観る、敬美子富永惣一\*と吉田にて小酌、帰途マンハッタンにて島中鵬二今日出海と会してのむ、エスポアルに立寄りて帰る甚だ酔ふ 酣中歌仙表六句をえたり

\* 富永惣一 美術史家、美術評論家

○四月十日(木)くもり、夕吉田にて今日出海と逢ひマンハッタン及若竹に転じてのむ 帰途エスポアルに立寄る

○四月十一日(金)くもり、海老名雄二来話、東海汽船に復職するよし、

夜東京画廊にて佐藤美子佐藤敬に逢ひ大和田及エスポアルにて少酌

○四月十四日(火)\*雨。夕東京温泉に浴し若竹におもむくに白州正子\*

青山二郎すでにあり 青山及壺中居主人に誘はれて築地北原武夫宅に

おもむきて麻雀をもてあそぶ 麻雀はじつに十数年ぶりなり

\* この年の四月十四日は月曜なので、日付か曜日かのどちらかが誤記と思われる

\* 白州正子 白洲正子。随筆家

○四月十六日(水)晴。午刻安部公房来話、安部とともに東中野モナミにおもむきて野間宏真空地帯出版記念会に列す 帰途安部及岡本太郎と新宿をのみあるき某バーにてストリップを観る

○四月十八日(金)晴。夜来「歌仙」の稟を書きつぎて曉に成る、二十九枚、

但上

くれなゐの花には季無し枕もと

まだぎに起きて初霜を履む

くもり日の枝に残れる柿いくつ

またのみ直すどぶろくの酔

失せものをたづぬる方に月あはし

ひとの苦勞を茶はなしにする

むつかしや梅にも露は置くものを

木の芽どきにはつのる癩癩

ネクタイのサーモンピンク春浅し

蝶飛びかふは誰か家の窓

うすものに透きたる肌は夢ならじ

かぶりつきには利いた顔なり

つれなくも木戸に入るさの月の影

虫の音聴いてかへる横町

やや寒のなま物識と笑はれて

客を迎へて酒徳孤ならず

わが宿は隣の花のさかりにて

春追ふ旅のわらんじを編む

つづく

右群像川島勝の来れるに与ふ、河出書房竹田博来話、ともに銀座よし

田にて小酌 それよりひとり数軒に転じ深更婦

上段：歌仙上 二十九枚

○四月二十日(日)晴、風強し、終日家居、山川朝子のために色紙を書く 別れ来てなほ目にしみる若葉かな

○四月二十三日(水)晴。夕窪田啓作鈴木貞を銀座吉田に招きて加藤周一の原稟のことにつきて話す、昨日パリなる加藤より航空郵便にて文学界に寄稟すべきことをいひ寄こしたればなり、窪田を伴ひて帰宅 スキヤキを食ふ、たま〜伊藤濱子来り会す

○四月二十七日(日)晴。山田有勝、三木偵、今官一\*来話、酒を贈らる、ともにのむ

\* 今官一 小説家

○四月二十八日(月)晴。夜来フィルムあれこれ二十三枚を早し曉に成る、安部公房来話、安部二名の紳士を伴ひ来りてとも語る、夜鈴木貞と新宿にのむ、紀伊国やにて L'heure de choix をあがなふ

上段：フィルムあれこれ 二十三枚

○四月二十九日(火)曇、夜日比谷公会堂に Helén Traubel\* のソロを聴く、帰途若竹にて小酌

\* Helén Traubel ヘレン・トローベル。アメリカのオペラ歌手。ソプラノ



○四月三十日(水)晴。夜少雨、昼東宝試写室にてイギリス写真「The

life and death of Colonel Blimp」\*を見る、帰途吉田にて小酌、留守中新潮社大田美和来 夷齋筆談見本十部届け来る

\* The life and death of Colonel Blimp 「老兵は死なず」マイケル・パウエル、エメリック・プレスバ―ガー監督

○五月二日(金)晴。昨日のメーデーは一部暴動化せりと伝ふ。大田美和来、夷齋筆談二部届けらる、この本は発売とともに板元にては売切のよし、大田と吉田にて小酌、吉田健一に逢ふ。

○五月六日(火)晴。本多秋五\*来話。埴谷雄高の病氣見舞のため二千円わたす、安部公房草月流の佐藤某女をとまひて来話、安部佐藤をつれて銀座ビルゼン及吉田にて小酌、のち徳田雅彦に逢ひマンハッタンエスポアル小笹すしにてのむ 徳田濱田に泊

\*本多秋五 文芸評論家

○五月七日(水)晴、夕日本橋すし春にて小酌、これは壺中居がひらきたる新店也、すし春のかつをのたゝき衣更 の句を色紙に書く

○五月八日(木)晴。二本榎上行寺に榎本其角\*その父東順、桂川氏、大橋氏\*の墓を見る、其角は榎本氏と伝へらるれども東順の墓には榎下とあり いづれに従ふべきにや 町をあるきて疲れたり

\*榎本其角 宝井其角。江戸中期の俳人。その父・竹下東順は医師

\*桂川氏、大橋氏の墓 蘭学者・桂川甫周並びに桂川家、将棋名人・大橋宗桂並びに大橋家の墓

○五月十一日(日)晴。銀座ビルゼンにて岡本太郎の会に列す、帰途コーヒ―店アンブルにて三島由紀夫に逢ふ、帰来パリなる加藤周一に送るため書を裁す、三島は昨朝ヨーロッパより帰れる也、加藤宛書簡の末に一句 さみだれの晴間を保ついのちかな しばらくしてこれを改め

山東の郷談月にころよく

手妻のたねも売れる祭礼

国越の峠なかばにしぐれけり

はきならしたる海軍の靴

穴子ずしまた染めかへす暖簾にて

初雷の江戸の青空

花吹雪橋には獅子の舞ひつれて

善隣を訪ふ船の春風

春はめぐる船旅

上段・歌仙 承前 三十枚

\*この年の五月十七日は土曜なので、日付か曜日どちらかが誤記と思われる

○五月二十二日(木)晴。文藝春秋招待にて鈴木貞とともに蔵前角力小屋におもむきて夏場所十二日目を見る。角力見物じつに久しぶり也、吉葉山栃錦よき角力取なり、帰途深川宮川にて小酌してかへる。留守中窪田啓作安部公房来れるよし、窪田はその訳著エリユール詩集をまた安部はその書下し原藁を置いて去れり

\*吉葉山栃錦 吉葉山はのちの第43代横綱、栃錦はのちの第44代横綱

○五月二十七日(火)雨、河出書房竹田博来話、新宿紀伊国屋におもむきてフランス書七冊をあがなふ、帰途秋田にて小酌、また銀座吉田に転じてのむ、パリなる加藤周一より来信

○五月三十日(金)小雨、日活会館六階にて川端康成ほか五名の会に列す、この建物新築なれども小ぎたなきもの也 帰途日本ばしすし春にて会のくづれの多勢にて小酌閑談

○六月二日(月)小雨、後晴曇相交はる、白水社泉川某来話 山内義雄訳窄き門\*の新版を出すにつきその新潮社刊の初板に付したる余の跋

て たをやめの馬車に乗り行く若葉かな とす パリの空の下にセー又は流れるといカッソー写真を見たるとき詠めるなり

○五月十三日(火)晴。本郷大学赤門内文学士会館談話室に近代文学同人と会して近代文学への寄附金ならびに埴谷雄高病氣見舞金を手交す 帰途連雀町やぶそばにて小酌

○五月十四日(水)晴。夜文学座公演を三越劇場に観る、出し物は堀田善衛原作祖国喪失也、帰途河盛好蔵と日本橋すし春にてのむ、青山二郎に逢ふ 宇野千代来り会し築地宇野邸におもむきて泊る

○五月十五日(金)\*晴。週刊朝日黒川来話、写真をうつさる、夷齋筆談の書評に使ふよしなり、柳原徳子来話、山川朝子来話、朝子とともに銀座におもむきて吉田にて小酌、朝子に夷齋筆談を贈る

\*この年の五月十五日は木曜なので、日付か曜日どちらかが誤記と思われる

○五月十七日(日)\*晴。昨夜伊皿子志保原にして三島由紀夫の歓迎会に列す 前後不覚に酔ふ、今日さきごろより書きつづけたる歌仙続藁三十枚を脱藁す 右後半の十八句左のごとし

飛行機の影より霞みわたりけり

ほのかに低し先哲の墓

つづめたる思想は思想に非ずかし

雲の中なる神霊は何

五月朔明けなば旗の揚がるらむ

女まじりに押出す勢

水清し地は解放を名に負ひて

稲穂の波に歌のたかまる

草花をかざしに挿してをどる輪に

雁のたよりの一人を欠く

を再録せんことを乞ふ おもへば余がこの跋文を撰したるは関東大地震の年の五月に係る、すでに三十年のむかし也 余かかる若年の述作

をふたゝび出すことを好まざれども山内との旧誼をおもひこれを承諾す、但原形のまゝにて一字一句をも改めず、山内にはがきを書き句を添へてやる さみたれやふと見つけたる古日記

\*窄き門 アンドレ・ジイド著、山内義雄訳。一九三年、新潮社刊

○六月三日(火)くもり、夜来エセエの藁を書きつぎて今朝成る、ニヒルと政治二十八枚 これを文学界にわたす 鈴木貞とコックドールにて小酌 窪田啓作に逢ふ これを家にとまひ帰りに閑談

上段・ニヒルと政治 二十八枚

○六月五日(木)晴。鎌倉におもむきて美術館にて古陶展を観る、それより錦屏山瑞泉寺に詣る、さらに由井浜におもむき帰途駅前ポルドーにてひとり小酌 瑞泉寺にて 青梅の青きかなたに日晴れたり

○六月六日(金)晴。夕深川高橋におもむきてとせう屋にてひとり小酌 この店旧に依つてよし 帰途銀座にてよねのために空也の最中を買ふ

○六月八日(日)雨、すでに梅雨の配置也、大内則子来、小説草藁を示したるを批評して返す、夜浅草におもむきて飯田屋にて小酌、合羽橋通のどせう屋なり これを高橋に比すれば品落ちたり

○六月十日(火)陰晴定まらず。夕神田村口におもむきて松浦竹四郎蝦夷日記\*ほか数冊の本を註文しておく、昨日吉川幸次郎より来信 読書新聞に夷齋筆談の評を寄せたる旨知らせありたれば神田通にてその新聞を購入してキヤンドルに小憩してこれを覽る、帰途銀座吉田にて小酌、夜 Alan : Lettres sur la philosophie de Kant\*を読む、小冊なれどもはなはだ有益の書なり

\*蝦夷日記 幕末明治期の探検家・松浦武四郎の著作。「夷齋清言」参照

\* Lettres sur la philosophie de Kant おそろく正式タイトル "Lettres à Sergio Solmi sur la philosophie de Kant" G. J. U

○六月十二日(木)晴。小山清来話。その編纂するところの「大宰治の手紙」を贈らる。小山妻を迎へたるよし

○六月十三日(金)晴。文藝春秋クラブに入会す、富士見町近江やにて角川源義と語る、帰途日本橋鮎佐にてうなぎの佃煮を購ふ

○六月十四日(土)曇夜に入つて小雨、安部公房来話、ともに春日町火の車におもむきて小酌、これ草野心平いとなむところの酒場也、火の車涼しきほどに廻りけり

○六月十六日(月)曇。夜来乞食王子十三枚を草す 山川朝子の来れるにこれを与ふ、朝子と日本橋すし春にて小酌 昨日信州追分より堀辰雄病中寸楮を裁して寄せ来る これに応へて句あり

葉桜や年々かはる池のさま  
葉桜や埃しづまる雨のあし

上段…乞食王子 十三枚

○六月十七日(火)晴。神田村口におもむきて蝦夷日誌十七冊崎人十篇、鉄斎函入をあがなふ、夕三越劇場にて俳優座公演福田恆存作現代の英雄を観る、帰途文藝春秋クラブにて小酌 この日クラブ開場初日也

\* 崎人十篇 中国明代のイエズス会宣教師マテオ・リッチ(利瑪竇)の著作。鉄斎函入とあるので江戸寛政期に伴蒿蹊が著した『近世崎人伝』『続近世崎人伝』とも考えられるが、「崎人」(「夷齋清言」)には鉄斎旧蔵書とある

○六月二十四日(火)今暁台風九州を過ぎ夜来の雨午後に至つて己む、東京新聞社頼尊国隆写真師を伴ひて来り写真インターヴィューといふものを求めらる、しばらく閑談す

○六月二十五日(水)曇、菅原国隆来話、原稟依頼されたれども確約せ

: *Littérature en Silésie*. 夜文春クラブにて井伏鱒二河盛好蔵に逢ひともすし春におもむきて小酌 小林秀雄よりその著ゴッホの手紙を贈らる はがきに句を書きて遣る、ひらくよりにほふ紙の香青嵐

\* Armand Hoog アルマン・ホーグ。フランスの作家、文芸評論家

○七月十九日(土)小雨をりをり晴。芝本善彦\*来話、染付の水滴を贈らる、芝本とともに文春クラブ及すし春にてのむ、帰途銀座の某バーに立寄り女どもに送られて帰宅、はなはだ酔ふ 芝本宿酔の菓ありと *Alka-Seltzer\**を買ひ来る

\* 芝本善彦 「文学界」編集者  
\* Alka-Seltzer アルカセルツァー(解熱鎮痛剤)

○七月二十一日(月)晴。山川朝子来話。ともに文春クラブにおもむく。夜日比谷公会堂にて貝谷八百子\*のバレエを観る。展覧会の絵、三角帽子

\* 貝谷八百子 バレエダンサー

○七月二十四日(木)晴。午後白水社瀬尾正明来話、山内義雄使として窄き門並にコニヤック二本届け来る、日本文化放送NCB水野繁及北田正武来話 講演放送依頼也、山内にはがきに句を書きて遣る、めぐり来て二十九年の涼しさよ 註 新板窄き門は初板の時より二十九年目にて初板に寄せたる余が跋文もここに再び割刷に附されたり

○七月二十五日(金)晴。夜NCBの迎へに依りてその社の録音室におもむきはじめて放送をぶつ、講演といふこともまた初めて也、漫然たる随想を語る。

○七月二十六日(土)晴。NCBより薄謝を受く。菅原国隆来話。夕文春サロン\*におもむき三好達治に逢ひともにすし春に行きて小酌、帰途三好を車にてわが家の門前まで伴なひこれに萩原朔太郎\*の色紙を

ず、夜文学界に寄せるためにエセエ革命とは何か二十八枚脱稟、エセエの政治談にわたるものはこれにて打切とし来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり

上段…革命とは何か 二十八枚

○六月二十七日(金)晴曇さだめがたく夜に入つて驟雨あり、中野重治より近著鷗外その側面を贈らる 河出書房竹田博来話、夕文春クラブにおもむきて谷崎終平と将棊をさす それより日本橋すし春に行く、中野好夫中村光夫と逢ふ

○六月二十八日(土)晴、谷川俊太郎\*より詩集二十億光年の孤独を贈らる

\* 谷川俊太郎 詩人

○七月三日(水)晴。昨夜川島勝の迎へに依りて佐藤美子を鶴見のその家に訪ひ小宴を設けらる、つひに泊る、八木義徳来り会す、今日夕刻読売新聞社員来りて写真をうつさる

○七月七日(月)晴。午後文春サロンにおもむき出版部安藤直正に夷齋

俚言原稟四百五十枚を手交す これを梓行せしめんがため也 久保田万太郎夫妻に逢ふ

○七月八日(火)晴。安部公房来話。閑談夕刻におよびともに文藝春秋クラブにおもむく。永井龍夫と将棋をさす。

○七月十二日(土)晴。夕文春クラブにて林達夫\*に逢ふ。マンハッタンにて朝吹三吉\*に逢ふ。

\* 林達夫 思想家、評論家

\* 朝吹三吉 フランス文学者

○七月十五日(火)晴。午後新宿紀伊国屋におもむきフランスの本を購ふ \* Paul Valéry : *Ecrits divers sur Stéphane Mallarmé, Armand Hoog\**

贈る。  
\* 文春サロン 文藝春秋クラブのことか。以降、この表記続く

\* 萩原朔太郎 詩人

○七月二十八日(月)晴。山川朝子来話、文芸に鷗外の追儼を載せるよしにてその解説原稟一枚を書きてわたす、朝子と文春サロンにおもむく、今日出海に逢ひともに銀座をのみあるく

○七月三十一日(木)曇。夜来松浦竹四郎が蝦夷日誌につきて二十五枚草す 夷齋清言一として文学界に寄せんがためなり、この夜乱酔

上段…蝦夷日誌 二十五枚 夷齋清言一

○八月五日(火)晴。福永武彦より来信その書下し長編風土の板成れることを告ぐ、午後日本橋高島屋にて東大寺展覧会を観る、また丸善におもむきてn r f\*のジイド記念号をあがなふ、帰途文春サロンにて小酌

\* n r f フランスの文芸誌「新フランス評論」(La Nouvelle Revue Française)。

ほかにZBの表記あり

○八月八日(金)晴。社会タイムス記者藤池雅子来話 菅原国隆来話。夜窪田啓作来話、その訳著 *noeues (Canus)* とローマイヤのシートパイを贈らる、福永武彦に風土読後感を書きて遣る

○八月十三日(水)晴。午後安部公房来話、新宿紀伊国屋におもむき *François Mauriac\* : Mes grands hommes, Paul Valéry : Mauvais pensées & d'autres* を購ふ。帰途文春サロンにて小酌

\* François Mauriac フランソワ・モーリアック。フランスの小説家、文芸評論家

○八月十八日(月)晴。むし暑し。深更におよび先日より書きつづけたる狂歌百鬼夜狂二十八枚脱稟、文学界十月号に寄せんがため也 上段…狂歌百鬼夜狂 二十八枚 夷齋清言二

○八月二十日(水)晴。酷暑ほとんど食欲をうしなふ 夜千駄ヶ谷梅茶屋にて小林秀雄と対談す 群像十月号の企画なり 余対談の席に出づること戦後はじめて也

○八月二十一日(木)晴。午後松竹試写室にてチャブリン Monsieur Verdoux\*を観る。林達夫に逢ふ、ともに文春クラブにて小酌

\* Monsieur Verdoux 『殺人狂時代』 チャールズ・チャップリン監督のアメリカ映画

○九月七日(日)曇。暑さやうやくうすらぐ。小山清来話、これを伴ひて今戸におもむき真宗称福寺に松浦竹四郎の墓をたづねたるに松浦氏の墓は先年すでに無縁にて湮滅せりと寺僧咄、なほこの寺には亀田鵬齋\*墓あり、称福寺を出で、橋場長昌寺を訪ふ、法華也、鐘楼に銅鐘あり、享保七年庚子神田錫町小幡内匠作とあり、帰途向島三めぐり社および長命寺におもむく 長命寺にてさくら餅を小山に供す、それより鳩の町のあたりをあるき雷門にもどりて並木やぶそばにて小酌

\* 亀田鵬齋 江戸後期の儒学者、文人

○九月九日(火)曇小雨、朝林達夫二男果之介来話、鶴沼の土地を林に贈与す、山川朝子安部公房来話、ともに文春クラブにおもむきて小酌、文学界の需めに依りて近藤日出造\*と逢ふ 漫画を描かしむるがためなり

\* 近藤日出造 漫画家

○九月十一日(木)晴ときく曇、午後銀座はせ川にて写真をうつす、撮影士門拳\*、山川朝子のために文藝に載せんがため也 帰途文春クラブおよびすし春にて小酌

\* 士門拳 写真家

○九月十六日(火)曇小雨、午後田村町兼坂ビルにてアメリカ写真セー

ルスマンの死\*を観る。帰途烏森若竹の直の急逝を聞きその店におもむきて弔問す、河盛好蔵と文春クラブにて小酌

\* セールスマンの死 ラズロ・ベネディク監督

○九月十八日(木)晴。窪田啓作妻大磯より来話、黒鯛一尾を贈らる、夜銀座よし田にて小酌

○九月廿日(土)彼岸入、くもり小雨、上野博物館にしてブラック\*展覽会を観る 藤川栄子に逢ふ、帰途文春クラブにて小酌

\* ブラック ジョルジュ・ブラック。フランスの画家

○九月二十四日(水)晴。夜アルプスの少女十四枚書く 山川朝子のために文藝十一月号に寄せんとす

上段…アルプスの少女 十四枚

○九月二十五日(木)晴。山川朝子来話、アルプスの少女の草藁をわたす ともに文春クラブにおもむく 朝日新聞に五十嵐清江を訪ひてコルトー\*の切符四枚の代金を支払ふ、けふコルトー飛行機にて来朝せるよし也

\* コルトー Alfred Cortot アルフレッド・コルトー。ピアニスト

○九月二十六日(金)晴ときどき雨、午後一時より日本文化放送にて講演す 来月中の水曜は五回連続にてその一と二とを録音す 仮題虚構と感覚、筑摩書房主人古田晁留守に高輪に來りそれより文化放送まで追ひ来る 叢書出版につき話を聴く、帰途神田村口にて鉄斎の画帖を観る、文春クラブに小憩して帰る

○九月二十七日(土)晴、夜来崎人二十八枚を草す、夷齋清言三也 これを文学界にわたす 川端康成より来信 石濤の画巻についての消息也

上段…崎人二十八枚 夷齋清言三

○九月二十八日(日)くもり夜小雨、文化放送水野来話 アベ某女を伴ひ来る、夕新宿紀伊国屋にてフランス書を購入 François Mauriac : Le romancier et ses personnages, J-P.Sartre : L'Imagination.

○十月一日(水)晴。午後神田村口にて太田南畝手写本四冊(南朝紹運図\*統神皇正統記\*嵯峨野物語\*西園寺鷹百首\*応永記\*長祿記\*)及寛永板草人木\*三冊を購入 夜帝劇にてAlfred Cortot のピアノ演奏を聴く 川端康成に逢ふ 帰途佐藤美子徳田雅彦とすし春及エスボールにて少酌

\* 南朝紹運図 後醍醐天皇の皇子から南朝の皇統系図

\* 統神皇正統記 室町後期の小槻晴富による史論書。北畠親房の『神皇正統記』の統編の体裁を採りながら、同書は批判する目的で書かれた

\* 嵯峨野物語 歌人で南北朝時代に撰政・関白・太政大臣を務めた二条良基の著とされている

\* 鷹百首 鷹狩にまつわる歌を集めたもの室町後期、西園寺公経の詠歌とされる

\* 応永記 応永の乱について書かれた軍記物。15世紀初には記されたとされる

\* 長祿記 室町期の長祿年間について記した軍記物

\* 草人木 江戸初期に出た最初の刊本による茶書。「ワビ」(「夷齋清言」)参照

○十月二日(木)晴。夜帝劇にて Cortot を聴く、帰途佐藤美子徳田雅彦と帝国ホテルバー吉田そばや及びルビコンにて小酌 有楽町アマンドにてよねにケーキを買ひてかへる

○十月七日(火)晴後曇、朝井澤義雄神戸より来、松茸サハラ白味噌漬及ウイスキーを贈らる 屋NHK所員某来、鷗外についての放送を依頼さる 夜日比谷公会堂にGala de ballet de Serge Lifar\* avec Liane Dayde\*を観る 帰途小雨 銀座よし田にて小酌 川端康成夫人及娘に逢ふ 井澤泊、夜小雨

\* Serge Lifar Liane Dayde リファール、ダイデはともにパリ・オペラ座バレエ団で活躍したバレエダンサー

○十月八日(水)曇小雨、河出書房竹田博来話、印税(小説大系普賢)の一部を持参す、島尾敏雄来、ちかごろ肺を病めるよし、島尾と井澤とを伴ひて文春クラブにて小酌、井澤泊

○十月九日(木)晴、筑摩書房古田晁来話、夜窪田啓作来話、加藤周一のイタリアに遊べるよしを聴く

○十月十日(金)晴。加藤周一に飛行便にて尺牘を遣る 新宿紀伊国屋に Roger Martin du Gard\* : Notes sur André Gide, Paul Valéry : Lettres à quelques-uns を購ふ、帰途文春クラブにて小酌、井澤辞去す

\* Roger Martin du Gard ロジェ・マルタン・デュ・ガール。フランスの小説家 覚第三回をこころむ

○十月十四日(火)晴。午後二時よりNHKにおもむきて鷗外ちいさんばあさんにつき八分間録音放送す 夜蜘蛛三十枚草し畢る、別冊文藝春秋に寄せむがため也

上段…蜘蛛 三十枚

○十月十五日(水)くもり後雨、蜘蛛草藁を別冊文藝春秋にわたす 松竹本社にて伊太利亜活動写真デ・シイカ作ミラノの奇蹟を観る この日夷齋俚言刊行

○十月十七日(金)晴。ブーチャン映画を観る、夜佐々木基一來話、ピスキをのむ

○十月十九日(日)晴。午後文化放送にて虚構と感覚第四回及第五回をぶつ、夜八十岡英治来話 将基をさす

○十月二十一日(火)晴。安部公房菅原国隆来話 安部と銀座におもむき吉田にて小酌

○十月廿五日(土)くもり、辻マコト\*来話 図書新聞の囁に依り余の似顔をかきに来れる也、これ初見の人辻潤の遺児也といふ、しばらく往時を語る、ウラテツ\*の死せるを聞く、堀口大学より新潮文庫板堀口大学詩集を贈らる、はがきに札をかきて遣る、「十月の言葉」をここに草の色

\*辻マコト 辻まこと。画家・詩人

\*ウラテツ 辻潤の高弟といわれた卜部哲次郎のことか

○十月廿八日(火)くもり 徹夜ワビ二十七枚脱稟 此夜文春クラブにて美子レサリイタルあり 帰途エスポアルにて小宴(二十七日安藤更生\*来話)

上段:ワビ 夷齋清言四 二十七枚

\*安藤更生 美術史家

○十月二十九日(水)くもり後雨。夕文春クラブにて檀一雄に逢ひともにブルーバードにおもむきまた草野心平の酒場に転じさらに双葉荘にてふぐ料理の宴に終る 檀胃を病むといふ 町にてカバンを購ふ

○十月三十日(木)くもり、三笠書房山口年臣来話 赤い百合訳書を三笠文庫より刊行することをいふ

○十月三十一日(金)くもり後雨、夕銀座よし田にて小酌 Roger Martin du Gard: Notes sur André Gide 読了。ジイドとロンミニスムについて記したところおもしろし(10)ジイドはおそらく高齢にはいさゝかの盲目的行動ありてもさして配慮すべきにあらずと考へたるものゝ如し

○十一月一日(土)晴、風つよし、終日家居、夜大田南畝手写本嵯峨野

ものがたり白鷹記\*、鷹百首を読む、この本さしたるものに非ず 鷹は一連犬は一牙をもつて呼ぶことを知れるのみ

\*白鷹記 『鷹百首』同様の鷹狩に関する文献。十月一日の註参照

○十二月二日(日)晴やゝ寒し終日家居、南畝手写本長祿記応永記を読む 金閣銀閣建立の世に私闘の殺戮絶えず 政争のごときものか その規模の小なること生活の貧困を語るに似たり

○十一月六日(木)晴。台風南海を過ぎ温きこと冬の近きことを忘れしむ 夜文春サロンにて牛臓物料理の会あり 会するもの久保田万太郎 辰野隆\*高峰秀子\*ら盛会也

\*辰野隆 フランス文学者

\*高峰秀子 俳優

○十一月八日(土)晴。夕猿町般若苑にして文学祭の園遊会におもむく

○十一月九日(日)晴。池田生子の新宅におもむきて入浴す

○十一月十一日(火)晴。新潮社より背徳者(文庫本)印税を送り来る、村口書房にて寛永写本抛入聞書\*を購ふ 夜三越劇場にて福田恆存の芝居を観る、三越食堂にてはじめて越路吹雪に逢ふ、帰途徳田雅彦とエスポアルにて小酌

\*抛入聞書 抛入とは桃山時代に生まれた生け花(抛入花)のこと。「花」(夷齋清言)参照

○十一月十二日(水)曇後雨、夕日比谷公会堂にてコルトのレサイタルを聴く、フランク、フォーレ、ラヴェル、ドビュッシー、帰途よね菅原国隆大田美和をたづさへて文春サロンにて小酌、会場にて山内義雄に逢ふ

○十一月十三日(木)晴。寒風にはかに至つて巷は冬されのけしきとなる、夜窪田啓作来話

○十一月十四日(金)晴。文藝春秋社にして鷺尾洋三より余の小照を贈らる すし春にして三好達治より亀田鵬斎の書幅を贈らる 烟霞堆裏

發高興\* 一行書也

\*發高興 「三好達治」(夷齋小識)所収)では「烟花堆裏發高興」と記されてる

○十一月十七日(月)晴。あたゝかし、午後中央公論画廊にて高村光太郎\*の小品展を観る、島中鵬二中山義秀に逢ふ、それより新宿紀伊国やにおもむきて書をあがなふ Pierre de Boisdefre\*: Métamorphose de la littérature, 2 volumes, Henry Miller\*: Printemps noir, (traduit de l'anglais par Paul River) 帰途ととやに立寄りたるに井伏鱒二の来れるに逢ひ乱酔

\*高村光太郎 彫刻家、画家、詩人

\*Pierre de Boisdefre ピエール・ド・ボワデフル。フランスの外交官、小説家

評論家

\*Henry Miller ヘンリー・ミラー。アメリカの小説家

○十一月十九日(水)晴。堀口大学より其著月下の一群(白水社板)を贈らる

○十一月二十日(木)晴。安部公房来話。夜帝国劇場にて文藝春秋祭に

おもむく 小林秀雄に逢ふ

○十一月廿一日(金)雨、夜一ツ橋如水会館にて勅使河原蒼風の招宴に

おもむく 岡本太郎に逢ふ 岡本は明日パリに出発するよし

○十一月廿二日(土)晴、川島勝来話 濱田女主人来 山川朝子来 夕山川とともて神田におもむきたるに駿河台にて安部公房に逢ふ 帰途文春サロンにて小酌

○十一月廿四日(月)雨、講談社の使の来れるに小説鷹前半の原稟五十

枚をわたす、終日家居

上段:鷹五十枚 前半

○十一月二十八日(金)曇。去廿六日よりモミヂに泊りて文学界のため

に花二十四枚を草す 夜すし春にて少酌

上段:花 二十四枚 夷齋清言五

○十一月二十九日(土)晴。よし来話、文春クラブにおもむく、松坂やにて草月流展を観る、蒼風および土門拳に逢ふ 帰途よし田マンハッタンにて少酌

○十二月一日(月)晴。神田村口におもむきて三部の書をあがなふ、古今堪忍記\*七冊、女鏡秘伝書\*三冊 龍宝山大徳禪寺世譜\*一冊、帰途文春クラブにて小酌

\*古今堪忍記 七冊本の「古今堪忍記」は江戸中期の俳人・浮世草子作者の白梅園(青木)鷲水の著書と推定。堪忍記とは堪忍を人間生活の基調をなすものと

して、和漢古今の逸話や巷説を挙げて教訓を記したものと

\*女鏡秘伝書 江戸初期、女性のたしなみについて書かれた書物。「髪」(夷齋清言)参照

\*龍宝山大徳禪寺世譜 京の臨濟宗大徳寺派総本山大徳寺開山からの歴代住持の

詳伝及び崇福寺・真珠庵・酬恩庵の住持の詳伝、幕末に出版

○十二月五日(金)晴。室を掃除して畳に莫塵を敷く。古書の埃をはらつて座右いさゝか綺麗になりたるがごとく錯覚す、文春クラブの奥沢バーテン豆腐をもちて来る、夕斯波武来、晚餐をとみにす、夜南郭先生燈下書\*を読む、作詩作文の法を論じてところ々聴くべきの言あり、僻韻險句を忌むべしといへるは詩にあつてはまさに然らむ 散文

にては必ずしも深く忌むべからざるにや

\*南郭先生燈下書 江戸中期の儒者・漢詩人・文人画家、服部南郭の著作

\*南郭先生燈下書 江戸中期の儒者・漢詩人・文人画家、服部南郭の著作

○十二月八日(月)晴。よねを伴ひて文春クラブにかき料理をくふ。夜芝本善彦案内にて日比谷公会堂にして東京交響楽団のメンデルスゾーン、エリヤを聴く、帰途よし田にて小酌

○十二月九日(火)初雪。夕銀座の髪床におもむきたるに街頭にて山内義雄に逢ふ、すなはちともに酒をくみ深更まで数軒をのみあるく 同行数輩 このところ酒に疲れたり

○十二月十一日(木)晴。安部公房来その著闖入者の成れるを持参す、はせ川女主人来ふるしきと蒲鉾とを贈らる 歳暮挨拶也 安部をともなひて文春クラブにて少酌

○十二月十二日(金)晴。山岸外史\*来話 竹田博来話、夜文春クラブにて山内義雄と逢ふ とともにブルニエ、エスポアル、アムール、アカンサスにおもむきて酒くむ、同行中野好夫徳田雅彦鈴木貞

\*山岸外史 評論家

○十二月十四日(日)晴。昨日文藝春秋忘年会にて熱海(伊豆山)樋口旅館におもむきて今日帰る 一行百数十名 福引にてホワイイトシヤツあたる、干魚のみやげをもらふ

○十二月十九日(金)晴。タリツツにして中村真一郎五部作\*出版記念会に列す それより文春クラブにて山くじらの宴におもむく

席上詠

五段目 山くじらゆかり深間の牡丹花

のいろにはそれる二ツ玉かな

湯に酒の吉奈諱山くじらかな

註 当夜の猪は伊豆吉奈温泉(東府や)よりの寄贈也

上段・山くじら味噌煮の法

野菜 ねぎ 大根厚くそぐべし 牛蒡同前

コンニヤク手でひねるべし 焼豆腐 大切  
味をこくすべし(醤油砂糖)  
猪の毛の長きは味悪し  
みぢかきがよし

\*中村真一郎五部作『死の影の下に』第五部『長い旅の終り』がこの年に刊行された

○十二月二十日(土)晴。夜来珍珠船二十四枚を草し文学界にわたす、午後窪田啓作に逢ひ新宿紀伊国やにおもむく 原田義人\*に逢ふ、窪田銀座にて中華料理を饗す

上段・珍珠船 夷齋清言六 二十四枚

\*原田義人 ドイツ文学者、翻訳家

○十二月二十二日(月)晴。新宿紀伊国やにてフランス書を購ふ。

<sup>Fr.</sup>Fiemblem\* : Hygiène des Lettres l'eres notions, Max Brod\* : Franz

Kafka. 夜第一生命館にて近衛楽団\*の演奏を聴く Haydn : Le Reine,

R.Strauss : Bourgeois Gentilhomme. 帰途徳田雅彦とはせ川マンハッ

タンにて小酌 マンハッタンにてはじめて永井荷風に逢ふ

\* Etienne ルネ・エチャンブル。フランスの小説家、比較文学者

\* Max Brod マックス・ブロード。オーストリアの評論家、作曲家。カフカの友人、紹介者として著名

紹介者として著名

\*近衛楽団 近衛管弦楽団のことか

○十二月二十三日(火)晴。筑摩書房に検印をわたす なんとか叢書の

一なり 七千部

○十二月二十四日(水)晴。神田村口にて貫休詩集\*二冊をあがなふ

富岡鉄斎旧蔵也、夜文春クラブにてクリスマス宴あり はじめて獅

子文六\*に逢ふ

\*貫休詩集 貫休は中国唐末五代の禅僧。画、詩、書に優れる

\*獅子文六 小説家。本名の岩田豊雄では演出など演劇で活躍

○十二月二十六日(金)晴。寒し。午後東和商事試写室にて Fantan La Tulipe\*を観る、佐藤美子に逢ふ、昨夜美子と銀座にてクリスマス的小宴を催し泥酔せる あとにて美子今夜は所用あり匆々に別る、帰途文春クラブに小憩 ビスキ一本をあがなふ 正月用のつもり也

\* Fantan la Tulipe 『花咲ける騎士道』クリスチャン・ジャック監督のフランス

映画

○昨夜小林秀雄今日出海西欧におもむくを送る会あり、銀座鶴の家

○十二月三十日(火)晴。昨夜銀座にて山内義雄と会飲し今朝昏酣たり

午後平凡社に佐々木基一二子来話 とともに銀座よし田におもむきて小酌 帰途文春クラブにて玉川一郎\*に逢ふ 一昨年はせ川にてはじめ

て逢ひたるとき余これをのしつて泥棒と呼んだるよし玉川咄なり

泥棒とはわれながら天晴なる言を吐いたるものかなとて大笑を発す

\*玉川一郎 作家

○十二月卅一日(水)晴。夕東京温泉に浴す はせ川にて河盛好蔵に逢ふ、なんとかいふバーにおもむく よし田にて勅使河原蒼風に逢ふ

なんとかいふナイトクラブにおもむく 深更帰宅 うちにてよし田の

(よねと)そばを食ふ これにて今年の大尾也

昭和廿八年歳次癸巳 一九五三年

○一月一日(木)晴あたたかし 終日家居 筑摩書房より現代日本名作

選の一冊として余の作普賢白描処女懐胎を合せて刊行したるもの十部を送り来る 福永武彦にはがきを遣る、出版についての用談あればなり 夜松廬秘書\*四冊を通覧す また座右のフランス書二三を手あたりを読む、新旧の書一として興を発せしむるもの無し 素然として深夜ひとり起きて生す すなはちビスキを嘗めて三ツ物をつくる

初暦柱のかげにのぞきたり

水仙挿せる百円の瓶

西洋の酒いさゝかに春めきて

後考 脇の百円の瓶は俗に過ぎたり

今焼の瓶と改むべし

きず

○一月二日(金)晴。奥野信太郎\*文集柘榴の庭 宮崎嶺雄\*翻訳戒厳令

Camus : L'État de siège 前田純敬小説の著を贈り来る、宮崎は未見

の人也 奥野は文才あれどもその見るところの高からざるを惜しむ

前田ははまだ至らず 今日もさいはひに客無し 家居して旧臘よりも

ちこしの小説の稟を継ぐ

\*奥野信太郎 中国文学者、随筆家、歌人

\*宮崎嶺雄 翻訳家、フランス文学者

○一月五日(月)晴。安部公房勅使河原宏来話 宏より蒼風著いけばな

一冊、Bl. & Wh. 一本 エストミンスター二缶を贈らる。二子とともに文

春クラブにて小酌 久保田万太郎に逢ふ、帰途よし田にてひとり小憩、餅一包を贈らる 今年はじめての外出にて帰来たぐちに酔臥す 山内

義雄にはがきに元旦の三ツ物を書きてやる

○一月六日(火)晴。寒入なれどあたゝかし、島尾敏雄来話、臘月晦草

鹿葉子\*の阪急電車に飛込自殺したるよしを聞く、二十一歳とやら未見の女子なり、ヴァイキング社中にては才能ありし者也

\* 草鹿葉子 おそらく「VIRKING」同人・久坂葉子のこと

○一月七日(水)晴。夕銀座の髪床に行き帰途文春クラブに立寄り、久保田万太郎に逢ふ、帰途後夜に入つて雪となる、小説の藁を書き継ぐこと抄らず

○一月八日(木)晴。河出書房竹田博来話。余の小説及翻訳の書三冊を文庫本として出版したきよしをいふ、承諾しておく、神西清よりその訳著「ワーニヤ伯父さん」を贈らる、一読に堪へたり

○一月九日(金)晴。山川朝子来話、終日家居

○一月十日(土)晴。夕東京温泉に浴す、吉田屋にて小酌、よし田の娘にケーキを贈る、鳥森若竹にて三好達治に逢ふ、三好を草菴に招じて写本鳩舌鳥之草茎\*一冊を贈る、不忍文庫\*本也

松とれて十日の夜の寒からず

\* 鳩舌鳥之草茎 『百舌之草茎』大田南畝の随筆。駄舌(もず)、鳩は駄の異字体

\* 不忍文庫 江戸中期の国学者・屋代弘賢の文庫。江戸期屈指の蔵書数で知られた

○一月十二日(月)晴小雨。福永武彦に書を裁して遣る、翻訳出版についての件なり、夜窪田啓作来話、猪鍋を食ひつゝ語る、窪田よりアフルパイを贈らる

○一月十四日(水)晴。旧臘より書きつぎたる小説鷹の後半五十四枚脱藁、すなはち群像の使にわたす、夜日比谷公会堂にて東京シンフォニーの演奏会を聴く、フォーレ、レキエム。シューマン、シンフォニー四番、シュトラウス、サロメのダンス。指揮齋藤秀雄。シューマンもつとも善し。徳田雅彦芝本義彦\*とよし田にて小酌

上段：鷹 後半五十四枚 計百四枚

○一月十六日(金)晴。午後講談社におもむく 帰途河出書房に立寄りて銀座に出る 文春クラブ及吉田にて小酌 東京温泉にて浴す 帰来

山内義雄より早稲田の大学校に出講せむことをすゝめられたれば教師商売には気乗せざれども旧友の言無にしがたくともかくにもとて履歴書といふものをしたゝむ すなはち感あり

五十年かく恥も無き寒さかな

又

かく恥のつもりてこゝに五十年あと

白雪の消なば消えなむ

○一月十七日(土)晴。山川朝子来話。荻窪の片岡氏\*余のために家を借さんといふ、朝子斡旋也、朝子とともに神田におもむく。ラドリオにて小憩。それより古本屋をめぐる、帰途文春クラブに立寄り、林達夫に逢ふ、アプサントをのみ大酔す

\* 荻窪の片岡氏 故・片岡鉄兵(小説家)の家族

○一月十八日(日)晴。終日昏々として眠る、昨夜の酒のたゞりなり 夜旧訳法王庁の抜穴を一閲す 岩波文庫より再刊のむねをいひおこせれば

○一月十九日(月)晴。午後日本ばし丸善におもむきつ André Gide : Les caves du Vatican, Roger Martin du Gard : Confidence africaine を購ふ Caves は文庫本増刷について参考とするため也 岩波書店および三笠書房におもむきて出版の用談をすます、いづれも文庫本也、中央公論画廊にて古径青柳鞆彦\*の素描を観る、帰途文春サロンに立寄るに山内義雄に逢ふ、また佐藤美子に逢ふ、山内とともにマンハッタン及エスポアルにてのむ、はなはだ酔ふ

\* 古径青柳鞆彦 小林古径、前田青邨、安田鞆彦のこと。いずれも日本画家

○一月二十一日(水)晴。中央公論の笹原来話。山内義雄より来信。早稲田大学教授会にて余の出講を議決したるよし これも浮世の義理なるべし 山内に承諾のはがきを遣る 鳩舌をあやつる芸の日永かな

○一月二十三日(金)晴。終日家居。上方の西東三鬼\*よりはじめて来信、これ未見の俳人にて窪田啓作の妻の伯父のよし 返事をかき遣る、春近きたよりは星のまばたきか

\* 西東三鬼 俳人

○一月二十四日(土)晴。終日家居。窪田啓作鳥井なにかし来話

○一月二十六日(月)くもり。午後小山清来話。福永武彦来信、すなはち新宿紀ノ国やにおもむきて書をあがなふ Angeloz\* : Rilke, Hommage à Alain, NRF. 文春クラブにて福永を鷲尾洋三に紹介す 翻訳の件也 山内義雄より来信 出講(早大)の件也 返事を遣る

\* Angeloz ジョセフ・フランソワ・アンジェロス。フランスのドイツ文学研究者。ゲーテ、リルケの研究で知られる

○一月二十八日(水)晴。夜来夷齋清言七髪二十四枚書きつぎて今朝成る、文学界にわたす、午後山川朝子案内にて荻窪に片岡邸を訪ふ 貸問さがしなり 夜銀座よし田楼上にて川上徹太郎のそばの会あり 招かれて小酌 会するもの三好達治河盛好蔵井伏鱒二 この日銀座に火事あり

上段：髪 二十四枚 夷齋清言七

○一月二十九日(木)晴。寒し。午後東宝試写室にてフランス映画「Le daisir」\*を観る、よね及五十嵐清江同伴也 五十嵐にシゲッティ\*の切符二枚依頼しおく 帰途文春クラブにて安部公房夫妻に逢ふ 安部は余の留守に訪ひ来りてその新刊の小説集を留守番に托しおけるよし也 またよし田にて群像川島勝に逢ふ 貸問さがしのはなし也

\*袋草紙『袋草紙(紙)』平安後期の歌人・藤原清輔による歌論集。『袋草紙(二)夷齋清言』参照

\*岡本保孝 江戸末・明治の国学者。旗本

○二月七日(土)晴。角川書店鎗田来話。「森鷗外」を角川文庫に収め  
たきよしをいふ。承諾しておく、夜銀座よし田にて小酌

○二月八日(日)晴。午後よねととも荻窪片岡邸を訪ひ移転の件を決  
定す 片岡母娘と荻窪駅前助すし及コーヒー店ボンにて小憩

○二月十一日(水)晴。朝日本橋三越におもむきガス・ストーヴをあが  
なひて荻窪なる片岡邸に送らしむ、帰途転居の支度にかかる、夜窪田  
啓作来話、筑摩書房振出しの約束手形三枚及現金一万円を東京銀行に  
預入るゝためにこれを窪田にわたす

○二月十二日(木)晴。高輪の仮寓を引払ひ杉並区清水町■■■■に移転  
す これ片岡鉄兵旧宅なり

○二月十三日(金)くもり、文藝春秋岩波書店三笠書房河出書房を歴訪  
す 山川朝子巖谷大四竹田博ととも神田にてうなぎを食ふ 夕文春  
クラブにて安部公房夫妻と小酌 夜に入つて雨、深夜に雪、転居通知  
のはかきを書く

○二月十五日(日)晴。大工来りて十五畳の書齋に戸棚をつくる工事に  
着手す、夕菅原国隆来話ともに荻窪駅南口におもむきて繁すしにて小  
酌また珈琲店光にてダッチコーヒの極めて濃きものをのむ この珈  
琲店には曾て余のニセモノ出没したるよし

○二月十六日(月)晴。山川朝子竹田博来話 清酒一本河出書房より贈  
らる、島尾敏雄来話、神田山本書店におもむきて疑雨集\*四巻を購ふ  
河出書房にて佐多稲子\*に逢ふ それより文春クラブにて東郷青児濱  
本浩\*に逢ふ 乱酔

\*疑雨集 中国明末の詩人・王次回の詩集

\*佐多稲子 小説家

\*濱本浩 小説家

○二月十八日(水)夜読売ホールにて俳優座正義の人々を観る 帰途中  
島健蔵と新宿とやにて小酌

○二月二十七日(金)晴。廿五日より小石川のみぢに滞在 袋草紙夷齋  
清言八二十七枚かく 此夜かへる 前夜もみぢに窪田啓作を招いて  
晚餐をともしす 窪田近く東京銀行馬喰町支店に転任のよし  
上段・袋草紙 廿七枚 夷齋清言八

○二月二十八日(土)晴。夕銀座陶雅堂にて花瓶一つあがなふ、またよ  
し田にて小酌 河上徹太郎に逢ふ 帰途花屋にて連翹とフリーヂヤを  
買ひてもどりの瓶にさす よし田よりもちかへりたるそばのみやげ  
を片岡夫人に供す 三月分家賃を支払ふ

○三月二日(月)終日春雨。よし来話、荻窪駅南口いづみ\*におもむき  
て灰皿をあがなふ

\*いづみ ほかに泉の表記あり

○三月三日(火)晴。朝巖谷大四来話。白鳥物語十二枚文藝四月号のた  
めにわたす、夜銀座よし田にて小酌 雛祭なればよし志田の娘に空也の  
最中を送る

上段・白鳥物語 十二枚

○三月五日(木)晴。午後田村町セントラル試写室にてフランス映画青  
髯\*を見る よろしからず 色を賞すべきのみ 文春クラブにて小憩  
林達夫に逢ふ 夜よねを伴ひて日比谷公会堂にてシゲッティのヴィオ  
ロン演奏を聴く 佳也 帰途日本ばしすし春にて少酌

\*青髯 クリスチャン・ジャック監督

○三月六日(金)晴。神田村口におもむきて東坡禅岳集\*五冊及画禅室  
随筆\*二冊をあがなふ。帰途文春クラブにて小酌、読売新聞竹田良夫  
を招きてギーゼキング\*初日の切符二枚を買ふ

\*東坡禅岳集 『東坡禅書集』中国明代に作られた中国北宋の文人・蘇軾(蘇東坡)  
の逸話集。『東坡禅書』(『夷齋清言』)参照

\*画禅室随筆 中国明代の文人画家・董其昌の筆録

\*ギーゼキング ヴァルター・ギーゼキング。ドイツのピアニスト

○三月七日(土)晴。余の誕生日也。朝いさか祝膳を設く 昼新宿に  
おもむきて紀伊国やにフランス書を註文す 巷にて菅原国隆大田美和  
に逢ひともに喫茶店にて小憩 それより髪床に行き帰途十和田にて小  
酌 これははじめての店也 花を買ひて帰宅 夜東坡禅岳を読む

○三月八日(日)薄ぐもり風やや強し 午後神田一誠堂におもむきて清  
輔奥儀抄八冊慶安板\*をあがなひて直ちに帰宅、入浴、夜この書を一  
閲す

\*清輔奥儀抄八冊慶安板 藤原清輔による平安末期の歌学書の慶安年間(江戸初  
期)に出された刊本。『和歌押韻』(『夷齋清言』)参照

○三月九日(月)晴。午後中央公論社画廊に広重\*、銀座松坂屋に二科  
会の展覧会を観る、広重よし 夕文春クラブ及よし田にて小酌、よね  
に空也の最中をみやげに買ひて帰宅、この朝川端康成よりその著再婚  
者を贈らる

\*広重 おそらく江戸の浮世絵師・初代歌川広重のこと

○三月十一日(水)くもり夜に入つて風雨。終日家居、小山清来話、  
津島未亡人よりのことづけにて故太宰治の本二冊(創芸文庫\*)を贈  
らる

\*創芸文庫 創芸社の近代文庫版と思われる

○三月十三日(金)晴。夜窪田啓作竹田博来話、河出書房より文庫本を  
出すについての用談也、窪田泊る

○三月十四日(土)晴。窪田早朝に帰る。午後新宿紀伊国やにおもむき  
つフランス本をあがなふ Paul Valéry: Descartes, Jean Soulaïrol\*: Paul  
Valéry, M. Carronges\*: André Breton et les données fondamentales  
du surréalisme, Rilke Gide: Correspondances, Anthologie de la Poésie  
française depuis le surréalisme. 銀座よし田につ少酌

\* Jean Soulaïrol ジャン・スレロール。フランスの詩人、評論家

\* M. Carronges ミシェル・カルージュ。本名ルイ・ジョセフ・クチュリエ。  
フランスの作家、小説家

○三月十六日(月)終日雨、余寒いまだ去らず、山内義雄より来信、夜  
よねととも日比谷公会堂におもむきてギーゼキングを聴く、帰途ハ  
ゲ天にて小酌

○三月十七日(火)雪。午後晴。田村町兼坂ビルにてフランス天然色写  
真 Montmartre nocturne\*を観る。おもしろし。帰途鷺尾洋三に逢ひ  
はせ川及文春クラブにて小酌。ケテルにてチーズをあがなひて帰る  
この朝菅原国隆来話

\* Montmartre nocturne 『モンマルトル夜想曲』ジャン・クロード・ベルナー  
ル監督

○三月十八日(水)晴。中野重治より来信。午後日比谷第一生命ホー  
ルにてフランス映画 Les sept péchés capitaux\*を観る 佐藤美子川島  
勝に逢ひともよし田にて小酌、それよりスバル座にてチャプリン  
Limelight\*を観る。有楽町喫茶店にて小憩して帰る

\* Les sept péchés capitaux 『七つの大罪』ジュールジュ・ラコンブ監督他、7  
作のオムニバス

\* Linelight 『ライムライト』チャールズ・チャップリン監督のアメリカ映画  
○三月十九日(木)晴。島尾敏雄来話。新日本文学会への寄付若干を島尾にわたす

○三月二十四日(火)晴。夜新橋演舞場にて藤原歌劇団のラ・ボエームを観る、藤原義江\*衰へたるかな 帰途銀座よし田にて小酌

\* 藤原義江 オペラ・歌曲歌手、藤原歌劇団創設者

○三月二十六日(木)晴。夕文藝春秋クラブにて窪田啓作に逢ひ筑摩書房の手形の金を受取る。それより山内義雄桶谷繁雄\*窪田と、ともに麴町丹波やにおもむきてうなぎを食ふ 窪田来泊

\* 桶谷繁雄 冶金学者・著述家

○三月二十九日(日)雨、終日家居、和歌押韻(夷齋清言九)二十七枚 脱稟

上段：和歌押韻 夷齋清言九 二十七枚

○三月卅一日(火)晴。朝芸術新潮向坂来話。午後神田山本におもむきて東坡先生書伝\*四冊玉台新詠集\*三冊を購ふ 銀座文春クラブにて小酌

\* 東坡先生書伝 「東坡書伝」とも記される。中国・北宋の蘇東坡(蘇軾)による尚書(書経) 注釈書

\* 玉台新詠集 中国南北朝時代に編纂された詩集。南朝陳の徐陵の撰

○四月一日(水)晴。終日家居、岩波書店より文庫本法王庁の抜穴十部送り来る、十余年ぶりにての増刷也 雨月物語を読む これが新釈を出せよと別冊文藝春秋の請あれば也

○四月二日(木)晴。パリなる加藤周一より来信 午後東亜商事試写室にて英国映画リディア\*を観る 帰途文春クラブ及すし春にて小酌 なほ文藝春秋社にて洋服を注文す

\* リディア 『リディアと四人の恋人』ジュリアン・デュヴィヴィエ監督

○四月四日(土)晴。ときに小雨。井澤義雄昨夜来泊、今日帰る、紀ノ国屋におもむきつ Maurice Bémol\* : Paul Valéry を注文す

\* Maurice Bémol モーリス・ベメル。フランスの文芸評論家

○四月六日(月)くもり、山内義雄より来信、早稲田学校の出講表を送り来る、はがきに歌をかきて遣る 庭上即景 わが庭に桃の花咲く朝ごとに雀とまりて蕾ついでばむ 夕呉服橋相互ビルにて縮図\*の試写を見る、つまらなし、丸善にて Le rouge et le noir\*を購ふ、文春クラブにて小酌

\* 縮図 新藤兼人監督の映画

\* Le rouge et le noir おそろくスタンダール『赤と黒』

○四月七日(火)晴。山川朝子来話。三時よりアメリカンクラブにて福田恆存訳老人と海(ヘミングウェイ)のためのカクテルパーティーにおもむく、夕田村町旧セントラル試写室にてアメリカ映画 The big sky\*を見る、つまらなし 田川博一らとともに新ぼし及新宿にて少酌

\* The big sky 『果てしなき蒼空』ハワード・ホークス監督

○四月十一日(土)雨、新宿紀の国やにおもむきて伝書を購ふ クロワデルジャム書簡集 リルケ Lettres à une musicienne 山内義雄より来信 病臥のよしをつたふ

○四月十二日(日)くもり小雨、終日家居、新釈雨月物語その一吉備津の釜二十一枚書く

上段：吉備津の釜 廿一枚

○四月十四日(火)晴。終日家居、安部公房来話  
○四月廿二日(水)晴。はじめて早稲田学校に出講す 帰途文春クラブにて久保田万太郎に逢ひそれより同行数輩池ノ端鳥栄にて小酌さらに

仲の町松葉やにおもむきて盛宴、巻せんべいをみやげにもらふ

○四月二十八日(火)晴 夜来東坡禅喜の稟を草す二十四枚これ夷齋清言十也 文学界にわたす 文春クラブにて永井龍男と将棋をさす 一勝一敗也 窪田啓作に逢ひすし春にて小酌 昨日講談社松井勲来話、短篇集鷹刊行の申入也

上段：東坡禅喜 二十四枚 夷齋清言十

○四月三十日(木)風雨夜に入つてしづまる、講談社松井勲来話、短篇集鷹の原稟をわたす

内容 善財 片しぐれ 野守鏡 影ふたつ 夜は夜もすがら 妖女 梟 鷹

松井及同伴の川島勝をつれて新宿十和田に小酌またととやに転ずと、やにて亀井勝一郎\*有木勉\*印南寛\*に逢ふ 印南わが家まで送り来る

\* 亀井勝一郎 文芸評論家

\* 有木勉 講談社「群像」の編集者

\* 印南寛 編集者

○五月一日(金)くもり、夜日比谷公会堂にて Marian Anderson\*の独唱を聴く、帰途すし春にて小憩

\* Marian Anderson マリアン・アンダーソン。オペラからアメリカ民謡、靈歌

まで歌いこなした名歌手

○五月二日(土)晴。夜文春クラブにてDania\*の独唱を聴く、さしたることなし この日村口書房にて岡島援之の唐話纂要\*をあがなふ

\* Dania ダミア。フランスのシャンソン歌手。ダミヤの表記もあり

\* 唐話纂要 岡島援之(冠山)が著した江戸中期の語学書。唐話(中国語)の語句、格言、会話文に和訳を記す。「和訓」(「夷齋清言」)参照

○五月五日(火)晴。三日より信州上山田におもむきて今日かへる。一行佐藤美子高木東六\*近藤日出造那須良輔\*徳田雅彦也 瀧の湯に泊る

四日屋代学校にて講演す はじめての講演也 そのうち筑摩川のツケ場にてハヤを投網にて捕りたぢにこれを食す たゞその味美とはいひがたし この夜福龍が家の小福といふ芸者わが枕席を襲ふ これを拒まず ハチノコのカンヅメ及信州みそをみやげにもらふ

\* 高木東六 作曲家・ピアニスト

\* 那須良輔 漫画家

○五月六日(水)小雨。ワセダに出講す、山内義雄と閑談 はじめてワセダより月給袋といふものをもらふ その軽きこと笑ふに堪へたり 帰途文春クラブにて小酌

○五月七日(木)雨。午後日比谷第一生命ホールにて英国写真ムーランルージュ\*を観る、ロートレックの生活を絵様に仕組みたるものもテクニカラーの色を見るべきのみ 帰途河盛好蔵中野好夫と文春クラブ及新宿みちくさにて小酌

\* ムーランルージュ 『赤い風車』ジョン・ヒューストン監督のイギリス・アメリカ合作映画

○五月八日(金)くもり後雨 午刻山川朝子来話 未刻日本橋相互ビルにて朝子とともにジョンクロホードの写真 Sudden Fear\*を見る、日本橋泰明軒にて小酌 さら文春クラブにて吉田健一に逢ひすし春にて転じてのむ よねにすしのみやげもちて帰る

\* Sudden Fear 『突然の恐怖』デヴィッド・ミラー監督、ジョン・クロフォード主演・製作のアメリカ映画

○五月九日(土)晴。講談社原田裕松井勲来話 短編集鷹を出版するにつき契約書を取交す 新宿と、やにて小酌 短夜の口紅しろき別れか



な

○五月十二日(火) くもり小雨。午後田村町兼坂ビルにてコクトオの写真 L'Aigle à deux têtes\* を観る 井伏鱒二に逢ふ 夜赤坂山ノ茶屋にて文藝春秋の句会に列す 三好達治に逢ふ 帰途三好とともに烏森若竹にて小酌 堀口大学に逢ふ

\* L'Aigle à deux têtes 「双頭の鷲」ジャン・コクトー監督のフランス映画

○五月二十日(水) 晴。朝新宿紀伊国やにてフランス書をあがなふ Henry Miller : Souvenir souvenirs, Lou Albert-Lasard\* : Une image de Rilke, Maurice Bémol : Variations sur Valéry ; La méthode critique de Paul Valéry 早稲田に出講 研究室にて新庄嘉章に逢ひ日本フランス文学会総会における講演を依頼さる、山内義雄盲腸炎にて休講中 也 学校よりの帰途安藤更生に逢ひ高田牧舎にてビールをのむ 夜文春クラブにてアメリカ記者 Stuart Griffin\* と語る Interview 也 それより高見順\* と有楽町あきよにおもむく またエスポアに転ず 東郷青児余の似顔をか

\* Lou Albert-Lasard ルー・アルベール・ラザール。フランスの画家、リルケの恋人

\* 新庄嘉章 フランス文学者

\* Stuart Griffin スチュワート・グリフィン。"Japanese Food and Cooking" (一九五五年) という著作もある

\* 高見順 小説家

○五月二十二日(金) 晴。午後日比谷公会堂にてダミヤを聴く。帰途文春クラブにて海老名雄二に逢ひニュートーキョー及すし春にて少酌

○五月二十五日(月) 晴。昼安藤更生来話、秋永一枝\* を伴ひ来りて余が門に贅をとらしむ 安藤及秋永と牛込飯塚におもむきて小酌 それ

別会におもむく。三日前より腹痛はなだし胃潰瘍なるがごとし

○六月七日(日) 雨、終日家居、新積雨月物語その二 仏法僧 二十枚かく

○六月十三日(土) 晴。午後一時より読売ホールに於ける日本フランス文学会講演会におもむきリルケについて講演す 二十五分 夜茅場町其角における小宴に招かる 帰途新ばし若竹にて三好達治桑原武夫生島遼一\* と少酌

\* 生島遼一 フランス文学者・文芸評論家

○六月十七日(水) 晴。早稲田に出講、山内義雄病すこしく怠りて登校するに逢ふ 帰途神田山本書店にて石譜\* 一冊藝苑卮言\* 八冊洪容齋筆記\* 十冊をあがなふ 銀座よし田にて小酌ブーチャンとともに岡田\* にてのむ

\* 石譜 奇石、奇岩を記録したもの、ここでは中国の石譜。「譜」(「夷齋清言」)

参照

\* 藝苑卮言 中国明代に書法・書論をよくした評論家・王世貞による古今の書についての見解を述べた著作

\* 洪容齋筆記 中国宋代の洪邁(容齋)の随筆集。歴史、文学、哲学、芸術、中でも前代および宋代の歴史事実や政治・社会経済制度に関する考証、歴史人物に対する評論などに詳しい

\* 岡田 銀座の小料理屋「はち巻岡田」のことか

○六月十八日(木) 雨。夕安部公房夫妻及講談社松井勲来話。安部北海道に講演旅行におもむきたるよし 燻製ニンニク二尾を贈らる

○六月二十九日(月) くもり、夜来譜 二十四枚を書く 夷齋清言はこれへ一まづ終とす ロンドンフィルムのなんとかの試写を見る 京ばし小ま津\* にて小酌 このうなぎよろし

より上野本牧亭にて講釈を聴く また向島に車を走らせて三囲社境内をあるき長命寺さくら餅やにて小憩 枕ばしよりポンポン蒸汽にて横網にあらり新宿をへて帰宅 やや疲れたり

\* 秋永一枝 日本語学者

○五月廿八日(木) 晴。加藤周一福永武彦より来信、加藤は南仏カテドラルの美を論じ福永はローヂエマルタンデュガールの小著の翻訳成れるを告ぐ、夜日本ばしすし春にて窪田啓作に逢ふ この日追分なる堀辰雄の死を聞く

○五月廿九日(金) 雨のちくもり。和訓廿四枚(夷齋清言十一)を文学界にわたす 文春クラブにて三好達治永井龍男に逢ひ将棋をさす 三好とすし春にて少酌

上段・和訓廿四枚 夷齋清言十一

○六月二日(火) 雨のちくもり、夜東京会館にて堀口大学のためのカクテル・パーティあり出席す 会は新潮社主催也 前夜暴飲のため胃痛はげしく二杯のカクテルをもてあます たゞちに帰宅

○六月三日(水) くもり、夕芝増上寺にして堀辰雄の告別式に列す 帰途巖谷大四と銀座よし田にて小酌

○六月五日(金) 曇のち雨。午後本郷通におもむきて古本屋にて西陽雜俎\* 及木内石亭雲根志\* をあがなふ 帰途上野山下に出でたるに雨に逢ひ蓮玉庵に雨のやむを待つてそばを食ふ

\* 西陽雜俎 中国唐代の段成式による随筆、内容は博物学から奇事異談にまで亘る

\* 雲根志 江戸中期、木内石亭の著した石に関する博物誌。「譜」(「夷齋清言」) 参照

○六月六日(土) くもり。夜六時より帝国ホテルのホールにてダミア送

上段・譜 夷齋清言十二 二十四枚

\* 小ま津 小松との表記もあり

○七月一日(水) 晴。よねと銀座におもむき松屋にてシャツを買ふ。帰途文春サロンに寄る、佐藤美子東郷青児と逢ふ 新潮社新田敏を招き岡田にてのむ、すし春若竹をめぐりて帰宅、京都なる桑原武夫より来信 かの学派ちかく上京のよしを知らせ来る

○七月二日(木) 晴。夕新宿紀ノ国屋にて Maurice Bémol : Paul Valéry 及 Petit Larousse を購ふ よねとともに日本ばしすし春及銀座岡田にて小酌

○七月四日(土) くもり、吉川幸次郎より来信 七月七日上京 文春クラブにて会見のむねを告げ来る、夜日比谷第一生命ホールにて文学座公演三島由紀夫の夜の向日葵を観る 帰途すし春にて少酌

○七月五日(日) くもり、終日家居、鈴木信太郎\* 翻訳集(白水社) 朝吹三吉訳泥棒日記をそれぞれの訳者より贈らる

\* 鈴木信太郎 フランス文学者

○七月七日(火) くもり小雨、夕文春クラブにて洛の貝塚茂樹吉川幸次郎桑原武夫と会す、池島信平これに加はりて松山及エスポアルにてのむ、さらに駿台荘におもむきて三好達治に逢ふ 大酔

○七月九日(木) くもり、晴間もあり雨もあり、昼講談社松井勲来話 短篇集鷹まきに成らんとすといふ 角川書店より来信これまた文庫本の「森鷗外」の近く上梓されるべきよしを報ず 夕山王の山の茶屋にて句会あり 盗人のおこなひすまし夏のれん 帰途三好達治と銀座岡田及新宿ととやにて少酌

○七月十日(金) くもり小雨、終日家居、新潮社新田敏より電話にて夷齋清言を限定板にて上梓すべきよしを告げ来る、窪田啓作よりバ

ンジャマン・コンスタン\*のセシルの訳著を贈らる。たゞちに読了す、山本書店より先日あがなひたる本の包二つ届く、いまだこれを開かず

\* Traveler-monte 旅行用懐中時計  
○七月三十一日(金)晴。角川文庫本森鷗外成る。鎗田清次郎十部届ける。夜大田美和松井勲と文春クラブ及岡田にて小酌、岡田にて久保田万太郎三好達治河上徹太郎吉田健一に逢ひよし原松葉やに転じて盛宴

二如亭群芳譜\*及珊瑚網\*なり  
\*バンジャマン・コンスタン フランスの作家、政治家、思想家  
\*二如亭群芳譜 中国明代の王象晋による植物の特徴と品種、園芸技術、関連植物、典故、詩歌を載せ論述したもの、四庫全書に収録  
\*珊瑚網 中国明代の汪砢玉による書画録、四庫全書に収録

○八月一日(土)晴。十時二十分上野発。志賀高原ホテルに泊る、当分滞在のつもり  
上段・志賀高原日記

○七月十二日(日)晴。終日家居、朝吹三吉より贈られたる泥棒日記の翻訳を読了す、三笠書房竹内道之助負債のために家出したるよし新聞にて知る

○八月三日(月)晴。上林温泉表閣にて昼食  
○八月四日(火)晴。洪の町をあるく、愚劣也 ふたゝび山上にのぼればただ涼し

○七月十三日(月)晴。三笠書房におもむきて文庫本赤い百合十冊をもちかへる、三笠ごたごたにてこの印税はとれる見込なし

○八月五日(水)晴。発喃におもむきて天狗湯にて生島遼一に逢ふ宿屋満員にてビールものまずに帰る

○七月十四日(火)晴。新潮社新田敵来、夷齋清言の原藁をわたす、角川源義来、全集本に入ることを乞ふ、拒絶す、夜文春クラブにて永井龍男と将棋をさす、帰途新宿とゝやにて少酌

○八月七日(金)曇ときどき雨、峡中霧多くして陰晴定まらず、生島遼一及その女弟子来話 ホテル食堂にて昼餐をとるにす

○七月十七日(金)晴。夕よねとゝもに麴町丹波屋にて少酌  
○七月十九日(日)雨、昨日よりの豪雨にて紀州水害のよし、竹田博来話、荻窪のうなぎ屋にて小酌 夢応の鯉魚十五枚かく

○八月十日(月)晴。峡中また暑きほどなり、昼熊の湯におもむきて小酌 イワナの塩焼うまし 廉価也 質朴愛すべし

上段・夢応の鯉魚 十五枚 雨月物語三  
○七月二十日(月)雨のち曇、夕文春クラブにて坂口安吾東郷青児福永武彦に逢ふ、岡田にて少酌

○八月十二日(水)晴曇定まらず 昼よねとともに発喃薬師湯におもむきて午餐、この店よろしからず、帰途発喃より谷を下りて山間の径約一里をあゆみて丸池のホテルにかへる いさゝか疲れたり、夜大岡昇平と将棋をさす一勝一敗

○七月二十二日(水)晴。鷹上木成る。講談社松井勲本を届け来る。夜銀座にてのむ

○八月十三日(木)朝霧谷より湧いて清涼晩秋のごとし よね午後一時

○七月二十九日(水)晴、酷暑也、夕銀座にて小酌、天賞堂にてよねのために Traveler-monte\*を購ふ

○八月二十四日(月)晴。朝大田美和来、余の作品を掲載せる雑誌二十数冊を貸与す、新潮社より短篇集を出版せんがため也 夕よね及池田活子と日本ばしすし春におもむきて少酌、よねの時計を天賞堂に托して修繕せしむ

の汽車にて帰京するにつき車を命じてこれを長野駅まで送る ホテル支配人渡辺同道す 長野の町をあるきそばを食ふ うまくなし 夜ホテルロビーにて生島遼一大岡昇平とビールをのんで歓談す

て名物の栗かこの及栗羊羹をみやげに購ふ このあたり栗よし またここより志賀高原にかけてホップの栽培しきり也 今年よりたばこを作るといふ農民 米作のみにては食へぬといふ事情もあるが如し 長野駅にて列車に乗る 午後一時発はなはだ混雑す 夕上野に着くに炎暑蒸すがごとし 日本ばしすし春にて小酌して帰宅

○八月十四日(金)くもり。大岡昇平生島遼一鷲尾洋三みなホテルを退去す、新潮社より電話にて短篇集上梓の件をいひ来る、昨夜ロビーにて大岡と将棋をさし二敗すなはち一つ負越になりたるところ今日大岡出発前に挑戦し来りて一番さして一勝す、これにて対局数八番勝負なし

○八月二十三日(日)昨夜雷雨けふくもりにて涼し 新宿紀国やにて J-P.Sartre : Saint Genet をあがなふ

○八月十六日(日)晴 上林表閣におもむきて昼餐鯉よろし、大岡昇平と将棋をさす、二敗一勝、これにて十一番のうち一局負越なり、大岡及むつ子と地獄谷を見に行く 茶屋にてちまきを食ふ、それより溪流に沿つて洪に至り町中のそばやにて小憩 また塵表閣にもどり夜に入つて湯田中の芸者二名をよぶ いづれも醜女にて芸の無きこと呆れるばかり也 深夜車にてホテルに帰る

○八月二十四日(月)晴。朝大田美和来、余の作品を掲載せる雑誌二十数冊を貸与す、新潮社より短篇集を出版せんがため也 夕よね及池田活子と日本ばしすし春におもむきて少酌、よねの時計を天賞堂に托して修繕せしむ

○八月十七日(月)晴。けふは高原なほ暑きほどなり、湯田中におもむきて徒歩洪に至る、昨日のそばや長野やにて小憩、夕ホテルに帰る、ロビーにて泉觀光課長下平<sup>シモヘイラ</sup>ながしに逢ふ

○八月廿五日(火)雨。はなはだ涼し、講談社松井勲来話、検印をわたす、鷹千五百部増刷すべしといふ、松井妻死児を生めるよし

○八月十八日(火)くもり、毎日新聞記者桑原隆次郎面会を求む 将棋をさす

○八月二十六日(水)晴。早稲田大学秋山澄夫\*来話 その訳著マラルメ詩集並に岡山産白桃五箇贈らる 岩波書店塙作楽\*来話 原藁依頼也 ことわる 新潮社におもむき文庫本の印税を受取る 村口四郎\*をさそひ銀座岡田にて少酌

○八月十九日(水)雨、朝三好達治大岡昇平上林より来泊、三好は前夜着のよし すなはち相会して酒のみ将棋をさす

\* 秋山澄夫 フランス文学者  
\* 塙作楽 小説家、郷土史家  
\* 村口四郎 村口書店主

○八月二十日(木)晴。高原にしてなほ暑し 朝三好達治大岡昇平とアサヒ山にのぼる、午後将棋をさして夜に至る

○八月廿七日(木)雨。夕文春クラブにおもむく、巷にて岡本太郎に逢ふ、ともに岡田にて少酌、久保田万太郎伊藤喜朔藤間政弥\*に逢ふ

○八月二十一日(金)晴。朝ホテルを車にて出発 三好達治大岡昇平とジンフィーズの別杯をくむ 車の小布施村を通るついでに小布施堂に

○八月卅日(日)雨。安部公房来話。ビールをのんで閑談 小布施のキントンをみやげに贈る

\* 藤間政弥 日本舞踊家。東をどりの礎を作った

○八月卅一日(月)晴。よねと、もに銀座に行き天賞堂にてよねの時計

修繕したるを受取る、帰途文春クラブ及小松にて小酌

○九月一日(火)雨、終日家居、河出書房竹田博来話 講談社原田某橋 橋某来話

○九月二日(水)晴。上野に二科展を観る、つまらなし 夜徳田雅彦鷲

尾洋三とともに岡田ノアルエスポアル小笹すし等にて小酌 外電に

ジャックテイボー\*飛行機事故にてアルプスにて遭難死亡せりと伝ふ

\*ジャックテイボー ジャック・テイボー。フランス出身のヴァイオリニスト。

3度目の来日の道中、飛行機事故に遭った

○九月三日(木)晴、信州追分堀多恵より故堀辰雄の稿本かげろふの日記残闕を復刻せるもの一部を贈らる けだし香典がへしなるべし 夕刊に折口信夫の訃をつたふ

○九月八日(火)晴。秋山澄夫来話、画家上林大詔\*を伴ひ来りてその画会のちらしに署名を求む 山川朝子来話、閑談夕刻に及ぶ、こども六人生みたまき念願のよし也 夜群像川島勝来、俳優座長森なにがしを同伴す

\*上林大詔 日本画家

○九月九日(水)晴。朝大田美和来話、夷齋清言の叙及黄金伝説の抜刷をわたす。

○九月十三日(日)雨。夜神田共立講堂にて森鷗外雁の映画公開試写会あり 文藝春秋の依頼にて講演 ばかばかしきことなり

○九月十四日(月)くもり、奥湯河原加満田旅館に泊

上段…湯河原日記

○九月廿日(日)晴。窪田啓作当宿に來りて泊る。ジョニオカ\*を贈らる。大岡昇平新潮の菅原国隆を介して志賀高原にてうつせる写真四葉送り

クスターン\*のヴィオロンを聴く よね同伴し帰途平安餐室にて晚餐  
アムールのさち子に逢ひその店にて小酌  
\*アイザックスターン アイザック・スターン。アメリカのヴァイオリニスト

○九月卅日(水)くもり、群像川島勝来話、毎日新聞木村正来写真師を伴ひ来りて書斎の写真といふものをうつさる 終日家居

○十月一日(木)雨、午後東京銀行馬喰町支店におもむきて窪田啓作に逢ふ、東和商事にて三文オペラ\*(オリヴィエ)の試写をみる 文春クラブにて安部公房に逢ふ、田屋にてネクタイを買ふ 京ばし小松にて小酌

\*三文オペラ ピーター・ブルック監督のイギリス映画。ローレンス・オリヴィエ主演

○十月八日(木)晴、菊花の約二十二枚文藝春秋別冊にわたす 夜田川博一鈴木貢と岡田、エスポアル、アカンサスにて小酌

上段…菊花の約 廿二枚 新釈雨月物語その四

○十月十二日(月)雨、夜講談社川島勝松井勲をしたがへて銀座はせ川にて小酌

かきつばたむかしはむかし 今は今 傘雨 夷齋  
七夕近き橋の夕ぐれ

○十月十三日(火)\*京都若清水山莊泊 夜木屋町三条河しげにて乱酔あかつきを覚えす

\*この日は天気の記事無し

上段…京都日記

○十月十四日(水)晴、車にて大徳寺弧蓬庵龍安寺西芳寺(コケ寺)を一巡し竹苞楼\*にて写本二都聞書花月の日記\*及鼈頭癩癩談\*二部の書を購入 帰途フヤ町河道屋にてそばを食ふ 龍安寺の石庭はその根柢

来る

\*ジョニオカ ウィスキーのジョニーウォーカーのことか

○九月廿一日(月)\*よね加満田に來泊

\*この日と翌日は天気の記事無し

○九月廿二日(火)よね帰京、この日仲秋名月也 夜窪田啓作と語る、よねにカマボコをみやげにもたせて遣る

○九月廿三日(水)くもりのち雨、川島勝来、原稟催促也 夜窪田を招き川島と三人にて牛鍋を食ふ、窪田川島ともに帰る

○九月廿五日(金)風雨、奥湯河原より帰京 文春クラブにて美国\*より帰れる河上徹太郎に逢ふ 群像大久保に珊瑚九十七枚をわたす、夜帰宅せるに京都の紙屋(岡忠)来る 夷齋清言の用紙の件也 この日台風近畿を襲ふと聞く

上段…珊瑚九十七枚

\*美国 アメリカのこと

○九月廿六日(土)晴 夜日比谷公会堂にてソロモン\*のピアノレサイタルを聴く 帰途日本ばしすし春にて小酌 河盛好蔵に逢ふ、ともに車にて帰宅

\*ソロモン イギリスのピアニスト

○九月二十七日(日)晴、夕毎日新聞桑原記者来話 将棋をさす

○九月廿八日(月)晴 新宿紀ノ国屋にてClaude Mauriac\*: Hommes at idées d'aujourd'huiを購入 夜文春クラブにて佐藤美子および徳田雅彦に逢ひ岡田にて小宴 また池島信平の欧州より帰れるに逢ふ

\*Claude Mauriac クロード・モーリアック。フランスの作家。フランソワ・モーリャックの子

○九月廿九日(火)くもり、芝本善雄\*来話、夜日比谷公会堂にアイザツ

に於て水の思想あるに似たるをおぼゆ  
\*竹苞楼 京都の古書店・竹苞書楼のこと  
\*二都聞書花月の日記 『二都聞書』花月の日記 江戸後期、流水亭主人の著  
\*鼈頭癩癩談 『癩癩談(くせものがたり)』江戸後期の読本作者・国学者の上田秋成(『雨月物語』の著者)による伊勢物語を模した滑稽本。鼈頭(頭注)付。後日石川淳が現代語訳を出す

○十月十五日(木)晴。吉川桑原生島三氏招待にて西陣大市にて宴のち祇園木村咲にて清遊 妓に句を書きてやる 井上流富子来 次郎冠者翁格子のしぐれかな(登代香に)

益千代の市松沓ゆるわかれかな

○十月十六日(金)晴。吉川桑原生島三家に女中を遣はしていつうの鯖ずしを贈る 夜女中を携へて河しげにて小酌 また祇園つぼさかのピフテキを食ふ

○十月十七日(土)晴 斎藤菊太郎\*来話 貝塚茂樹所贈殷代青銅文化の研究一冊を将来す 斎藤案内にて嵯峨落柿舎天龍寺を見て嵐山に至る 落柿舎いふに足らざれど竹藪のほとりより嵐山を望みたるけしきよし(ここ至る途中広沢の池またよし) 天龍寺の方丈の庭その半よく半は後世の手入と見えて石組おぼつかなし 嵐山北松にて小酌 この家さきごろの被害にて壁ぎはまで水につかりたりといふ 女主人すえ大坂新町の出のよしにてうれしき氣質のやつ也(斎藤より林巳奈夫\*のスキヤンダルをさきく)

\*斎藤菊太郎 陶磁史研究者

\*林巳奈夫 中国古代の考古学者

○十月十八日(日)晴。富岡益太郎\*邸に斎藤菊太郎を訪ふ 鉄斎遺墨十数幅、屏風一曲八双\*、仇英\*一卷白描人物、刊本肅尺木\*凶離騷\*(明

板)おなじく明板八種画譜その他を示さる 斎藤をさそひて寺町三条三島亭にてオイル焼を食ふ この牛肉よし 斎藤の咄に京都名物かねよの茶づけ鰻松前やの塩こぶ道岳のちまきいづうの鯖ずし最もみやげに適す也

\*富岡益太郎 鉄斎の孫。のちに鉄斎美術館初代館長を務める

\*一曲八双 八曲一雙の誤記か

\*仇英 中国明代の画家、院派三大家の一人

\*蕭尺木 蕭雲從(字・尺木)。中国明代の南画家。池大雅、祇園南海ら江戸期の

初期の文人画家に影響を与えた

\*離騷 中国戦国時代の楚の屈原作と伝えられる詩

\*八種画譜 中国の画譜、明版ほか和刻本も作られるなど、『芥子園画伝』同様近

世美術に大きな影響を与えた

○十月十九日(月)晴。朝桑原武夫より電話にて放送局の紹介にて桂離宮見物の書類手に入るべしとあればすなはちその書類を局より届けさせて午後桂の地におもむく 宮のうち一めぐりするにあたかも旧知のひとに遭ふがごとし 知るところをたしかむまた一見の益ありしといふべし

探幽\*に秋日さしたり桂棚

夜河しげにて乱酔すなはち酔覚錯落たり

\*探幽 狩野探幽。江戸初期の絵師。桂離宮新御殿の桂棚の小襖絵などを担った

○十月廿日(火)晴、東帰いづうの鯖ずしをみやげとす

○十月二十一日(水)晴。松井勲来話、小説集珊瑚を講談社より刊行することとしてその原藁を松井にわたす 夜銀座にて池島信平と少酌

珊瑚内容 鳳凰 南枝向日 篠船 梟 合縁奇縁

夢の殺人 他人の自由 珊瑚

\*松丸東魚 篆刻家

○十月廿九日(木)くもり小雨、夕文春クラブにて薄井恭一に印の代金を支払ふ 鷲尾洋三徳田雅彦芝本善彦と逢ひ鷲尾案内にて築地ふく源におもむきてふぐ料理を食ふ それよりノアル及びエスポアルにて小酌 クラブよりサンドマンのシェリイ一本みやげにもちて帰る

○十一月三日(火)晴、夜後樂園にて American Holiday on Ice\*を観る 綺麗なれどもあと引かざるが如きもの也

\* American Holiday on Ice American Holiday on Ice アイススケートショー  
○十一月九日(日)晴 朝講談社松井勲来 鷹三板のために検印をあづく(二千部)夕銀座東京画廊にて小泉清の個展を見る 小泉とよし田にて小酌

○十一月十日(火)くもり、山川朝子来話、夕神田村口におもむく 京伝\*画銅脈贖の一軸を購ふ これ洛の竹苞楼より将来したるものも也 なほ村口より朱肉を贈らる また今半にて牛鍋を饗せらる\*

\*京伝 山東京伝。江戸後期の浮世絵師、戯作者

\*銅脈 江戸中・後期の戯作者、狂詩作者

\*この一連の顛末は「山東京傳の畫幅」(「一虚一盈」所収、初出「東京新聞」昭和30年10月3日夕刊)に詳しい

○十一月十二日―廿四日\* 湯河原加満田滞在 鳴神前半四十六枚書く、この間講談社より刊行予定の珊瑚の校正を見る、十四日晩熱海ホテルに一泊す、窪田啓作を大磯のその家を訪ひて坂田山をあるく また国よしのうなぎを饗せらる、このうなぎや古びたる家にて欄間に慶弔\*筆横書に表功報徳の扁額を掲げたり 但うなぎはうまくなし

\*この間は曜日・天気の記事なし

\*慶弔 徳川慶喜か

○十月廿二日(木)晴、銀座よし田におもむくに忠さんの計をきく脳溢血のよし也 岡田にて小酌、帰途村口に寄りて掛物二幅をもちかへる 蜀山真顔飯盛三陀羅市人長根俊満\*寄書の六歌仙一幅 栄之\*画蜀山贊一幅

鏡山いざ立ちよりて見て行かん年へぬる身は老やしぬると 黒主\*

あさみどり糸よりかけん白露を玉にもぬける春の柳か 僧止遍照\*

\*蜀山真顔飯盛三陀羅市人長根俊満 いずれも江戸後期狂歌師の大田南畝(蜀山人)・鹿都部真顔・宿屋飯盛・三陀羅法師・浅草庵市人・芍薬亭長根と、浮世絵師で戯作者の窪俊満による寄書と推定

\*栄之 鳥文齋栄之。江戸後期の浮世絵師

\*黒主 大伴黒主。平安時代の歌人

\*僧止遍照 平安時代前期の僧・歌人

○十月廿六日(月)晴 正午山川朝子来話原藁依頼也 午後上野美術館におもむくに入口にて山内義雄夫妻に逢ひ食堂にてビールをのみ 自由美術展にて安部真知子\*のエツチングをみる 藤川栄子に逢ふ 安部夫妻真鍋呉夫と、もに博物館にてルオー\*をみる 帰途精養軒にて小憩 それよりひとり銀座に出て文春クラブ及京ばし小松にて少酌

\*安部真知子 安部公房の妻で画家・舞台美術家の安部真知のこと

\*ルオー ジョルジュ・ルオー。フランスの画家

○十月廿八日(水)小雨、早稲田におもむく 大隈会館にて山内義雄と昼めしをくふ 帰途文春クラブにて薄井恭一\*より松丸東魚\*刻の印二種を受取る 夷齋(白文) 昨日花舎(朱文) 永井龍男より先日酔態を悔いたるはがきを寄こしたればこちらもはがき書きて遣る 句を添ふ 秋菊の袖にのこれる酒のしみ 仙ずしにて小酌

\*薄井恭一 文藝春秋社の編集者、料理評論家

○十二月三日(木)雨。吉川幸次郎よりその著中国の知慧を贈らるは

がきに句を書きて遣る 夜帝劇に文藝春秋祭におもむく 帰途新マルビル・ポールスターにて小酌 よねにみやげをもちて帰る

○十二月七日(月)晴 さる四日より呉服ばし千代田荘に泊りて浅茅ヶ宿(雨月五)二十一枚書く

上段・浅茅ヶ宿 二十一枚 新釈雨月物語

○十二月十四日(月)晴あたゝか也 講談社松井勲珊瑚の成れるを持参す 朝尾関栄\*来話 原藁依頼也

\*尾関栄 文藝春秋社の編集者

○十二月廿一日(月)晴。だからいはいないことぢやない(十六枚)書く 文藝春秋二月号のエセエ也

上段・だからいはいないことぢやない 十六枚

○十二月卅一日(木)晴。日記を記すに懶くはなはだ怠る 今夜福永武彦と、もに日本ばしすし春にて小酌 よし田のそばをみやげにもちて帰る 一年夢うつゝに過ぎたり

昭和廿九年歳次甲午 一九五四

○一月一日(金)晴、風なくして気やはらぐ、終日家居、蜀山人判取帳\*若樹\*子纂本竹清\*子箱也を閲し Renee Lang\* : Rilke, Gide, et Valeryを讀み Jean Genet : Notre-Dame des Fleurs と訳本とを併せ見る 訳本は訳者堀口大学により大年の夜に贈られたるもの也 夜マテルのコルドンブルウをのみつゝ吉例に依つて三ツ物をつくる

机辺なほとものけしきや去年今年

炭つぎたして酒をあたいむ

かたよれば礼者の足も遠のきて

\*判取帳 大田南畝の著作、書画帖に筆者について短註も付されてゐる

\*若樹 明治の蒐集家・林若樹

\*竹清 明治の昭和の書誌学者・三村竹清

\* Rene Lang ルネ・ラング。フランスの20世紀フランス・ドイツ文学研究者

○一月二日(土)晴。菅原国隆年賀に来る

○一月五日(火)晴。夜安部公房来話、置酒閑談

○一月六日(水)晴、小寒なれど気温にして春暖に似たり 夷齋清言の再校を閲す 夜北川松子マリ子来、晚餐をともにす

○一月七日(木)晴、山川朝子来話、朝子とともに河出書房へおもむき巖谷大四を伴つて日本ばしすし春にて小酌 新宿に転じて玉突をす朝子それより帰る 巖谷ととやにてまた酒を酌む そのときはなしに旧臘某日文春クラブにて佐々木茂索<sup>モト</sup>格別の理由なくして亀井勝一郎を殴打したるよしを聞く 亀井が文藝に寄せたる小説気に入らざりしとのことなれどもこれは理由にならず 佐々木の増長慢もつての外也 亀井に電話してたしかめたるに事実也といふ 此の如き傾向見すごしがたし よろしくこれを打つべし 此日新春はじめての外出也

\*佐々木茂索 小説家、編集者、実業家、文藝春秋新社社長

○一月八日(金)晴。安部公房書下し小説飢餓同盟のゲラ刷を読む これ板元<sup>イタマキ</sup>講談社より送り来れるもの也 部分おもしろけれども全体いまだしの感あり

○一月九日(土)晴。夕銀座鳩居堂におもむきて筆を買ふ。それよりよし田岡田にて小酌 赤坂山むらまで車をとばせて乱酔

に泊る、熱海銀座におもむきてスコットにて小酌 此夜 *declarations d'Amour*.

○一月廿八日(木)晴。帰京、熱海ホテルにては桜花咲きたるに爰元にては積雪数寸也たぢちに四谷見附福田屋に泊 A案内也 たま〜萩窪に帰れるに斯波武妻玉\*の来れるに逢ふ 武事業及女に失敗し失踪中といふ

\*斯波武妻玉 兄・斯波武綱の妻、多満のことと思われる

○一月三十日(土)晴。徹夜にて「家なき子」十四枚書く この昼村口をその麻布の新居に訪ふ

上段・家なき子 十四枚

○一月卅一日(日)晴、山川朝子福田家に来 原稟をわたす 夕萩窪に帰宅

○二月四日(木)晴。洛の斎藤菊太郎来話

○二月五日(金)晴。大田美和来話。夷齋清言の三校をわたす このころ日記をつけることはなはだ懶し 夜銀座すし仙及よし田にて小酌 ケテルにてみやげを買ひて帰る

○二月六日(土)晴、午後安部公房来話 さる四日立春の日に女子誕生したることを告ぐ その著飢餓同盟を贈らる 講談社の招きに応じて安部とともに池袋の沖繩料理におもむき沖繩をどりを観る 高橋新吉<sup>ニギハヤヒ</sup>山之口猥<sup>ニギハヤヒ</sup>に逢ふ

\*高橋新吉 詩人

\*山之口猥 沖繩出身の詩人

○二月八日(十日) 築地望月にて白峯二十枚書く この宿はよしの紹介也 *le 8 fevrier, anniversaire de notre amour*

○一月十日(日)晴。あたゝかきこと仲春のごとし 松平慶義来話

○一月十一日(月)晴。東劇地下室にてイタリア写真の試写を観る

Altri Tempi.\* 帰途小まつにて小酌

\* Altri Tempi 『懐かしの日々』アレックスandro・ブラゼッティ監督

○一月十三日(水)くもり小雨。風邪にて昨日より家居、松井勲川島勝来話すなほ酒を酌む 松井より下関名産ぶぐせんべいを贈らる

○一月十六日(土)晴。夜すし春にて小酌 小林秀雄白州正子に逢ふ 帰途乱酔 入歯と帽子をおとす

○一月十七日(日)くもり 西萩窪なる伊藤齒科医のもとにおもむき入歯の型をとる 元日につくりたる去年今年の句をはがきに書いて永井龍男に遣る 旧臘付合の約束したることを昨夜すし春にておもひ出したれば也

○一月十八日(月)くもり。朝西萩窪の歯医者にてあたらしき入歯を受取る、午後今官一毎日グラフ記者某を伴ひて来話、写真をうつさんと也 来月にのぼす 夕萩窪駅前泉にて灰皿をあがなふ

○一月十九日(火)晴。夕奥湯河原加満田に着く、小酌

上段・奥湯河原にて

○一月二十二日(金)くもり。昨夜菅原国隆来泊、けふ辞去す 鳴神原稟の中七十枚だけわたす

○一月二十三日(土)くもり後雪。当地の雪を見ることはじめて也

○一月廿六日(火)晴。廿三日より昨日までふりつゞきた雪にて東京は大雪九年ぶりつつたふ。今夕鳴神統稟三十枚書く 全部にて百枚也 菅原国隆の来れるにわたす

上段・鳴神 百枚

○一月廿七日(水)晴。菅原国隆かへる、A来、Aとともに熱海ホテル

上段・白峯 二十枚

\*この間は曜日・天気の記事なし

○二月十一日(木)晴。日本文化放送にて来月佳人の連続放送をおこなふよしにてそのため挨拶の文一枚半書く

○二月十六日(火)くもり、文化放送芹田来 佳人挨拶の原稟をわたす 夜芝本善彦川島勝、窪田啓作来 窪田泊

○二月十七日(水)くもり小雨 早稲田学校の試験のために今年始めて登校 山内義雄と大隈会館にて昼餐、帰途銀座よし田にて小酌、新潮社大田美和に夷齋清言の題簽をわたす L'hôtel M. AVEC Y.

○二月十八日(木)くもり夜に入つて小雪。大田美和来話 夷齋清言の四校を届けらる、尾関栄来話 これこのたび文学界編集長に就任したる挨拶也 豊島与志雄\*よりその著山吹の花を贈らる

\*豊島与志雄 小説家、翻訳家

○二月廿三日(火)晴。午後本郷龍岡の開店祝におもむき文藝春秋のひとびとに会ふ 帰途文春クラブに至る このクラブは今年はじめて也 三好達治に逢ふ 岡田にて小酌 HOTEL M AVECY

○二月廿四日(水)晴。河上徹太郎よりその著詩と真実を贈らる 山田一男来話、芝本善彦同伴也 夜よし来話

○二月二十五日(木)晴、朝大田美和来 夷齋清言の校正をわたす 尾関栄来 文学界の原稟依頼也

○三月二十五日(木)晴 毛利よねと離婚す 赤坂区役所に届を出す 池田忠雄をその家に訪ひいく子とのことをいふ

○八月廿五日(水)毛利よね退去す

# 資料翻刻2

## 椎名麟三

### 講演メモ②

教会での講演風景、年月日・詳細不詳



【資料概要】

- 資料番号 124163 《椎名麟三講演メモ11》
- 資料番号 124164 《椎名麟三講演メモ12》
- 資料番号 124165 《椎名麟三講演メモ13》
- 資料番号 124166 《椎名麟三講演メモ14》
- 資料番号 124167 《椎名麟三講演メモ15》
- 資料番号 124168 《椎名麟三講演メモ16》
- 資料番号 124169 《椎名麟三講演メモ17》
- 資料番号 124170 《椎名麟三講演メモ18》
- 資料番号 124171 《椎名麟三講演メモ19》
- 資料番号 124172 《椎名麟三講演メモ20》
- 資料番号 124173 《椎名麟三講演メモ21》
- 資料番号 124174 《椎名麟三講演メモ22》
- 資料番号 124175 《椎名麟三講演メモ23》
- 資料番号 124176 《椎名麟三講演メモ24》
- 資料番号 124177 《椎名麟三講演メモ25》
- 資料番号 124178 《椎名麟三講演メモ26》

いずれもノート紙、縦書、鉛筆書、一部ペン書、一部赤鉛筆

大坪經子氏寄贈（平成27年度）

\*資料番号124166《椎名麟三講演メモ14》については、「信仰と実作」（椎名麟三全集20 評論7）冬樹社、1977年）と同内容のため、翻刻掲載せず。

当館収蔵の椎名麟三資料は、椎名麟三の長男・大坪一裕氏（故人）が所有していたもので、一裕氏が亡くなった後、夫人の經子氏に引き継がれたものである。椎名麟三資料の多くは郷里の姫路文学館に収蔵されて

いるが、生活の拠点であり、亡くなった地でもある世田谷にも資料を納めたいという一裕氏の遺志により、270点の資料が当館に寄贈された。

寄贈資料のうち、講演メモは34点。草稿など椎名麟三の直筆資料の多くに共通するのが、切り離れたノート紙の罫線上に細やかな文字で書かれているという点である。講演メモの特徴としては、口述する内容のままを記しており、椎名が講演に際して入念な準備を行っていたことがうかがえる。『椎名麟三全集 全23巻別巻』（冬樹社、1970（79年）収録の年譜に拠れば、作家デビュー翌年の1948年5月の松本中学校（現・長野県松本深志高等学校）と慶応義塾大学の講演会をはじめとして、以後、全国各所で講演を行っている。特に、1950年12月の洗礼後からは、キリスト教の文学者として教会や集会での講演が目立つ。

講演メモのほとんどが全集に未収録のものである。椎名自身による削除・裁断やページの欠落が多いため、前後の内容が繋がらない箇所もあるが、そのまま掲載した。

【凡例】

- 漢字の旧字体は新字にあらためた
- 仮名 表記通り（ほぼ旧仮名）
- 数字・記号 表記通り
- 削除・追記部分については級数を下げ、かつ削除・追記した内容を「削除●●●●●」のよう表記した。ページが欠落していると思われるものについては「以下ページ欠落」のように表記した。冒頭が欠けているものも多いがとくに表記はしていない
- 註は適宜。但し本誌上巻に入れた事項、人物は省略した
- 文中には今日の人権意識に照らして不適切な表現があるが、原文を尊重してそのまま記載した

資料翻刻2

# 椎名麟三講演メモ②

## 椎名麟三講演メモ11

1960年頃 「推定」、ノート紙4枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

「1枚目」

「削除 として小説入門書などを読みあさつて勉強しはじめたのですが、どれもこれもまちがっているように見える。たとえば、朝起きて顔を洗つて、朝御飯を食べて、会社へでかけたというようなことを書いてはいけないといううなるんな禁止事項がある。だが、朝起きなければ、第一、会社へ行けなければ、学校へも行けないわけでしょう。顔を洗わなければあなたの方の場合は、お父さんやお母さんに叱られるでしょう。御飯を食べなければ、午前中の授業を受けていても、お昼のお弁当のことはかり頭にちらつていて、授業にも身に入らないでしょう。会社へ行つたとか学校へいったとかいうことも大切なことで、たとえば会社へ行かなければ、給料はもらえないし、学校へ行かなければ、卒業できるかどうかわからない。また、それらの小説の書き方の入門書では、「お早う」なんて挨拶は、小説では不必要なことで書いてはいけないというんです。ところが「お早う」という言葉は大切なことで、そ

れをいわなければ、あいつはどうかしているとか、威張つてるとかいわれて、人間関係がうまく行かない。会社みたいなところでは、首になりかねない。私の娘は、高校三年を卒業して、どういう理由でか、蓼科高原の小屋にただ一人でこもつています。むろん冬の間もずっとです。その娘が高校にいるとき、「お早う」ぐらいは、たとえ親に対していつた方がいいのじやないかな、と忠告したことがあります。するとその翌朝、私はぎよつとさせられました。突然、私の後から怒つた声で「オス」といわれたからです。私は、心臓が弱いので、シヨツクを受けさせられるのは困るので、朝の挨拶は取り下げにしてみました。——とにかく私たちの日常生活で、習慣的となつていようなことは書くな、とどの入門書では禁止しているんですね。しかしそれらの事柄というものは、人間が生きて行く上において大切なことなんです。で、戦後、最初発表した「深夜の酒宴」では、わざとのように、朝起きて、顔を洗つたりといううなことや、「お早うございます」や、一つのことを繰り返してはいけないといううな禁止をおかして、わざと、むやみやたらに繰返しました。ある批評家は、繰り返しが何十あると数え立てて、私を非難しました。しかしその小説は、当時の文学に対して、シヨツクをあたえたことだけは事実であつたようであります。」

だから小説を書きはじめて私にここで困ったことが私に起りました。「この世のなかには、ほんとうの自由も、ほんとうの救いもない」ということを書いていますので、自分の書いた作品から自分へ問いがはねかえつて来るのです。ほんとうの自由も、ほんとうの救いもないのなら、この世のなかには、生きて行く意味がない。生きて行く意味がないらば、

#### 〔2枚目〕

「追記 だから、ほんとの自由もほんとうの救いもないとして小説を書きはじめてのではありませんが、しかしこのようなほんとうの自由を意味するほんとうの救いはないのでしょうか。」「ない」として…」

だから当然小説を書くという意味もない。つまり何故死んでしまわないのか、という問いが跳ねかえつて来るわけなのであります。弱りましたね。自殺できないということは、実験済なんですからね。だからその問いから逃れるために作品を書く。しかし「この世には、ほんとうの自由も救いもない」ということを書いていますから、同じような問い、じゃ、何故死なないのかという問いがはねかえつて来る。そればかりではないんです。世間では「日本でただ一人の実存主義作家」というレッテルをはつてくれたのは、まだいいのであります。しかしその絶望の作家」というありがたいレッテルもはられました。しかしその絶望の作家は、たしかにこの世のなかに絶望していることは事実なんでありすけれど、絶望しながら、食糧事情がまだよくないときなのに、死ぬどころか飯を三杯も五杯も食べているんですね。この自分の状態を実に情ないと思いつながらです。そしてとうとう行づまつてしまったのであります。仕方なく、毎日、文士たちがよく集る新宿あたりで飲んだくれておりました。たとえ一時間でもいい、そんな問題なんか忘れてしまいたかつたからで

#### 〔3枚目〕

ここで、みなさん方と、多少むつかしいかも知れませんが、ほんとう自由、ほんとうの救いということと一緒に考えたいと思います。「前除 修養会ということですから」多少むつかしいことを考えてもいいと思つうからであります。

さて、自由ということはどういうことでしょうか。みなさんも、ふだんそれをおつかいになつていっているのではないかと思つきます。おかあさんから、もつと勉強しなさいといわれて、「わたしの自由よ、放つておいて」とおつしやるんじゃないでしょうか。しかしそのときの自由というのは、どんな意味でおつかいになつていっているのでしょうか。「わたしの勝手よ、放つておいて」という意味でありましょう。たしかに自由とは、「自分の勝手にする」という側面もふくんでいます。そしてそれは大切なことでもあります。だが、自由は、他の側面もふくんでいる。私は、電車に乗つて、よくあなた方ぐらいの年頃の方に会うことがあります。一人でぼつんと入口のドアなんかにもたれていらつしやる方がある。そのときのその人は、まるで大哲学者でもあるような深刻な顔をしていらつしやる。または、実にこの世のなかはつまらないといった顔をしていらつしやる方もあります。みなさん方も電車にでも乗つたとき、乗客の人々の顔を観察してごらん下さい。一人でいる人の方は、みんな悪くいえば死んだような顔、または、化物のような顔をしていますよ。むろん私だつて、そんな顔をしているのにちがいないんです。ところがお友達が、二、三人乗つていらつしやるるとき、その人の顔が突然かわります。手品でもつかつたんじゃないかと思われるほどであります。急にまるでほんとうの自由でも出会つたように、生々とし、楽しそうなお喋りがはじまります。これを人々とともにある自由と呼べるではありません。「私の勝手よ」と

あります。そのころ太宰治\*さんという作家の心中事件があつて間もないころでしたので、そんな私の姿を見た文士たちは、今度自殺するのは、椎名麟三\*だろうと大きな期待をかけてくれました。しかしその声を耳にしましても、たしかにみじめな気持ちでしたが、死ぬこともできないので、一層みじめでした。その私にとつて、一層のぞみというものになかつたわけではないのであります。ドストエーフスキイ\*から教えられた、イエス・キリストの名であり、その名のなかに私の求めているほんとうの自由があり、ほんとうの救いがあるような気がしていたのであります。

「削除 だが、先程からも申し上げていますように、私は、自分自身を唯物的に教育して参りました。あの共産党員として活躍中は、反宗教同盟にも加つていました。宗教の起源についても、モルガン\*などの古代社会の研究から知つていました。そんな男に、どうして神が信じられたり、イエス・キリストが信じられたりするのでしょうか。そして信じられなかつたにもかかわらず、そのころ友人であつた牧師さんに洗礼をしてもらいました。どうしてそんなことができたのでしょうか。信じられなままに、自分自身全体をイエス・キリストにまかしてしまつたのであります。一種の自殺だといえるかも知れません。この問題は、質問でもありましたら、くわしく申し上げたいと思います。信じられないままに、ほんとうの自由、ほんとうの救いを意味するものへ自分自身をまかせることによつて、信じられる者となつたということだけは申し上げられると思つております。」

\*太宰治 小説家。1948年6月13日に玉川上水で心中自殺を遂げた

\*ドストエーフスキイ フョードル・ドストエフスキイ。ロシアの小説家。椎名は

『悪霊』を読んだことが「私の眼を文学へひらいてくれた」(『私のドストエフスキイ 体験』)と述べている

\*モルガン ルイス・ヘンリー・モーガン。アメリカの文化人類学者

いうときの自由は、いわば個人的なものです。だから孤独なものだといえると思つのです。だが、人々とともにある自由は、それと反対のもんです。孤独から救い出された自由なのであるからであります。これを大きくひろげると、個人的な自由と社会的な自由、あるいは孤独の自由と全体の自由ということになつて来るのであります。

みなさん方は、この二つの矛盾した自由を生きていらつしやるわけがあります。朝、おかあさんに叱られたときは、急に孤独の自由のなかにとじこもる。だが、学校へ行つたときは、人々とともにある自由を楽しんでいらつしやる。逆にまた人々と一緒にある自由のなかにいるときは、何とかそれから逃れて孤独になりたいと思つ、孤独にあるときは、人々のなかへ行きたくて、用もないのにふらりと友達をたずねたりなさりたくな

#### 〔4枚目〕

つたことはありませんか。一日のうちに、何十回も、この二つの自由との間にうろろしていらつしやる方もある。学校へ行つて、教室で人々と一緒に勉強していて、九時三十分ごろになると、何だか勉強していることがつまらなくなつてひとりになつてしまふ。そうなると、その世界の人々がみんなつまらなく見えて来るもので、先生は、あんなに一生懸命にしゃべつていながら、ほんとは何も知つてはいやしやしないんだとか、A子さんはやつぱり点とり虫だ、あんなつまらない話を一生懸命にノートをとつているとか、B子さんは、先刻からあくびばかりしているとか、C子さんは、何故へんな髪ばかり結つて来るんだろう、ほんとにバカらしいとか、つまり何も彼も否定的に見えて来る。ところがお昼の時間になつて、バレー・ボールなんかみんなと楽しんでいるときは、校庭の隅っこで、みんなからはなれて本でも読んでいる人を見ると、「なんだ深刻



ぶつて、おかしな人」というように孤独を楽しんでいる人が否定的に見える。家へかえつたら家へ帰つたで、やはり同じようなことが起る。何か気に入らないことがあると、急に孤独になってしまう。お父さん、お母さんはじめ、兄妹たちも気に入らない。それどころか、すべてが否定的に見える。お父さんは、夕刊を読むのに、わざわざ寝転んで読まなくてもいいだろう、とか、おかあさんは、ほんとになつちやいない。お父さんが何をいおうと、「はい、はい」いつている。あんなの、封建的な奴隷というんだわとか、姉さんは、学校もできないくせに威張っている。あんな姉さんをお嫁にもらつた男の人はきつと苦労するにちがいないとか、弟や妹もテレビばかりにかじりついている、何が面白いんだろうか、というふうに思われる。最後には、家全体が否定的に見えて、「何てつまらない家なんだろう」と家全体がつまらなくなる。そればかりか、「わたしは一体何のために生きているんだろう」というような深刻な問題を背負つてしまう方もでて来るわけなのであります。

さて、これらのことは、何をあらわしているかと考えますと、私たちは、この根本的に矛盾するどちらの自由にも、ほんとうの意味で生きることはできないということであらわしていると思うのであります。ここに現代に生きる人々のなやみがあり、またそのなやみからの自由が、現代の要求だと申し上げてもいいと思うのであります。新聞を読まれる方は、あのフルシチョフ\*さんの二つの自由の平和共存という言葉をお読みになつたことがあると思いますが、そんなむつかしい政治の問題でなくとも、中学を出て働いている若い女子工員さんの書いたものを（それは北海道でありますけれど）それらを集めた文集を見たこともあります。それらの文章にあらわれている意見のなかで、不思議に多い意見にぶつかつたのであります。「それは組合には全的に献身しなければならぬ」。

ところで、精神的なストレスだとか、ノイローゼだかというものは、喜びにあふれた愉快な精神状態からやつて来るものではないということとはいうまでもありません。喜びにあふれた精神状態とは反対のもの、不幸だとか絶望とか「削除 孤独とか」いうものからであることは、見やすい道理であります。しかし不幸だとか絶望だとかいう感情は、私たちにとつては、終始起る感情であつて、いわば私たちは、朝の八時ごろ、子供の教育のことで御主人と一寸した喧嘩をなさつて、少しばかり不幸になり、少しばかり御主人や自分のことなどに絶望なさる。だが、十一時ごろになると、少しばかり幸福になつていらつしやる。気晴らしのために、デパートへ買物に出かけて、安い掘出物のブラウスを手に入れることができたからです。だが、午後一時には、また少しばかり不幸になつていらつしやる。その掘出物のブラウスを隣りのおくさんに見せたところが、あまり感心したような顔をしてくれなかつたからです。つまり私たちは、少しばかり不幸になつたり、少しばかり幸福になつたりしながら、毎日を暮らしているといつていいであります。このように不幸だとか、絶望だとか、日常性の範囲を超えないものは、健康であり、無事である精神状態だといえましょう。不幸や絶望というものは、本来の性質として、日常性の枠を超えると性質をもつてるのであります。私は、デパートで一つの場面にいくつたのであります。若いB・G\*の方が、気に入らないセーターを見つけて。ところが、お小づかいが足りなくてそのセーターが買えない。デパートでは、給料日までそのセーターを予約しておくことはできない。で、急いで家へかえつて、御兄弟の方か御両親にお金をかりて、デパートを引き返して来る。ところが、その売場の前へ行つて、ぎよつとして立止る。そのセーターがなかつたからです。女店員さん

といつて自分自身の自由を失つてはならない」という言葉に要約されるものが多いのです。ここでは、

〔以下ページ欠落〕

\*フルシチョフ ニキータ・フルシチョフ。ソビエト連邦の政治家。1953〜64年までソ連の最高指導者。冷戦下で社会主義国と資本主義国との平和共存を主張した

## 椎名麟三講演メモ12

年月日不明、ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆書

### 〔1枚目〕

#### 1. 孤独について

私は、医学的方面から、「健康なからだ」について語る資格をもつていません。私自身が心臓に欠陥をもつているはなはだ情ない人間であるからであります。だが、現代の医学は、精神が肉体の健康にどんなふかい関係をもつているかを知っておりますように、心のもち方で病気になるなかつたり、なつたりすることは事実であります。また、セリエ博士\*のストレス学説のように、あらゆる病気をストレスから説明する人もあらわれて参りました。そのストレスのなかには、精神的なストレスもふくまれていることはいうまでもありません。また、あるお医者さんは、現代病として、ノイローゼをあげています。この病気は、申し上げるまでもなく、人間の精神状態にふかい関係をもつているものであります。で、今日私がここでお話しできることは、精神衛生という観点から、人間の精神の問題にふれてみたいと、そう思うわけであります。

にきくと、売れてしまつたという。そのときその発らつとしたB・Gさんは、思わずこういつているのです。「いやになつてしまつたわ、死んでしまいたくなつたわ」といつているのであります。

\*セリエ博士 ハンス・セリエ。カナダの生理学者

\*B・G ビジネス・ガールの略

### 〔2枚目〕

むろん、その若い女の方は、死にやしないでありましょう。それなのに、何故死んでしまいたいというような言葉を口走るのでしょうか。それは、私たちの精神構造がそのような運命になつていと申し上げてもいいと思ひます。私たちは、たしかにこの世における何かについて不幸になつたり絶望したりするわけでありませけれども、その不幸や絶望はすぐ、自分自身全体、あるいは世のなか全体に対する不幸や絶望につながつているのであります。そしてほんとに自分の不幸や絶望を感じた人は、当然孤独であります。逆に申し上げますと、人間は、本来の意味で、孤独であるから、不幸になつたり絶望したりすることができると申し上げてもいいと思ひます。このごろ新聞や雑誌で問題になつている現代人の疎外感というものも、言葉がかわつていだけで、孤独という言葉と同じであり、現代生活にひろくひろがつている感情を問題にしているわけなのであります。

それでは、人間は、何故本来的な意味で、孤独なのでしょう。先ず人間の自己についての意識の発生は、孤独という形でやつて来るからであります。

#### ○池の話

それでは、なぜ孤独が恐しいのか。それは「魂における死」にほかならないからであります。その死においては、世界全体が意味を失つてし

まうと申し上げていいのであります。いいかえれば、そのとき自分自身が生きてはいない、死んでいるも同様だと感じられていると申し上げてもいいと思います。

### 〔3枚目〕

このような状態が、長くつづく、肉体的なストレスをあたえ、ノイローゼになるといふことはいまでもありません。そのような自分自身を救つてやらなければ、とにかく衛生上わるいといふことは、たしかであります。それでは、どう救うのか。みなさんと、一つの小説をモデルにして一緒に考えてみたいと思います。

それは簡単な筋の小説であります。あるとき、「削除 Aという」男と女が出会つて愛し合うようになる。だが男の方はなかなか結婚へふみ切れぬ。

### 〔4枚目〕

だが、今日は、文学の話をしようとしているではありませんから、これとどめませんが、要するに、いろんな救い方があるが、それを大きく区別すると、主観主義的な救い方と客観主義的な救い方の二つがあると知つておいていただければいいと思います。しかしこの二つの救い方に共通していることは、自分の不幸や絶望を絶対化しないことといふことにつきると思つてあります。買いたいと思つていたブラウスが他人に買われてしまつていなくなつても、「いやになつたわ」はいいのですが、「死んでしまいたい」といふように死をもち出すことによつて、いやになつたといふことを絶対化しないことでもあります。つまり絶対的なものと考えないこと、それが大切だと思つてあります。いいかえますと、人間にとつて死は、絶対的なものであると同時に、過度なもの、度をすぎたものであります。人間の生の歴

全体からの孤独を感じているのだと申し上げていいと思います。「一体自分は何のために生きているんだらう」といふ呟きは、その呟き自身が答えになつていたのであつて、「ほんとうの意味で生きてはいない、つまり死んでいるも同然だ」といふ答えが、その呟きの背後にあると申し上げていいでしょう。そしてその答えのなかには、理由のない人間存在のほんとうの姿が、いいかえれば、私の生きて行くほんとうの根つこのないといふ事実が、あらわれているのであります。そしてこのほんとうの根つこのないところに、ほんとうの人間の生き方は、生れて来ない、したがつてまたほんとうの文学も生れて来ないといふことが、今日の私の話の眼目なのであります。といふのは、文学といふものは、徹頭徹尾人間を問題にするものであるからであります。

今日ここへ来て下さつていらっしゃる方々のうちには、信仰者ではあるが、文学なんて全く縁がないという方もいらつしやるでしょうし、また逆に文学には関心があるが、信仰なんて苦手だといふ方もいらつしやるだろうと思つています。だから「信仰と文学」の関係を語る上に、私のような口下手な人間が、果して説得力をもつことができるかどうか、自分自身でも不安なのであります。それでは最初に世界の若い人々に、何が問題となつていのかを、小説や演劇や映画などを通じて、考えて見たいと思つてあります。と申しますのは、若い人々ほど、問題の所在といつたものを鋭敏に感じ、それを反映しているものはないと申し上げてもいいと思つてあります。

### 〔2枚目〕

「何から救い、何から救われるのか」といふことによつて自由といふものの性質がちがつて来る。したがつてその自由に根柢をおく人生観や、世界観などもわかるのであります。

史の向うにあるものであるからであります。この度をすぎるといふことは、人間にこわばりを起し、痙攣を起させます。(おやまの話)そしてこわばりや痙攣こそ、精神の衛生にとつて、まことによくないものなのであります。私は、座右の銘に「善にすぐるも悪である」といふ言葉をおいています。たとえ、いいことでも、度がすぎると悪となるといふ意味であります。そしてこのことは、精神の健康にとつても大切なことだと思つていふのであります。

だが、ひるがえつて見ますと、私たちは、死をもち出すことによつて、自分を絶対化していることが多いのであります。

### 〔5枚目〕

御自分で、それができない方は、愛だとか宗教などのたすけを借りることもいいでありましょう。とにかく、死は人間にとつて逃れがたいものであります。自分の不幸や絶望を死をもち出すことによつて絶対化しないこと、つまり自分の不幸や絶望を過度な、度のすぎたものにしないうこと、それが精神衛生上にとつてきわめて大切だといふことを今日申し上げたのであります。御清聴ありがとうございました。

### 椎名麟三講演メモ13

年月日不明、ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆書

### 〔1枚目〕

それらの孤独には、理由といふものがないといふのが、そのふかさを示していると思つていいと思つています。たしかに私たちは、何かについて孤独になるのであります。しかし孤独となつたときは、この世界

世界の若い人々の訴えといふものは、先程も申し上げましたように、そのどんな自由も生きるに値しないといふところに、この世界に対する怒りやいら立ちがあるといふことが申し上げられます。その彼等に何が求められているのか。いふまでもなくほんとうの自由であることはいふまでもありません。だからしたがつて、文学の主題となるころのものは、人間の自由であり、それ以外にはあり得ないのであります。笹森先生のお読み下さつた聖句は、そのことを正しく示して下さつていふと申し上げていいといふのであります。ホントウの自由は、先程も申し上げましたように、この世の光となるものであります。そしてその光がなくて、この世の生きるホントウの意味を失つてしまふ。地の塩さえ、その味を失つてしまふところのものであります。

大抵の場合、私たちの生きられるのは、このあたりをゴマ化して生きていふと申し上げていいと思つています。

人々とともに一緒に仕事したり、あるいは遊んでいるとき、突然私たちは、孤独の自由をあこがれる。悲しいとき、淋しいとき、苦しいとき、あるいはつまらないとき、私たちは、人々と共に生きていふ場所から逃れたいと思つています。だが、孤独の自由のなかにいるときは、逆にまた人が恋しくなる。そのために、用事もないのに友達をたずねたり、人々の集つていふ場所に行つたりするわけでありませぬ。会社へ行つていふ人は、会社へ行つていふときは、会社の人間関係なんかにつまずいたとき、あるいは仕事そのものに意味を失つてしまつたとき、早くひとりになりたいたいと思つていふ。ところが会社を休んだりしていると、人々と一緒に働いていふ、あの人々と一緒に生きるあの生活に自分の自由があるように思われ来る。一日のうちに、たとえば朝の七時ごろには、人々と一緒に生きる自由を求めている。会社へ出て、午後の三時ぐらになれば、孤独の

自由にあらがれて、一分も早くひとりになりたいと願っているわけでありませぬ。

しかし文学となりますと、どちらかの人間の自由を根拠にしなければならぬ。そのことは、先程光源のところでも申し上げた通りであります。だから一つの小説を読むと、その人が、どんな自由に生きていくか、わかるのであります。いいかえますと、文学は、(演劇や、ラジオやテレビのドラマや、うたや映画までをふくめて)、その人が↓

〔以下ページ欠落〕

### 〔3枚目〕

たしかに一つの組織、一つの団体へ入れば、この孤独は克服されたような感じがするのであります。そこでは、いつも何らかの全体が問題となる。自分の自由というものをいわずば組織のもつている自由にあずけてしまおうわけで、ある意味では、自分というものは、単なる組織の歯車にすぎないと感じる場合も出て来るのであります。あのナチスのアイヒマン\*の答弁をお読みになつた方があるでしょう。彼は、アウシュビッツの虐殺の責任はない、ただ、上の命令を実行する機械にすぎなかつたと答えているのであります。組織全体においては、個人の自由は失われるということとを彼はそういつているわけでありませぬ。

いずれにしても、孤独の自由も不幸であります、人々とともにある自由も不幸であります。先程名前をあげましたサルトル\*は、さらに決定的に表現して、人間の自由は呪われているといっています。誰から呪われているのかということが問題になるでありませぬ、しかし彼は、誰からの誰についてはふれていません。ここではつきりするのは、どちらの自由にも、ほんとうの意味で生きることができない、あの怒れる世界の若者たちのいら立ちが、はつきりするわけでありませぬ。そして

スチアンは、何等かの意味で、それぞれすくわれていると思つている。しかしホントはすくわれていないのだということ、人間やこの若者たちの怒りへの同感において、はつきり知つているかどうかという点なのであります。私たちは、共産圏のポーランドの作家、フラスコ\*の「週の日」に、ポーランドの若者たちの怒りを感じませぬ。私は、このような絶望的な小説を、いま読もうとは思ひがけませぬ。そこには、水一滴もない乾き切つた世界の状況と云つたものが、その作品からひしひし感じられて来るのであります。と云つて、そこには何か重要な物語が書いてあるわけではないのであります。大学生の若い女が、主人公になつていて、それに恋人がいる。その二人は、貧乏で、一緒に寝ることのできる部屋をもつことができない。小説の冒頭は、「2字分空白」のなかで、男が主人公に肉体を求めるところからはじまつている。女主人公は、それを拒絶する。こんなところではなく、ちゃんとした部屋のなかでというのが、その理由であります。で、男は、友達に借りている部屋を、数時間だけ借りようとするが、うまく行かない。そのことで今度は、女の方で、積極的になり、どこでもいゝということになる。すると今度は、男の方がためらう。彼女は、そのことで腹を立てて、妻のある行きずりの男に、自分をあたえてしまふ。それだけの小説であります。だが、小説においては、書かれたものが、いつも重大ではないのです。何故なら、この小説は、この日本ならどこにもころがっているような物語を描きながら、もつと別のことを、すでにもう人間に関するすべてが終つてしまつたことを告げているからなのであります。人間にとつての未来がすつかり失われてしまつたことを、怒りをもつて語つているのであります。

\*フラスコ マレク・フラスコ。ポーランドの作家、脚本家

### 〔2枚目〕

現代に生きる人間である以上、このいら立ちに応える責任はあるわけなのであります。怒れる若者たちに対してでなくとも、少くとも、私たち一人一人の生き方のなかにある矛盾や絶望に対して責任をとつてやらなければ、自分自身がかわいそうではないでしょうか。

\*アイヒマン アドルフ・アイヒマン。ナチス・ドイツの親衛隊将校。ナチスによるユダヤ虐殺の責任者として、1960年にイスラエルの裁判で死刑を言い渡された

\*サルトル ジャン・ポール・サルトル。フランスの哲学者、戯曲家、小説家

### 椎名麟三講演メモ 15

1959年頃「推定」、ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

#### 〔1枚目〕

「削除」ところが、その自殺は、滑稽なこととなり、死なないのであります。「子供は、睡眠薬というものを知らないのね」と映画の主人公の情婦から軽蔑される。それほど彼等は無邪気だつたのであります。もちろんこの無邪気さこそは、おそるべきものがある。いわばこの少年少女のような一切の世界に対する無関心でもいふべき無邪気さのなかに、この若いフランスの映画監督にこの現代がいかに受けとられているかが、はつきり示されていると思われるのであります。それは、現代における希望のなさであり、そこから由来するところの徹底的な不毛なのであります。あの死の砂漠のような何一つそこから生れて来ない荒涼とした状況のなかにあることを彼等は、端的に示していると考えられるのであります。

そして今日、私のいいたいことは、自分自身がそのような絶望であるということのできるクリスチアンが、ひとりもないだろうということなのであります。しかしその女子大生は敬虔なカトリック信者のうちの娘なのであります、その両親に対して、反宗教的な見地から反抗するということのような気配すら見せていない。そしてこのことは、第一次大戦後の絶望の時代とはちがつた、危険な質を示していると思つていられるのであります。あの大正の第一次大戦後においては、シエトフ\*の不安の哲学が流行したり、デカダンスが起つておりました。しかし一方、人間に対する強壯剤のように、マルクス主義が私たちに希望をあたえてくれました。ホントウの未来がやつてくれば、私たちのいまやんでいる一切は、消えてしまふのだと教えてくれたわけなのであります。もちろんシエトフの不安なんか、資本主義体制の生んだ歪んだ意識だというわけだったのであります。だからもちろん、宗教に対しても攻撃的でありませぬ。ところが、この二三年にわたつて、私たちの耳目にふれてくるものは、○むしろ宗教に對する絶望なのであり、そのような絶望より生じる徹底的な無関心なのであります。それは、宗教なんかブルジョアの愚民政策の一つなのだから撲滅せよ、という、いわば宗教追放なのではなく、それよりもつと根のふかいものであります。いわばそれは宗教というものをとつとくに向うへ超えた、「神はない」という現実を現実として、そこから生れて来る怒りだと云つていいと思つていられるのであります。

同じポーランドの映画で、最近「灰とダイヤモンド」\*が封切りになりました。上原教会で、赤岩さん\*が、この映画のことについてお話しになつたそうであります。私は、休んでいて、残念ながら聞いていないのであります。しかし私は、この映画においても、ポーランドの若者から、つまりワイダという監督から、私たちが、どんな状況のなかで生きていられるかを思い知らされたので「1字分空白」ります。

#### ○梗概(あらすじ)

明らかはこの映画には、三つも四つもの問題が感じられるわけであり  
ます。第一には、この話が示している通り、独軍の占領下に育つて独軍  
に対して抵抗して来た若い人々、それから歴史的な転換期であった終戦  
後の混乱とその苦悩のなかにおかれた人々、そして何よりもまず、この  
映画をつくった現代の若い人々の心のなかに秘められている暗い孤独と  
絶望の感情なのであります。しかもその暗い孤独と絶望というものが、  
教会やキリストの像によつてしか表現され得ないものであるという点な  
のであります。

いま、荒筋で申し上げましたように、最初のシーンは、教会の前なの  
であります。しかしこの教会の前というのは、単なる場所的な設定なの  
ではない。いわばポーランドの若い世代を代表する監督のワイダは、こ  
の映画全体を教会を前におこうとしていると云つていい。しかも単に映  
画的な効果としてそうしているのではない。「怒りをもつて」彼はそう  
するのであります。彼は、そのために

〔以下ページ欠落〕

\*シエトフ レフ・シエストフ。ロシアの哲学者

\*「灰とダイヤモンド」 イエジー・アンジェウスキー原作、アンジェイ・ワイダ監

督のポーランド映画。1959年日本公開

\*赤岩さん 赤岩栄。牧師。椎名麟三は上原教会で赤岩より洗礼を受けた

## 椎名麟三講演メモ 16

1963年6月5日、ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆書

同志社大学チャペル・アッセンブリー・アワーでの講演「現代の非人間性」

方の抹殺は、人類の破滅という、はなはだ壮大すぎる非人間化を導く戦  
争なしにはなし得ないということは現実なのであります。このような現  
実のなかにある私たちにとつては、フルシチョフさんの平和共存は、実  
に魅力的であるだけでなく、現代の要求だといえるでしょう。しかしこ  
こにまた困つたことが起るのであつて、その平和共存を成立させること  
のできる根拠を欠いていることなのであります。もしソビエトの  
自由が、その共存の根拠となることは、ケネディ\*さんが承知なさらな  
いでしょう。しかし逆にアメリカの自由がその共存の根拠となることは、  
それをいい出している当のフルシチョフさんが承知

\*ケネディ ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ。アメリカの第三十五代大統領

〔2枚目〕

なさらないでしょう。しかしアメリカのよつて立つている資本主義的な  
自由と、ソビエトのよつて立つている共産主義的な自由は、全ておたが  
いに質がちがう以上、統一なんかあり得ない。ただ、共存だけが可能な  
のであります。そのためには、それを成立させる根拠が、提出されな  
ければならない。しかしそれがまだないということが現実だといつてい  
いと思うのであります。

しかしこの現代の希望、この現代の要求にこたえるべく、多くの哲学  
者や思想家や文学者が、それぞれの答えを出しています。たとえば、哲  
学では、最近なくなつた田辺元\*さんが、「実存と愛と実践」のなかで  
その試みをしておられますし、また、フランスの実存主義は、この課題  
を全面的に引き受けようとしています。しかし若い世代の間では、この  
解決を見出そうとしていますし、フランスのアンチ・テートル\*やアンチ・  
ロマン派\*は、その答えに絶望的であるにしろ、ないにしろ、この問題

〔1枚目〕

要約しますと、人間の自由は、客観的な全体的な自由と、主観的な個人  
的な自由とに大きく区別できるということなのであります。ここで困つ  
たことは、この二つの自由は、おたがいに矛盾し合うということなので  
あります。しかしさらに困つたことは、どちらの自由をすてても、そこ  
に非人間化が起るといふことなのであります。

このことは、戦争中の合言葉であつた「滅私奉公」という考えを考え  
て見てもわかると思います。「私」というものを滅して公に奉ずると書  
きますが、戦争中その生き方が、日本人としてほんとうの生き方である  
といわれたものであります。しかしその生き方が、どんな片輪の生  
き方であり、非人間的な生き方であるか、戦後痛烈な批判をあげたこと  
は、みなさんも御承知のことと思います。といつて、今度は、逆に「公」  
の方を滅して、「私」に奉ずるといつた生き方、「おれはおれだ」とか、  
ドストエフスキイ流にいえば、「おれがお茶一杯のめれば、世界なんか  
滅んでもいい」という公を無視して個人的な自由で生きる生き方も、非  
人間的な生き方であるといふことは、申すまでもないことと思います。  
いいかえますと、この矛盾した二つの自由をどちらか無視するこ  
となしに、その二つの自由を共に生かすこと、このことのなかに現代の  
運命が賭けられていると申し上げていいのではないかと思うのでありま  
す。事実、この二つの自由の共存ということは、まさに現代の希望であ  
り、現代の要求であると申し上げることができると思ふのであります。

話の規模を大きくすれば、あのフルシチョフさんの世界に対する要求  
のなかにも端的にあらわれているものであります。いうまでもなく、二  
つの自由の平和共存の要求であります。むろんマルキシズムの純理論の  
上からはまちがいだと批判することもできるでありますが。しかし一

に関係をもたずにはいられないのであります。去年でしたか、倉橋由美  
子\*が、フランスのビュートル\*から盗作したといつて、江藤淳\*と論議  
したことがありましたが、そのビュートルは、「私」と「彼」とを共存  
させる方法として、「あなた」を小説の主格として設定したのであります。  
それはどこかに書きましたように文学理論の上ではあやまりなのであり  
ますが、その試みのなかに現代のこの時代の要求の鮮やかな反映を感ぜ  
ずにはいられないのであります。その意味で、私は、このビュートルの  
試みを高く評価したいとそう思つているのであります。

それでなくても、この対立し矛盾する個人的な自由と全体的な自由との  
共存の要求というものは、私たちの生活のなかの現実としてあるものな  
のであります。

四、五年前になりますが、私は、北海道の女子工員さんのお書きにな  
つたものを集めた文集を人に見せてもらつたことがあります。中学を出  
てまだ間のない方々のお書きになつたものでありますが、そのページを  
めくつていこううちに、私は強いシヨックを感じたのであります。それは  
同じような意見の多いのに気付いたからですが、その意見を要約しま  
す。「わたしたちは組合に全的に献身しなければならぬ。といつて個  
人の自由を失つてはならない」ということであつたのであります。現  
代の人間の要求をこれほど端的に表現されたものは、見たこともなかつ  
たからであります。しかしある決定的な局面

\*田辺元 哲学者

\*ビートル 戦後、アメリカを中心にあつた、現代の常識から外れ、無軌道な  
行動をする若者たち。ビートルニク

\*アンチ・テートル 戦後のフランスにあつた前衛劇。ヌーボー・テートルとも

\*アンチ・ロマン派 戦後のフランスにあつた前衛的な小説群。ヌーボー・ロ

マンとも

\* 倉橋由美子 小説家

\* ビュートル ミシェル・ビュートル。フランスの小説家

\* 江藤淳 文芸評論家

### 〔3枚目〕

に立たされると、この人間として全くもつともな要求というものは、破れないではいけないということはおみなさんにもおわかりになると思います。ということは、おそらくみなさん方は、その労働生活のなかで経験していらつしやることだろうと思われるからであります。自分の社会的な自由を保障してくれる組合へ全的に献身するか、それとも組合なんかとは無関係に自分の個人的な自由で生きるかというように、何らかの形でその選択をせまられたことがおありであるだろうと思われるからであります。しかしその二つの自由を、どちらも消し去らないで生かしてくれるものがありさえすれば、それこそほんとうの自由というものでありましょう。それでなくても政治的な、あるいは社会的実践のなかに起るところのあの燃えるような孤独を知つていらつしやる方は、このような共存が何を意味するか、よく知つていらつしやると思うのであります。

今日、お話ししたかったことは、実に単純なことなのであります。現代の希望として、さらには現代の要求としてあるところの二つの自由の共存は、もつとも人間的なものであり、さらに人間にとつて根本的なものであるということなのであります。しかしそれに対する答えはないということによつて、現代はこの非人間的な状況のなかで苦しまされていくということなのであります。そしてこの非人間的な状況から救い出し得ないならば、その思想がどんなに立派なものであつても、またその宗

教がどんな深遠なものであつても、少くとも現代に対する適応性をもつてはいないだろうということでもあります。むしろキリスト教もその例外ではありません。ここらあたりで伝統のある同志社の宗教部あたりの奮起をのぞみたいと思つたのであります。これで私の下手な話は、一応終りたいと思つたのであります。ありがとうございました。

### 椎名麟三講演メモ17

年月日不明、ノート紙2枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

#### 〔1枚目〕

〔削除〕 刑務所の裏門から放り出されてからは、特高の監視を受けているために生活に困りながらも、もつぱら実存哲学の本を読んで来ました。未決で知つたニーチェ\*をはじめとして、ケルケゴール\*とか、ベルグソン\*とか、ヤスパース\*やハイデッガー\*などでありました。その私は、私のいだいでいる要求に対して何の答え\*ももつていないと思われたのであります。しかしそれらの本を読んでも何の答えも自分には得られなかつたのであります。その私にはつきりわかつたことは、ほんとうの救いもほんとうの自由も人間の手のなかにはないということでありました。無関心なうちはいいが、一たびほんとうのものを手のなかにとらえようとしたとき、人間にはないのでありますから、暗い空虚を感じずにはいられないのであります。私が、拷問や未決で陥つた空虚の正体は、実はそのような事情から来ていたのであります。

○小説を書く動機―ドストエフスキイと私。「ほんとうの自由も救いもないが、助けにくれと叫んでも差支えない」ということ。○「深夜の酒宴」どうして死なないか。

私は、そのことを知つたとき、全く絶望してしまいました。「赤い孤独者」という小説を書いてからであります。当時、新宿にゴミゴミした

飲み屋街がありそこで飲んだくれていました。考えなければいいんだ、そう考えたからであります。当時、新宿の駅前に都電が通つていたところですが、そのレールの間に倒れたまま起き上れなかつたことさえありません。向うから電車のヘッドライトが、近付いて来るのですが、バクダンという悪い酒に腰をとられていて、つまり腰を抜かしてしまつたように立上れない。一体、どうなるんだらうと思つていました。しかし、終点に近いので、電車が徐行していたおかげに助かつたのであります。そのころは、太宰治さんが心中という派手な仕方自殺したところでしたが、そんな私を見て、文士の仲間たちは、今度自殺するのは、椎名麟三だらうと期待してしてくれたのであります。しかし私は、自殺はしないだらうと思つていました。自殺できないことは、すでに実験済みであつたからであります。

全くほんとうの救いやほんとうの自由をもつていないかぎり、日常生活においてもまた社会的な実践においても、生々と生きて行くことはできないということはお、もう説明する必要もな「削除」く、みなさま方にもおわかりになつていただ。ことだろうと思つた。この私にとつて、イエス・キリストの十字架によつて、そのほんとうの救いがあたえられているということを知つたときは、大きなシヨックでありました。

\* ニーチェ フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ。ドイツの哲学者。椎名は獄中で『この人を見よ』を読み、転向を表明

\* ケルケゴール セーレン・ケルケゴール。デンマークの哲学者

\* ベルグソン アンリ・ベルグソン。フランスの哲学者

\* ヤスパース カール・ヤスパース。ドイツの哲学者

\* ハイデッガー マルティン・ハイデッガー。ドイツの哲学者

#### 〔2枚目〕

キリストを信じて

〔削除〕 学問的な話に入りましたから、少しばかり私自身の体験を申し上げます。牧師さんをだました恰好になりましたが、しかし私自身は賭として、洗礼を受けたわけでありました。だが頭に冷たい水が二、三滴落ちただけで、何事も起らなかつたのであります。何故そんなバカな賭をしたか。それはいうまでもなく救われたかつたからであり、ほんとうに救われたかつたからであります。

いまから考えますと、この洗礼は、私にとつて決定的な意味をもつていたということが出来ます。だから洗礼を受けてよかつたと思つていたのであります。

小説を書くようになったとき、この人生には、ほんとうのものではなく、したがつて、ほんとうの解決はない、という結論をもつていたようでありました。

世の人々は、このような私に「実存主義の作家」というのはまだしもなのであります。が、「絶望の作家」というレッテルを貼つてくれました。ところはこの絶望の作家は、この世に絶望しながら、飯を五杯もかき込んでいるわけなのであります。人間というものは、ほんとうには信用できないと宣言しながら、信用できない当の人間に向つてせつせと小説を書いているわけでありました。

〔削除〕 私の属している上原教会というところでは、このころは、洗礼を受けなくても教会員になれるようになりましたが、私は、それに反対です。しかし教会の指導者である牧師さんがそうなさるのでありますから、きつと私などのうかがい知ることができない深遠な理由があるのだと思ひ、あるいは、ひよつとすると、私などはまだ見たことのない神が深夜、赤岩牧師さんの枕元へあらわれて、「これ、赤岩、洗礼などしなくてもいい。洗礼を拒否しているものでも教会員にしてやれ」とおつし

やつたのかも知れませんが、私は、自分の納得で」

○赤い孤独者を書いて行きづまること。

○そのころ新宿の駅前で売っていたアメリカのもつて来た五円の本。

「削除 ○洗礼のこと。―昭和二十五年のクリスマス。何故なら私は、友人や知人から笑い者になるということを知っていたながら、自分の一切をそれへ賭けてしまったからであります。何故そんなことをしたか。ほんとうに救われたかつたからであります。その私にとつて、繰り返し聖書を読むという道をえらぶより仕方がなかつたのであります。そしてある日、聖書をよんでいて、クリスチャンの方の多くが経験していらつしやる、あの眼からうろこが落ちるという経験をしたのであります。ルカ伝の復活のくだりを読んでいたときだつたのであります。」

○しかしキリスト教へ眼を向けさせたものは、たしかにありました。それはドストエーフスキイという私の文学の眼をひらいてくれたロシアの作家であります。だから私にとつて、ドストエーフスキイは、文学へ眼をひらいてくれたと同時に、キリストへ眼をひらいてくれたという二重の恩人であるということができます。「削除 このドストエーフスキイの小説は、ことに後期の作品は、非常にむづかしいものであります。ことに私が一番最初に読んだ「悪霊」という作品は一番」何故ならドストエーフスキイは、徹底的に神の存在という問題を追及して行つた人であるからであります。

個と全体―孤独と愛―自由と連帯―をともに生かし得る根拠になる「追記 フルシチョフの共存」いわば第三の自由こそ、第三の立場こそ、新しい文学の可能性の根拠となると思うのであります。

### 椎名麟三講演メモ18

年月日不明 ノート紙5枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

つていいでありましょう。また、いま、推理小説ばかりで、松本清張\*が月に六百枚も書くという聞いて私は警嘆したのであります。すぐに水上勉\*という推理小説を書く人があらわれて、月千枚を書くというのであります。もう何をかいわんやと思つています。今度は月に千二百枚だという新人があらわれて来た。しかし推理小説が、文学であるかとなると、そこに問題があります。ここにいい例があります。日本文芸家協会では、創作代表作集というようなその年の、問題作を出しています。むろん一つの作品の枚数には、収録作品を多くのせるために、五、六十枚が限度の短篇であります。丹羽文雄\*さんが、ちよつと商売気を出して、推理小説ばかりだから、推理小説の代表作を出してはどうかという提案を理事会へ出した。だが、翌月の理事会では、その提案の撤去を自分でまた提案しなければならぬとい

\*石川達三 小説家  
\*松本清張 小説家。1958年の「点と線」がベストセラーとなり、社会派推理小説ブームを巻き起こした  
\*水上勉 小説家。60年代前半には「飢餓海峡」など社会派推理小説を多く執筆した  
\*丹羽文雄 小説家

「2枚目」  
う破目に陥つておしまいになった。というのは、推理小説の代表作全集というのは全く売れないということがわかつたからであります。一度、その小説を読んで犯人がわかつてしまうと、読者は二度と読まないということがわかつたからであります。松本清張は、純文学の出身でありますから、ある程度文学的なのをもつてゐる。しかし他の最初から、推理小説作家から出発した人の作品は、そのトリックがわかつてしまい、犯人がわかつてしまうと、もう二度と読めなくなつてし

### 「1枚目」

#### 1. 信仰と文学

私は、この前に一度、この労働学校で話したのでありますが、そのときその私のお話をお聞きになつた方は、どんなに話が下手かということをお聞きだろろうと思ひますが、しばらく御辛棒を願ひたいと存じます。今日のお話は、「文学論」というむづかしいな題名になつていますが、別に専門的な論議を展開しようとしてゐるものではありません。小説の本など、手にしたことがないとおつしやる方も、映画やラジオやテレビを通じて、ある小説の脚色という形でも、文学的なものに接していられると思います。もちろん脚色されたものは、原作通りのものではありません。先月の日本文芸家協会の理事会で、―私もその理事の一人であります。―ときたま乱暴な脚色があり、石川達三\*さんから、乱暴な脚色についての各放送局や映画会社に対する警告への動議があり、それを可決したことは、新聞でごらんになつた方があると思ひます。石川さんの体験によると、作品のなかで重要な役割を演じている人物を、脚色に困難だという理由で、話の途中で殺してしまつていたというのであります。私も、多少のその種の被害を受けています。一番ひどかつたのは、ラジオの名作集という番組で、私の「美しい女」という作品がとり上げられていたのであります。それは最初の三分の一だけで、後の三分の二はカットされていきました。いくら「美しい女」でも、首だけで、胴体も足もないというのでは、美しい女といえるわけではないのであります。恐らくみなさんも同感して下さるだらうと思ひます。

しかしそれでも、文学的イメージの何程かは、つたえられているといまうのであります。それでなくても、一夜にして、有名になり、年収何千万という私たちからちよつと考えられない収入が得られるという魅力は、小説志願の若い人々の心にある影響をあたえてゐる。恐らく私一人ではなく、多くの作家や評論家もその災難に出会つてゐるのでしようが、私の場合にしましては、月に最小限二篇や三篇、作品を送りつけて来るのであります。そのまま送りかえずにも、一度はその小包みをあけなければならぬ。するとなかに必ず手紙が入つてゐる。郵便法では違反なのでしょうけど、そのなかであります。その手紙は、必ずといつていいくらい、どこかの雑誌社へ紹介してほしいというのであります。しかしそれにはくどくど、家族関係がうまく行かないということや、現在のつとめがつからぬので、何とかそこから逃れたい。そのためにはどうしてもお金が欲しいというところが書かれてゐる。つまりその人にとつて問題なのは、自分の作品でなくて金なのであります。ひどいのは、あなたの作品なんか全然ないけれど、聞けばあなたは、クリスチャンだそうだから、出版社へ推薦してくれてもいいはずだ、というのもある。もつとひどいのは、一、二三年前経

験したのであります。ある日、一通の速達が舞い込んで来た。何ごとかと思つと、五万円すぐ送つてもらいたい。とどき次第作品を送るからと書いてあるのです。所書を見ると、四国の人ですが、これにはさすがの私も、いささか度胆を抜かされてしまいました。

ある日本の有名な作家は、何故小説を書くかと問われて、金と虚栄のために書いているんだと答えています。しかしむろんその作家のアイロニーであつて、何故小説を書くかという理由を拒絶するためのものであります。何故なら文学というものは、本来そういうものではないのであつて、たとえその作家が金と虚栄のために書いているのだとしても、

少くとも作品に向つているときは彼はそうではないということだけは確

言できるのであります。何故なら、小説ほど書いている人の人格、いい

かえればそ

【3枚目】

人がどんな自由を求め、どんな自由に生きているかを端的に示すものはないからであります。だから文学というものを一口に定義づけて、フランスのサルトルは「文学というものは、人間が自由を求める一つの仕方だ」といつていますが、正にその通りなのであります。だからそれがどうしても逃れないならば、ペンをすてて、デモに参加したり、ストライキに参加しなければならぬということも起るのであります。文学と人間の自由を切りはなしては考えられないのであります。それは、文学をつくるという創造の場で起るだけではなくて、読むという行為のなかでも起るのであります。このことをわかりやすい例で申し上げたいと思います。

## 2. 意識のめざめ

みなさん方は、いくつぐらいのときからの記憶をおもちでありましようか。天才の人は、もう二才ぐらいのときからの記憶をもっているようでありますが、このなかに二才ぐらいのときの記憶をもつていらつしやる方があるとすれば、天才の資格は十分にあるわけで「追記 だから自慢なざつていい資格が十分ある」あります。私の場合は、残念なことには天才ではありませんので、せいぜい五つぐらいのときからの記憶しかありません。しかも断片的なものであります。母親の針仕事をしているときの姿だとか、どうも今から考えると、大阪の天王寺ではないかと思うのであります。母親とお寺参りしているときの記憶ぐらいなものであります。何故、記憶を問題にしたかと申し上げますと、人間の意識のめざめ

ということを考えたいと思うからであります。そしてこの意識の本来の

性格というものが自由という性質をもっているのであります。私たちが

何かを意識できるということは、人間の自由とはきりはなしては考えら

れないと申し上げてもいいと思います。

「追記 「表現でついて」の話のときをここで再確認して」

いいかえますと、人間の自由というものは、光源、光の源なのであります。だから自由を失っている人間というものは、何も見ることはできない。いわば死んでいる状態だと申し上げてもいいでしょう。それはたとえて申し上げますと、真暗な部屋のなかに座っているようなものであります。自由という電灯をつけて、はじめて部屋のなかのものをみることでできますし、だからのはじめて見たものを考えたり、そしてまた芸術的に表現できるのであります。ところがここで困つたことが起ります。みなさん方のめいめいもつていらつしやる自由の性質がちがうということでもあります。いわばそれは電灯の色がちがうようなものであります。

○赤い色、青い色

○その矛盾

【4枚目】

○読者の自由の立場。―純粹な自由。

○因業な高利貸のおばあさんの話。と映画。

## 3. 文学と私との関係

この前の労働学校で、私が共産黨員として検挙され、一年あまりの留置場生活に出会つた拷問やその後の未決でどんな問題に直面し、その問題が私の現在に至る生活をどんなふう決定して来たかを、お話し申し上げますので、ここではふれませんが。ただ、私という人間は、少年時代、家庭の不和から家出しなければならなくなつて以来、一瞬に人間の

自由を求めて来た人間であるということだけで、問題を私と文学との関係に限定したいと思ひます。

私は、家出少年時代は、自然科学の本が好きで、それから自然に社会科学の本を読むようになりました。満で十七才ぐらいのとき読んだドイツの社会主義者の書いたベーベルの「婦人論」が、私にとつて最初の左翼的な思想の洗礼であつたわけなのであります。だから、母の自殺未遂を契機に、関西の私鉄の交通労働者となつたのであります。車掌になつて間もなく、非合法の労働組合である全協(全国労働組合)\*の支部を職場に組織したのであります。むろんその労働組合をプールにして、共産党の細胞をつくつて行きました。その党からやつて来る非合法の出版物で、はじめて小説というものにふれたのであります。

○その小説に出て来る労働者

○実践のなかにあるふかい孤独。

焼酎、マージャン、「何故生きているのか」というニヒリズム。

○内面性の問題―孤独と愛―個人的存在として考えても、先刻、意識のめざめにふれましたが、天才は二才ぐらいから意識をもつていると申ししても、この世のなかの何かについで意識であり、自由なのであります。そのかぎりでは、この世界全体というものは、少くとも自分の世界から引きはなされるといふことはないわけなのであります。

○孤独の問題と愛、

○池の話。

\*全協(全国労働組合) 正式名称は日本労働組合全国協議会。日本労働組合評議会解散後、1928年に結成された左翼労働組合。日本共産党の指導のもと、プロフィントレルンに加盟。度重なる弾圧や内部対立などにより1936年に自然消滅

した

【5枚目】

車掌となり、間もなく非合法の労働組合である全協(全国労働組合協議会)の支部を組織し、その労働組合をプールにして、共産党の細胞をつくつて行きました。その党からやつて来る出版物で、はじめて小説というものにふれたのであります。

○その小説に出て来る労働者。

○実践のなかにあるふかい孤独。

焼酎、マージャン、「自分は何のために生きているのか」という呟き。

○労働者を生きた具体性においてつかまえていないということ。

○「文学は、政治的な実践には役に立たない。」

○拷問や未決で出会つた愛のニヒリズム

○出獄後は、獄中で偶然読んだニーチェから、いわゆる(生の)実存哲学の本を読んで行つたこと。キルケゴールやヤスパースやハイデッガーやその系譜のなかに入つていられるというので、ベルグソンやデイルタイ\*など。―しかし何の解決も得られなかつたこと。

\*デイルタイ ヴェイルヘルム・デイルタイ。ドイツの哲学者

## 椎名麟三講演メモ19

年月日不明、ノート紙一枚 鉛筆・ペン書  
女子学院での講演

女子学院

私は、ただでさえ、話が下手ですか、こんな若い人々を前にしてお話

しするのは、数年前一度したきりでありました。というのは、その一度でこりてしまった。自分自身に絶望したわけでありました。私は、相手が大学の先生であれ、一般の人々であれ、自分の思っていることしか話せないというところから来ていると思います。さらに申し上げますと、自分の問題としていことしか話せない。しかもその問題は、私にとつてはむつかしい問題なので、ついむつかしくなつてしまうようなのであります。で、今日ではできるだけやさしくお話しするつもりであります。もしむつかしいところ、わけのわからないところがありましたら、後で御質問いただければありがたいと思います。

人間の一生を考えて見ますと、青少年時代にその方向が決定してしまふのではないかと思います。私は、人から「人間の自由」というものを課題にしている作家だといわれていますが、それは、少年時代に自分の自由を求めずにはいられない環境に投げ込まれたせいだと思つています。

〔以下ページ欠落〕

### 椎名麟三講演メモ 20

1961年頃「推定」、ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

#### 〔1枚目〕

それでは、ジミイという男は、どんな男が申しますと、労働者出身なのであります。作者のオズボーン\*がそうであつたようにであります。そしてジミイは、苦学をして大学を出たのであります。自分の「意味のある」生活として何をやつているかという駄菓子屋をやつてい

ただ、といつてそれがこの豪勢なお国の役に立つわけではない」といのであります。もう彼のいう豪勢なお国とは、イギリスのことを皮肉にそういつていることは申すまでもありません。しかも現代において生きるということは、どういことか。彼は、いのであります。

\*オズボーン ジョン・オズボーン。イギリスの劇作家。「ジミイ」はオズボーンの代表作「怒りをこめてふり返れ」の主人公

#### 〔2枚目〕

「全くおめでたい無鉄砲な話だよ。走つて来るバスの前に立つているみたいに愚かなことだよ。しかしそれ以外に仕方がないやね」

というのであります。彼は、労働者出身なのでありますから、どうして共産主義にその希望を見出さないのであるか、とみなさま方のうちにはそう思われる方もあるかも知れません。しかし彼は、それを否定はしないが、ただ、それに対していらしたものを感ずるだけなのであります。それにほんとうの希望も救いも見出せないようであるからであります。といつて教会のベルを聞いてもまたいら立つ。第一次大戦後の青年とくらべてこの「怒れる若者」の特徴的な点だと思つておりますが、教会は否定しないが、その存在に対してはいら立つわけなのであります。少くとも彼にとつて、教会は、ほんとうの希望も救いもあたえるものではないからであります。いいかえますと、バスの前につつたつていより仕方のない、生きていのは、ただの愚かさからだとしかしいようのないこの人生に対する絶望から救つてくれるものではないということなのであります。

さて、ここで考えてみたいのは、一人の作家が、自分の絶望から救つてくれるものはないと人々に訴えることは何を意味するか、ということでありました。いいかえれば、自分を生々と生かしてくれるところのほん

であります。私は、イギリスはもちろん外国へ行つたことがありませんので、イギリスの駄菓子屋\*というのは、どんなものか知りませんが、映画で知つているかぎりは、日本と同じように子供が飴玉や駄菓子を買いに来る店のようで、その主人も老人であるようであります。日本よりもガラスのケースがちゃんとしているようであります。とにかくジミイのよう前途有為の青年のやる仕事ではない。この駄菓子屋を、クリフという自分に残されたただ一人の友人、扱にくいいややつだと思われる男に、あの男にもいいところがあるんだと女房でもあるかのようにつきしたががつてい不思議なほど善良な男が世のなかにいますね、そのクリフはそういう男なのであります。その男と一緒に駄菓子屋をやつていわけなのであります。私が、何故、駄菓子屋にこんなこだわつていかと申しますと、前途有為の大学出の青年が、ほかの職業がつけないわけではないのにわずとえらんで駄菓子屋をやつていことなかに、作者のそしてジミイの現代に対するいらたらしいプロテストがあると感じられるからであります。

この芝居は、三幕で、その場面は、ほとんど日曜なのであります。ジミイは、何ものも信じられない。恋人と同棲していのであります。その恋人にもいじわるく当り散らし、恋人さえもいたたまれなくなつてしまふ有様であります。そのジミイは、何をしていのかというと、老人のように新聞を読んでいるのであります。そんな自分に耐えられなく、同じアパートにいるクリフに対して、毒舌をはき散らしたり、わるふざけをしたり、始終いらいらしながらのべつまくなしに喋つていわけなのであります。そのいつていことは、次の一つのせりふに要約されると思ひます。つまり彼はこういのであります。「現代には有意義なものは何一つありやしない。ただ、おれたちはピカドンでふつとぶ

どうの希望をほんとうの救いを求めているということなのであります。それでは、アンチ・テアトルの運動のなかに生れたベケット\*の「ゴドーを待ちながら」について考えてみたいと思ひます。この作品は、「怒りをこめてふり返れ」と同じ七、八年前に上演されたものであります。発表当時は、前衛劇として絶対肯定するものと、絶対否定するものと、つまり極端な賛否にわかれて議論が沸騰したといわれているのであります。前衛劇といのは、とにかく当らないといわれているにかかわらず、興行的にも成功してロングランとなり、二年にわたつて再演を重ねて、上演回数は三百回を越えたといわれているのであります。

といえ、何か面白い筋でもありそうであります。全く何の筋も状況の変化もないのであります。エストラゴンとウラジミールという二人のうらぶれた紳士のような男と、これまたうらぶれたような労働者のような男と、木の一本ある道ばたで

\*ベケット サミュエル・ベケット。アイルランドの劇作家

#### 〔3枚目〕

「ゴドー」という人物を待つていというだけの芝居であります。第一部と第二部の、いわば二幕の芝居であります。第一部も第二部も何の状況の変化もない。つまり「ゴドー」という人物のやつて来るのを待つていというだけなのであります。おたがい何の意味もない支離滅裂のことをしゃべりながらあります。たとえば、「キリストと二千年前に一緒に生きていたけど、あいつは先に死にやがつた」というようなせりふを聞くと、二千年前から生きていたようであります。しかし何十年前前から待つていようでもあるのです。そしておちぶれた紳士風の男は、頭ばかり気にして。つまり帽子ばかりを気にして、何かといえはすぐオシツコがしたくなつてしまふ。一方のウラジミールという



おちぶれた労働者は、足の方ばかり気にしている。つまり破れ靴をぬいだりはいたり、その臭いを嗅いでみたりしているだけなのであります。そんなくだらないことばかりして何をしているのかというと、「ゴドー」を待っているだけなのであります。しかもその二人の人物にとつて、「ゴドー」という人物は何者なのか、さつぱりわかっているかという点、男か女かということさえはつきりしていない。ただ、確実なことは、彼がやつて来さえすれば、ほんとうに救われる、ということなのであります。

これは、去年、文学座のアトリエ公演\*で上演されたものであります。この芝居を見た日本の観客の多くは、さつぱりわけがわからなかつたようでありまして。つまりほんとうの救いを求めている痛切さは、日本よりフランスの方が強いのでしょうか。つまり日本人のようが、フランス人より、幸福すぎるのかも知れません。また、この作品が、神学的な作品だといわれていることから、キリスト教の地盤にいない日本の方々にはわからなかつたということもあるかも知れません。しかし私は、日本人であつても、ほんとうの救いの痛切さを感じていると思うのであります。少くとも、私も日本人の一人であるかぎりにおいて、全部の日本人がだめだ、ということにはならないと思うのであります。

【削除 この「現代とニヒリズム」という話において、何故小説でなく芝居をとり上げたかと申しますと、小説よりも芝居の方が、そのときの時代というものに対して敏感であるからであります。そしてこの二つの芝居からも、ほんとうの救いを求めているヨーロッパの絶望、少くともイギリスやフランスの絶望が感じられるのであります。】

◎ヨネスコ\*の「無垢の殺し屋」―カフカ\*の審判に似ている。

\*文学座のアトリエ公演 『ゴドーを待ちながら』の日本初演は、1960年5月24―30日、文学座アトリエ公演として上演された

新人を発掘したこと、しかし彼は、間もなく女房の問題で書けなくなつてしまいました。それから荒本の「アンチ・クリスト」という論文が、その二年間つづいた雑誌の功績といえは功績でしょう。この荒本さんは、私の家の前にいた熱心なキリスト者で、彼の書斎には、外国語の聖書がずらりとならんでいました。しかし彼が、「アンチ・クリスト」という論文を書いて間もなく、腸捻転で、手術を二、三回やつて、その手術の傷口に糞汁がにじみ出ているという悲惨な状態で死んだのであります。私が最後に見舞いに行つたとき、私へ「織田作\*のようになるな」というのがやつとのおようでありました。そして彼は、呟くように、「ぼくは神を信じていたのに」といつたのであります。それから二、三時間後に彼は死んだのであります。この彼の呟きは、私に強いシヨックでありました。大げさというならば、神を見たような気がしたのであります。私より、二つ三つ若かつたのであります。実に誠実な男でありました。

そして、ドストエーフスキイに対する信頼と、荒本さんの死と、神にして人というイエス・キリストの存在へひかれてキリスト教へ自分自身をかけたのであります。むろん一年ほどは聖書を読んでも、マタイ伝の第一頁からつまづくわけで、つまりどうしてもキリスト教がわからなかつたわけでありまして。そして一年もたつたあるとき、ルカ伝を読んでいるとき、眼からうるろが落ちる思いがしたという経験をもつています。

\*荒本 荒本守也。本名・清水義勇。ドイツ語辞書編集者。クリスチャンであり、日本共産党員でもあった。椎名麟三の自宅前に住んでおり、親しく往来した

\*船山馨 小説家。戦後、妻の佐々木翠（本名船山春子）・椎名とともに、出版や印刷・貸本を扱う「創美社」を世田谷の千歳烏山駅前に設立した

\*福田恒存 文芸評論家、翻訳家、劇作家。講演で触れている戯曲は正しくは「キティ

\*ヨネスコ ウジェーヌ・ヨネスコ。ルーマニア、フランスの劇作家

\*カフカ フランツ・カフカ。チェコの小説家

### 椎名麟三講演メモ 21

年月日不明 ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆書

さて、戦後「深夜の酒宴」を発表したのを契機に、次々と作品を書きはじめましたが、それらの作品に一貫していることは、自由への追求であつたわけでありまして。どんな自由をか。最後に私を行きづまらせてくれた「赤い孤独者」と題名があらわしているように、この題名はあまりいい題名とはいえませんが、しかしそのときの私の希望をあらわしていることだけはたしかなのであります。それは、社会的な自由と個人的な自由を共に生かしてくれる根拠となるところの自由であります。第三の自由といつてもいいでしょう。しかしそれがどうしても得られなかつたところに、この現代を、自分をいつわらずに生きて行くことに絶望したのであります。「追記 新宿でのんだくれ」結局ドストエーフスキイに対する信頼と、荒本\*というキリスト者―戦後共産主義に近寄つて、アンチ・クリストという論文を書き、そのころ私たちのやつていた「次元」という雑誌に発表しました。「次元」という雑誌は、私の友人船山馨\*とある映画雑誌の出版社の社長の援助を得て出していた雑誌で、ちゃんとした原稿料も払いました。福田恒存\*の戯曲、たしか「キチイ台風」だつたと思ひますが、雑誌の半分をつぶして掲載し、その原稿料を社のものにとどけさせて、福田恒存を喜ばせたこと、そのころ戯曲を掲載して原稿料を払うような雑誌がなかつたせいでもあります。それから島村進\*という

### 颱風

\*島村進 小説家

\*織田作 織田作之助。小説家

### 椎名麟三講演メモ 22

1959年7月以降「推定」、ノート紙4枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

### 「1枚目」

私は、あのイギリスのオズボーンの訴えを聞いたのであります。そして私は、そのあまり上手だとはいえないその芝居に、近來にないシヨックを感じたのであります。私はそのころ演劇運動を推進するために、千田是也\*や田中千禾夫\*や野間宏\*や安部公房\*や堀田善衛\*木下順二\*などの諸君とある会合\*を月に一回もつておりますが、その会合でこのオズボーンについての報告会をやつたのであります。そのとき、木下順二も、私と全く同じ言葉で、その芝居にシヨックを受けたと云つていたのであります。

「怒りをもつて振りかえれ」という芝居の題名が示しているように、イギリスのいわゆるアングレイ・ジエネレイションは、怒りをもつて過去にいどみかかるのであります。何故未来に対してではないのか。と申しますと、未来は彼等になくからであります。彼等にできることは、振り返ることだけであり、未来がないわけなのでありますから、そのことに怒つて振り返るわけなのであります。その劇の主人公ジミイは、いらしなげながら、のべつまくなしに喋り立てる。彼は、いう。「有意義で雄々しい目的なものは、一つもない。一たびピカドンとくりや、お

れたちはふつとんでしまっただけさ。そうなつたところで、古い時代の豪華なお国の役に立つわけではない。全くおめでたい、無鉄砲なだけだよ。走つて来るバスの前につつ立つているようなものだ」という。しかし彼がそういうとき、情熱のはげ場を失つて、ただいらいらしている怒れる若者たちの、暗い絶望と孤独が感じられて来るのであります。そこには、生きて行くためのホントウの根っこをもつていない人間というもののいらい立ちが感じられる。

その彼等には、反抗しようにもホントウに反抗したい対象をもつていない。しかも行きどいたイギリスの福祉国家が、その反抗さえ骨抜きにしよとかがかかっているようにさえ思われる。私は、社会福祉の行きとどいているスエーデンなどで、かえつて自殺者が多いという話を聞いて、妙な気がしたのであります。オズボーンはこの芝居を見ていたとき、その彼等の背景にも、それと同じような無気力な人間がいるように感じられたのであります。しかしこのジミイさえ、ジェームス・デイーン\*の名を口にするのであります。デイーンが、彼の魂であるかのようにあります。

そして私は、遂に共産圏にあるあのポーランド映画においても、ジェームス・デイーンを見たのであります。「灰とダイヤモンド」であります。その前の「地下水道」も、そして「影」もいわゆる商業映画にはないところの強い訴えをもつていて、非常にいい映画でありましたが、この「灰とダイヤモンド」も非常にいい映画だと思います。この映画は、終戦時の混乱が背景になつていたのであります。昨日までドイツ兵を射つていた同じ情熱と同じ信念で、同胞に対する暗殺者とならなけ

\*千田是也 演出家、俳優

\*田中千夫 劇作家、演出家

て彼等の怒りや絶望や孤独は、彼等にはもう信ずるに足る未来がないというところからやつて来ていると思われるのであります。全くアメリカやイギリスやフランスは戦勝国でありますから、このような現象は不思議な気がするのであります。何故ならば、怒れる若者たちに相当するのは、わが太陽族\*でありましようが、しかし我等の太陽族は、外国の若者たちの極端な貧しさにくらべて、ヨツトを乗りまわしたりして、まことにしたい放題のことができるように思つていようであります。わが太陽族にこそ、ホントウの未来があるかのようなのであります。

しかしそれはホントウでありましようか。これらの映画や劇の主人公は、男であるからと云つて、女のあなた方に関係がないといえないのであります。それは、その主人公を理解できる女たちが出て来て、その主人公たちと同じようにひどい目に会うことになつている、というだけではありません。より根本的に、彼等の怒りや絶望こそ、人間本来のものであり、現代というものもつているニヒリズムにふかく根ざしているものだと思われからであります。少くとも、私に關していえば、彼等のいら立ちの根源になつているものが、私のなかにもはつきりあることを感じるのであります。私が、「怒りをもつて振り返れ」という芝居を見てシヨツクを感じ

\*怒れる若者 アングリヤングメン。オズボーンの「怒りをこめてふり返れ」からうまれた言葉。旧来の価値観に反抗する若者たち、また、そういった人物たちを書いた1950〜60年代の作家を指す

\*太陽族 1955年発表の石原慎太郎「太陽の季節」からうまれた言葉。既存の道徳や価値観にとられず奔放な行動をとる若者たちをいう

### 〔3枚目〕

たのも、私自身のなかに、オズボーンの訴えるところのものと同じ感情

\*野間宏 小説家、評論家

\*安部公房 小説家、劇作家、演出家

\*堀田善衛 小説家、評論家

\*木下順一 劇作家、演劇評論家

\*とある会合 労働者音楽協議会のことか

\*ジェームス・デイーン ジェームス・デイーン。アメリカの俳優

### 〔2枚目〕

ればならないマチエツクという若者が主人公になつていたのであります。その若い役者は、ポーランドのジェームス・デイーンの再来を騒がれているというのでありますが、それほど動作もその風貌もそっくりなのであります。しかし、デイーンが少しあまいところがあるに反して、このチブルスキイという役者は、もつとからくもつとドライだといえるでしょう。しかしその人生に対する考え方までも似ている。その彼は、まるでポーランドの怒れる若者\*を代表しているようにさえ思われるのであります。その彼は、最後に近くなつてから真剣に問う。「自分のいままで信じて来たことを、すべて信じていいんだらうか」もちろんこの問いに対して、自分の正しいと思つていことが、すでに信じられなくなつてい彼の暗い絶望が表現されている。それに対して彼の相棒は、「信ずるより仕方がないじゃないか」と答えるのであります。このすべをほんとは信ずることはできないという気持は、あの敗戦当時ソビエトに裏切られたといわれるポーランドの若い人々の心のなかにとけがたいものとして残つているものかも知れないと同時に想像されるのであります。

アメリカやフランスやイギリスや、そしてポーランドなどにおいて、打ちのめされた、そして怒れる若者たちが生れているということ、そし

が内在していたからなのであります。先刻から、いわばアメリカやヨーロッパの諸国の若い世代に、彼等の代表者であるかのようにデイーンの名が口にされているのは、デイーンのあの暗い、いらただし「理由のない反抗」にふかい同感をもつているからだと思われるのであります。そして理由のない反抗というものをさらに押しすすめて行きますと、その反抗の理由のなさ、そもそもにおいて人間の存在の理由のなさに通じており、またフランスのアルベール・カミュ\*が「シジフォスの神話」のなかで「不条理な感情」といわれているものにも通じているのであります。広津和朗\*さんと中村光夫\*さんとの間に、カミュの作品である「異邦人」に關して、論争が起つたことがあります。が、「ムルソー」という主人公のおかした殺人を、公判廷で「太陽のせいだ」というのであります。それはむしろ積極的な理由の拒否だつたわけであり。そしてフランスの怒れる若者たちの反抗が、実存主義的な風貌をおびているということも、カミュの不条理に通ずるものとして考えられるような気がするのであります。

このように生きるにも死ぬにしても、私たちを納得させてくれるホントウの理由がないということ、根拠となる根っこがないということは、私たちをいら立たせます。死は生理的な必然だと云つても、死にたくないものをどうして納得させてくれるでありませんか。そしてたとえまやかしても希望のある平和な時代においては、私たちは、私たちの存在の理由のなさをごまかして生きていことができるのであります。が、「怒りをもつて振り返れ」のジミイが云つていますように、ピカドン一発でふつとんでしまつてしまうこの危機の時代においては、人間存在のこのような条件というものは、裸にされて私たちの眼に見えて来るのであります。私は、このことについて、戦争中の一つの体験が思ひうかんで来ます。

私の近所に純真なハイチーン\*がいました。彼は国を愛し、天皇のために死ぬことを誇りに考えている、立派なハイチーンでした。しかし空襲のあつた夜のことです。サーチャイトに照し出されて銀色にうかんでいるB29の空襲を見ていたのであります。それは本所や深川を空襲された夜でした。それは私は、ハイチーンハイチーンの少年と世田谷から見ていたわけなのであります。その空襲のくぎりすんだらしいころです。私は、その少年に、地球と衝突しそうになつたウインネットケ彗星やハリー彗星などの話をして、やがてこの地球もほろびてしまうことになつてゐるのだという話を

\*アルベール・カミュ フランスの小説家、劇作家、哲学者

\*広津和郎 小説家

\*中村光夫 文芸評論家、小説家、劇作家

\*ハイチーン ハイチーン。10代後半の年代のこと

〔4枚目〕

したのであります。するとその死んでもいいと思ひ、実際そのつもりで喜んでゐたその少年が、急に恐怖の表情をあらわして、「そんなことあるもんか、そんなことあるもんか」と口走つてゐるのであります。もちろん寒さのせいではありましようが、身体さえガタガタふるわせてゐるので、私は、その思ひがけない彼の様子に強いおどろきを感じたことがあるのであります。自分一個の死には全く平氣であつた彼が、世界全体、この地球全体がほろぶということになつて、はじめて彼の存在の根が彼に見えたのだということができると思ふのであります。

そして現代は、この全体が失われてしまふという危機において、人間の存在の根つこのなさがなさがその姿をあらわして來てゐる時代だと思はれるのであります。「削除 その根とは何でしょうか。」いわば人間にあると思

を要求されているのであります。

### 椎名麟三講演メモ23

1962年以降「推定」、ノート紙2枚 鉛筆書

「たねの会」での講演

〔1枚目〕

の復活の箇所を読んでいたときに、キリスト者の多くの方の経験していらつしやることと同じなのであります。あるシヨツクとともに眼からうろこの落ちる思ひがしたのであります。

以来、キリスト者として文学活動をつづけて來ました。このことは、去年、お話し申し上げたので、ここではふれません。ただ、私が、「たねの会」へ入る前の、世界の特にわかい人々の精神状況が、とくにキリスト者の責任をつよく求めていたということを申しのべたいと思ひます。むろん私は、外国語ができませんし、外国旅行をしたは、中国へ行つたという以外はありません。ただ、小説や映画や芝居を通じてそれを知るだけあります。

そのころ、ヌーベル・バーグ\*の映画が入つて來た。とくに印象に残つてゐるのは、「危険な曲り角」\*で、そこにフランスのある若い人々の生體が描かれていた。実存主義者を気取る、妙な格好をした若い人々であります。そして彼等が、あの「エデンの東」\*や「理由なき反抗」\*のジエームス・デイーンの名を口にしていたということが、私の興味をひいたのであります。

\*ヌーベル・バーグ ヌーヴェルヴァーグ。1950年代後半からフランスで起こつ

つていた根つこが、全くなかつたのであります。生きるということにも私たちをホントウに納得させてくれる理由なるものはない、また同様に、死ぬということについても、私たちをホントウに納得させてくれる理由なんか、ないということなのであります。そしてこの人間の事実というものには、戦後の世界の文学が出発したときの根拠でもあつたわけなのであります。このような人間の事実のなかで、人間の自由というものがあり得るのだろうか、そしてまた、このような事実のなかで生きて行くには、どうすればいいのか、ということが、戦後に出版した文学の課題であつたわけなのであります。

もしこの答えが見出されなるときには、あの「怒りをもつて振りかえれ」のジミイのように、いらいらじれるばかりで、何もしいし、また何にも責任をもつこともできないで、新聞を読みながら、退屈をまぎらして行くより仕方がないのであります。そこにあるのは、ただ、理由のない反抗ばかりだと思はれるのであります。その反抗は、希望のある抵抗になるといふことは、絶対にないと云つていいと思ふのであります。「灰とダイヤモンド」の青年は、最初ドイツに対する抵抗組織に属してゐた。しかし何も信じられなくなつたとき、だから希望を失つたとき、単なる政府軍に対する反抗として、暗殺者、つまり殺し屋になるより仕方がなかつたのであります。いいかえますればほんとう希望のないところに、ほんとうの意味の生きて行く道もあり得ないということなのであります。しかし人間は、とどのつまりは、死ぬものであり、希望のないものだとするならば、どういふふうにして希望をもち得るでしょうか。それが先刻も申しましたように、世界の戦後文学といわれるものの出発点だつたと云つていいのであります。

しかもそれはまだ解決されていない。しかし世界の若い人々から解決

た映画運動

\*「危険な曲り角」 マルセル・カルネ監督のフランス映画。1959年日本公開

\*「エデンの東」 ジョン・スタインベック原作、エリア・カザン監督のアメリカ映画。

1955年日本公開

\*「理由なき反抗」 ニコラス・レイ監督のアメリカ映画。1956年日本公開

〔2枚目〕

そしてその戦後文学の課題は、むしろ世界の若い人々から解決を要求されておゐり、その要求に答え得るのは、キリスト者だけだというのが、私の「たねの会」へ入つた動機であります。「削除 その論理的な裏付けについては、作品集に書いておきましたから、御読みになつていただけなら幸いです。」

### 椎名麟三講演メモ24

年月日不明、ノート紙3枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

NHK高知放送局の放送メモ

〔1枚目〕

NHK高知放送局

私は、今日、坂本竜馬の碑を見「削除 て來た」に行こうと思つてゐるのであります。私などは、あの幕末の当時、坂本竜馬は、新しい時代につよい関心をもつてゐた、いわば新しい人間だつたというような印象を、「削除 私などは」映画や芝居なんかを通じて、受けてゐるんですが、新しい文学というようなものに関心をもつてゐる私は、こんな想像をし

たんです。つまりもし坂本竜馬が、小説を書いたとするならば、どんな小説を書いたであろうかということ「削除 想像したん」ですよ。もちろん、実際坂本竜馬は、小説を書いていないんですから、どんな想像もあたらないわけなんです。その内容はとにかく、ただ一つ、もし坂本竜馬が、小説を書いたとするならば、おそらくきつと、当時の人々には理解できない新しい小説だっただろうということだけは、いえる気がするんです。何故、そのようなことをきつぱりいえるかといいますと、小説というもの、その作者の生き方や思想をはなれては、成立しないものであるからです。ところで、人間の生き方や思想というものは、それは御存じの通りさまざまなんです。たとえば、たとえさまざまではありましても、戦後何かといえば口にされるところの人間の「自由」に根拠をおいていることはいうまでもないことです。いいかえますと、さまざまな自由がありますから、いろいろさまざまな生き方や思想が生れて来るのだ、とそう申していいと思うんです。自由といいますと、大層むつかしい気がしますが、一口にいって、この世界に対する人間の精神的な態度「削除 □を指して」と関係があるんだと考えていただければ、そう大したまぢがいはないでしょう。

だからその態度のもち方によつて、さまざまな自由を生み、さまざまな文学が生れて来ます。自然主義文学だとか、社会主義文学だとか、戦後は、実存主義文学とかいうものが生れて来ました。もちろんそれぞれが、人間の自由というものをどう考えるか、どんな自由に人間の救いを見出すのかということによつて、いいかえますと、人間のほんとうの自由とは何なのか、ということによつていろんな「削除 そのような」ちがった文学が生れて来「削除 たのであります」るんです。

自然主義文学の場合は、そのあらわれ方はいろんなものがありますが、か、として追求されて来て、いまだに解決されてはいない。戦争中、滅私奉公という言葉がありました。私をすてて公を生かすのがほんとうの自由なのか、それとも逆に公の方をすてて、私を生かすのがほんとうの自由なのかという問題でもあるんです。

だが、戦後、戦争やレジスタンスを通じて、どちらにも生きるのが、ほんとうの自由だという主張が生れて来たのであります。つまり、私も生き、公にも生きさせることのできる自由こそ、ほんとうの自由だという主張なのであります。つまりたがい矛盾する自由と同時に生かせるところの自由、つまりいま、はやりの言葉でいえば、矛盾する二つのものの共存ですね、それこそほんとうの自由だというわけなんです。それがサルトルやこの間自動車に死にましたカミュなどのいいだした実存主義文学の考え方の根本にあるところの考え方なのであります。

私自身も、青年時代から、この「ほんとうの自由」を求めて、いろいろひどい目に会って来ましたが、それはとにかく、何故文学において、このように「ほんとうの自由」というものを、これほど考えねばならぬのか、不思議だとお考

### 〔3枚目〕

えになるでしょうか？しかし最初に申し上げましたように、文学というものは、人間に生き方に根拠をもつており、したがって人間の自由というものに根拠をもつているということから、すぐ結論がつくことと思えます。それは、「ほんとうの文学」というものを、この地上に確立したいからであります。しかし「ほんとうの文学」というものは、「ほんとうの自由」というものがなければ生れて来ないということもいま申し上げた通りです。全く人間にほんとうの自由が発見されなにかぎりは、ほんとうの文学はあり得ないのだ、といつていいからであります。

根本は、この自然を絶対的なもののように考えます。自然というものは、人間を超えて自由なんだ。だから自然は人間に対する救いなんだ、という考え方の上に立っている。苦しいときなど、海を眺めたり、大空を眺めたりしていますと、自分の苦しみなか海や大空の彼方へ消えて行くような気がして、何だか救われたような気がしますね。つまり自然が、「削除 いわば」神様のよう感じられるわけであります。日本人は、とくにこの傾向が強いのではないか、そう思っています。また、自然を絶対と考えるために、どうしても、自然主義という

### 〔2枚目〕

ものは、運命論的になりやすく、決定論的になりやすいという傾向をもっています。

「このような自然を自由と見る考え方を「削除 嘘」まちがいだ、というのが社会主義的な文学の立場だといつていいでありましょう。自然を神様とするのは、決して苦しみやなやみのほんとうの解決ではない。むしろほんとうの解決というものは、その苦しみやなやみを生んでいる社会的な矛盾から人間を救い出すものでなければならぬ。いいかえますと、人間のほんとうの自由というものは、階級のない社会的な未来にあるのだ、とこう考えるわけであります。

文学というものを大別しますと、大抵は、この二つに要約されるといつていいでありましょう。自然主義は、だからどうしても個人主義的なもの、主観主義的なものとなり、一方は、社会全体のためというような全体主義的な、客観主義的なものとなることは避けられないでありましょう。しかしこれら問題は、「削除 大」昔から、個人と全体とか、自我と社会だとか、一と多だとか、いま流行の言葉といえば、組織と人間だとかという問題として、どちらに根拠をおく自由がほんとうの自由なの

### 椎名麟三講演メモ 25

年月日不明、ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

サマセットモーム\*

—— 文学の方法に、大別して二つの方法がある  
一人称的な方法と客観的な全体的な方法

### ◎何故むつかしいかということ

ホントウのニヒリズムを克服してくれる自由の欠如

ホントウの文学とは何か

〔削除〕 〇人生に対する無意味な感情 切 友人の妻の話

○新しい文学の可能性の根拠  
大江健三郎\*

倉橋由美子

○北海道の女工さんの文集

だが、その物心がついてから奴隷であつたようなその老人には、主人公の自分自身を鎖から解き放つという行為が理解できない。主人公に向つて、「何故そんなことをするのか」とたずねる。すると主人公は、それに対して、「削除 君」おれたちは自由なんだ」とこたえるわけなのであります。そこで、その船のなかで、悪人たちに対する奴隷たちの暴動が起るわけなんです。「自分たちは鎖から自由である」ということを知つたとき、いままでもちがった新しい生き方が、つまりいままでの奴隷の生き方とちがった生き方ははまつて、それが暴動という形に

なつたのだということがいえると思っております。

このように新しい自由は、新しい生き方を生むのであります。だからまた人間のちがつた自由というものは、ちがつた生き方をもっているということもたしかであるだろうと思えます。「削除」したがってまたその自由の種類によつて、いいかえれば、それぞれの生き方によつて、それぞれの文学を生んで行くにちがいないということは、すぐに考えつかれることだろうと思われるのであります。」自由という言葉の意味は、その人によつてちがいます。大きくはアメリカの自由とソビエトの自由とちがうでしょう。いいかえますと、その一つの自由が、どんな救いを意味しているのか、ということによつて、その自由の性質がわかるのであります。あの奴隷船のように、奴隷を鎖から救うところの自由であるのか、この世の心配や不安から救う自由であるのか、または、この社会やこの世界の不合理から救う自由であるのか、というように、「何から救い何から救われるのか」ということによつて、自由の性質がちがつて来るわけなのであります。

いいかえますと、何から救い、何からどう救われるのか、という自由という質によつて、いろんな「削除 文学」思想が生れて来たとして上げることができるのであります。だからまた、何からどう救うのかということによつて、そのもつている自由というものの性質が、したがってそれに根拠をおく人生観や世界観などがわかるのであります。

【わかりやすい例で申し上げます。】「削除」ここに一つの小説がある。作者は、気の毒ですから申し上げますが、その話は、男と女がある日愛し合うようになるのであります。しかし女の方は、次第にその男に不満を感じて来る。何故な。これらの作品のむつかしさは、私たちのなじみのない自由や救いの観点から書かれているということでありませぬ。――

\* サマセット・モーム ウィリアム・サマセット・モーム。イギリスの小説家、劇作家  
\* 大江健三郎 小説家

### 椎名麟三講演メモ 26

年月日不明、ノート紙1枚 鉛筆・赤鉛筆・ペン書

「削除 たないのだ」と結論が形づくられて来たようなのであります。」

さて、私は「私が間ちがつていました。」という転向上申書をかいて、おかげで執行猶予になつて、社会へ戻つて来ましても先程申し上げましたように、実存哲学の本を読みながら、自分を生かしてあげるところのほんとうの自由というものを求めて来ました。関西では生活できず、間もなく東京へ出て行つたのであります。どこへ行つても特高につきまといわれたいわけでありませぬから、就職もできずひどいものであります。特高は、勤先へ一週に一度か二度は必ず友人だとか知人だとかいつてたずねて来るのであります。すぐ、雇主には、その男が警察の人間であるということになるのであります。で、そこを追い出されるという破目に、二度も三度もありました。その最初のころ、逆に特高に就職口を世話してもらつたことがあります。それは、姫路のマツチ工場の雑役夫なのであります。そのときのお話をすると、当時の私の精神状況というものがはつきりするので申し上げますが、そのマツチ工場での仕事は、実にひどいものであります。マツチの棒を立てる一メートル角の枠に震動をあたえて棒を立て、それを鉄の金具でしめつけるのであります。震動によつてその金具が、工場の隅までとんで行く。そういう枠組の機械は十台もあり、しかもその掛りの人は、受取仕事、つまり能

率給なので、とんで行く金具など見向きもしない。で、その金具は、とび放題に工場のなかにとび散る。それを古バケツをさげて、ミレー\*の描くところの落穂ひろいのように、腰をかがめて拾い歩く。何しろ鉄の金具ですから、バケツに半分もたまると持ち上げられないほど重くなつてしまふ。だから仕事が終ると、腰がのびないだけでなく、くたくたにくたびれてしまふのであります。もちろんそんな問題は、馴れば解決したのでしよう。しかし問題は、もらう給料では食へては行けないのであります。しかしその私を支える、何かほんとうのものがあつたとしたら、

それに耐えて行けるでしよう。しかし私には、もうそのような精神的な支えというものは失われていたわけでありませぬ。そして死んだ方がいい、と判断したわけでありませぬ。

そこで私は、工場から梱包用の荒縄をもつて帰つて来ました。私は、当時、家の軒先をふかく伸ばしてつくつた物置のようなところを借りていました。

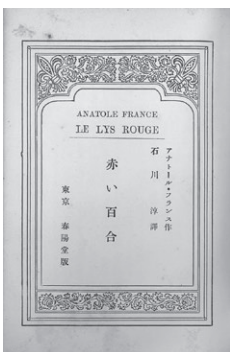
【以下ページ欠落】

\* ミレー ジャン＝フランソワ・ミレー。フランスの画家

# 石川淳 年譜

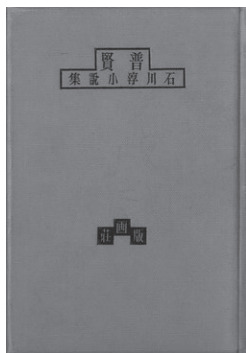
〔本年譜は、石川淳全集（筑摩書房）、新潮日本文学アルバム65 石川淳（新潮社）、鈴木貞美編「石川淳年譜」による〕1988年4月臨時増刊「石川淳追悼記念号」所収）ほかを参照し作成しました。

1899年 明治32年	0歳	3月7日、東京市浅草区寿町に父・斯波厚、母・寿美の次男として生まれる。幼時から浅草区三好町に住む漢学者の祖父・石川介（号：省齋）と祖母・はなのもとで育った。
1905年 明治38年	6歳	4月、精華小学校に入学。この頃から祖父より「論語」の素読を受けた。4年時に新堀小学校に編入。
1912年 明治45年 大正元年	13歳	4月、私立京華中学校に入学。この頃、同校に進んだ幼友達の高橋邦太郎と和漢の古典や江戸文学、夏目漱石の作品に親しみ、淡島寒月や秋田雨雀、また「新思潮」の松岡譲を訪ねたりした。浅草では映画や落語、講談、歌舞伎を楽しむ。
1914年 大正3年	15歳	7月、正式に石川はなの養子となる。
1916年 大正5年	17歳	3月、京華中学を卒業。4月、慶應義塾文科に入学したが半年で退学。
1917年 大正6年	18歳	4月、東京外国語学校（現・東京外国語大学）仏語部に入学。
1919年 大正8年	20歳	7月、養母・はな、死去。
1920年 大正9年	21歳	3月、東京外国語学校を卒業。日本銀行に勤めたが、すぐ退職。通信社などでアルバイトをしながら文学者を志す。
1921年 大正10年	22歳	10月、京華中学同窓の新進文学者たちと文芸雑誌「現代文学」を創刊。11月、「銀瓶」を寄稿。以後、1924年11月まで9篇の小説と1篇のエッセイを発表。編集面でも活躍。
1922年 大正11年	23歳	1月、フランス駐日大使として来日していたポール・クロードルの講演「仏蘭西文学に就いて」を聴く。2月、「拳」を、3月、「手の戦慄」を、6月、「爪喰ひの僧正」を「現代文学」に。8月、短篇「鬼火」で「現代文学」第7号1巻を埋める。10月、短篇「或る午後後の風景」を、11月、短篇「名月」を「現代文学」に。12月、「シャルル・ルイ・フィリップの一語」を「日本詩人」に。以後、この雑誌に1924年まで3篇のフランス文学評論を書く。クロードルの講演「フィリップに就いて」を聴く。
1923年 大正12年	24歳	春から本郷菊富士ホテル別館2階に住み、宇野浩二、高田保らを識り、アナキストのグループとも付き合う。5月、山内義雄訳「狹き門」*に「跋」を書く。「ポオル・クオオデルの立場」を「日本詩人」に。同誌にルビエンスキー「女と影」の考察を翻訳。7月、室生犀星や「日本詩人」のグループを識る。8月、アナトール・フランス「赤い百合」訳刊。9月、関東大震災で新宿区牛込の山内義雄宅に寄稿。慶應義塾仏語会講師となる（翌年3月）。短篇「長助の災難」を「現代文学」に。10月、「詩に関する一考察」を「日本詩人」に連載（翌年3月）。 *日記内（p.49他）では「窄き門」と表記
1925年 大正14年	26歳	福岡高校の学生運動を教唆扇動したとして辞職勧告を受け、2学期限りで休職（翌年3月退職）。大晦日に帰京。
1926年 大正15年 昭和元年	27歳	この頃、鎌倉妙本寺門前に住む。5月、C・F・ラミュス『悩めるジャン・リュック』訳刊。
1927年 昭和2年	28歳	この頃から東京で放浪生活に入る。翻訳・下訳仕事で生活の資を得ながら山内義雄、高橋邦太郎、安藤更生、海老名雄二、小泉清らと親交。
1928年 昭和3年	29歳	10月、ジイド『法王庁の抜穴』（岩波文庫）訳刊。「背徳者」訳を同時収録。
1929年 昭和4年	30歳	3月、「仏蘭西的昏迷」を「時事新報」に4回連載。8月、ジイド『背徳者』（改造文庫）訳刊。
1931年 昭和6年	32歳	この頃、高円寺の海老名雄正宅に居候し、辻潤のグループとつきあう。特に百瀬二郎と親交。
1932年 昭和7年	33歳	この頃、深川富川町の木賃宿に百瀬二郎と暮らす。
1933年 昭和8年	34歳	4月、モリエール『ドン・ジュアン』（ル・シシリアン）訳刊。夏よりエッセイ、評論を寄稿しはじめ、8月、「偶感」を「作品」に。10月、「新詩論」に、カミーユ・モークレル『ステファンヌ・マルメの美学』を翻訳。11月、「背徳者」訳文の脱字を「作品」に。12月、ジイド『思索と随想』のうち「マックス・スティルネルと個人主義」「ニイチエ」を翻訳。
1934年 昭和9年	35歳	2月、モリエール『人間ざらひ』訳刊。「ジイドの日記」に就いてを「作品」に。3月、「ジイドの顔」を建設社版『ジイド全集』第一巻・月報に。6月、「Nadiaにふれて」を「作品」に。7月、「モンテニユの徳」に就いてを「文休」に。10月、モリエール『タルテュフ』訳刊。12月、「年輪」を「作品」に。
1935年 昭和10年	36歳	3月、「挨拶」を「紀元」に。5月、短篇「佳人」を「作品」に。牧野信一が称賛。7月、「私小説の読者として」を「文芸通信」に。8月、短篇「貧窮問答」を「作品」に。10月、中篇「葦手」を「作品」に連載（〜12月）。11月、「ドストイエフスキー」を「文芸通信」に。この頃、杉並区馬橋に住む。
1936年 昭和11年	37歳	1月、短篇「山桜」を「文芸汎論」に。同誌は京華中学の後輩で詩人の城左門が主宰し、以後、小品、エッセイを寄稿。4月、短篇「秘仏」を、5月、追悼文「牧野信一氏を悼む」を「作品」に。6月、中篇「善賢」を「作品」に連載（〜9月）。「象徴詩とヴァレレイ」を「福岡日日新聞」に。8月、「質問提出」新居格氏に「文芸通信」に。9月、「一休咄」を、10月、「降りみ降らずみ」を「文芸汎論」に。12月、短篇「知られざる季節」を「作品」に。「古風な話」を「文芸懇話会」に。「百問随筆に就いて」を「三田文学」に。この頃、文京区白山前に住む。



「赤い百合」扉  
アナトール・フランス著 石川淳訳  
春陽堂 1923年

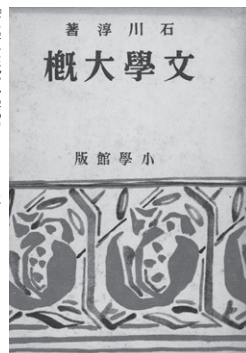
昭和27年 1952年	53歳	1月、短篇「夢の殺人」を「群像」に、「石湧」を「草月」に。3月、首尾を「群像」に。4月、随筆集「夷齋筆談」刊。6〜7月、歌仙を「群像」に(2回)。9月、「夷齋清言」を「文学界」に連載(〜翌年)。10月、短篇「蜘蛛」を「別冊文芸春秋」に、「現代文学の諸問題」(小林秀雄との対談)を「群像」に。随筆集「夷齋清言」刊。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和27年1月1日―12月31日」/本誌p.41〜57参照
昭和26年 1951年	52歳	2月、短篇「演技」を「文芸春秋」に、「森鷗外集」下巻に「解説」。3月、短篇「さらば垣」を「文学界」に、短篇「常陸帯」を「別冊文芸春秋」に。4月、ジイドむかしばなしを「文学界」に。5月、安部公房「壁」に「序」。6月、短篇「末の松山」を「群像」に、短篇「小公子」を「文芸」に発表し、童話の後日譚シリーズ開始(〜1955年)。短篇「ファルス」を「中央公論文芸特集」に。7〜10月、中篇「公縁奇縁」を「別冊文芸春秋」に連載。8月、「夷齋清言」を「文学界」に連載(〜翌年)。9月、永井荷風「渾身綺譚」(角川文庫)に「解説」。11月、「善人悪人」を「文芸春秋」に。12月、短篇「春の葬式」を「別冊文芸春秋」に。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和25年1月1日―昭和26年12月31日」(本誌上巻)に収録を参照
昭和25年 1950年	51歳	1月、短篇「野守鏡」を「群像」に、短篇「錦木」を「改造文芸」に。3月、短篇「影ふたご」を「文学界」に。4月、短篇「夜は夜もすがら」を「群像」に。5月、短篇「南枝向日」を「新潮」に、短篇「瀧のうぐいす」を「別冊文芸春秋」に、「二七〇」記を「作品」に。6〜7月、短篇「篠松」を「文学界」に連載。10月、短篇「妖女」を「群像」に、短篇「鼻」を「別冊文芸春秋」に、「夷齋筆談」を「新潮」に連載(〜翌年)。11月、短篇「望楼」を「中央公論文芸特集」に。12月、新潮社版「森鷗外集」を監修、上巻に「解説」。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和25年1月1日―昭和26年12月31日」(本誌上巻)に収録を参照
昭和21年 1949年	50歳	1〜2月、短篇「かれらの酒杯」を「新潮」に連載、長篇「華嚴」を「表現」に連載(〜8月、雑誌廃刊のため6回で途絶)。3月、「懸想文売」を「作品」に。5月、短篇「藤衣」を「別冊文芸春秋」に、短篇「おとしばなし葬葬」を「別冊読物時事」に発表し、「おとしばなし」シリーズ開始(〜1956年)。小説「新潮」小説公園「オール読物」にも掲載。7月、小説集「最後の晩餐」刊、港区芝高輪南町に転居。8月、中篇「善財」を「新潮」に。11月、短篇「片しぐれ」を「文芸春秋」に。12月、短篇「鳳凰」を「別冊文芸春秋」に、談話「夷齋筆談」を「近代文学」に。
昭和18年 1948年	49歳	2月、短篇「変化雑載」を「表現」に、小説集「処女懐胎」刊。3月、短篇「昼霞」を「新潮」に、短篇「野ざらし」を「文芸春秋」に。4月、世田谷区北沢2丁目に移居。5月、小説集「無尽燈」刊。6月、短篇「双美人」を「人間」に。7月、「太宰治昇天」を「新潮」に。9月、短篇「最後の晩餐」を「文芸春秋」に。全国書房版「石川淳著作集」全6巻刊行開始(〜翌年3月、版元倒産のため4巻で途絶)。
昭和17年 1947年	48歳	1月、短篇「かよひ小町」を「中央公論」に。4月、短篇「いすかのほし」を「人間」に。6月、短篇「雪のイブ」を「別冊文芸春秋」に。8月、「いぶ恋」を「改造」に。9〜12月、中篇「処女懐胎」を「人間」に連載。9月、「鷗外に関する対話」を『森鷗外研究』に。秋より世田谷区北沢1丁目に住む。11月、小説集「かよひ小町」刊。12月、中篇「飛梅」を「別冊文芸春秋」に。この年から「近代文学」同人らと親交はじまる。
昭和19年 1944年	45歳	1月、「神のかなしみ」を「東京新聞」に。2月、歴史読物「義貞記」刊。この頃、太宰治と親交。4月、「岡本かの子」を小学館『近代日本文学研究 昭和文学作家論(上)』に。7月、短篇「義経」を「新若人」に。8月、「歴史小説について」を「新潮」に。
昭和20年 1945年	46歳	3月、東京空襲盛んとなる。10日、永井荷風の偏奇館焼跡に立つ。5月25日の空襲で焼け出され、船橋市の海老名雄二方に寄宿。厚生省の外郭団体に勤め、被差別部落視察のため、夏と秋に北陸・近畿・四国に赴く。北陸本線の俱利伽羅峠近くにさしかかったとき、敗戦を知る。
昭和21年 1946年	47歳	3月、短篇「黄金伝説」を「中央公論」に。以後、ほぼ毎月一作を文芸雑誌に発表。4月、短篇「明月珠」を「三田文学」に。5月、短篇「寒露」を「新潮」に。6月、短篇「窮筆売」を「太平」に、短篇「列子」を「青年文化」に。7月、短篇「無尽燈」を「文芸春秋」に。8月、短篇「水郷記」を「新潮」に。
昭和19年 1944年	45歳	1月、「神のかなしみ」を「東京新聞」に。2月、歴史読物「義貞記」刊。この頃、太宰治と親交。4月、「岡本かの子」を小学館『近代日本文学研究 昭和文学作家論(上)』に。7月、短篇「義経」を「新若人」に。8月、「歴史小説について」を「新潮」に。
昭和18年 1943年	44歳	この頃、六本木の華壇アパートに住む。町内の消防団員に任命される。宇野浩二を囲む「日曜会」に参加。1〜3月、文芸時評「生活と言葉」「記号と言葉」「概念と言葉」を「文庫」に。3月、「江戸人の発想法について」を「思想」に。「二葉亭四迷を」近代日本文学研究 明治文学作家論(上)に。9月、岩野泡鳴を「近代日本文学研究 大正文学作家論(上)」に。
昭和17年 1942年	43歳	4月、「言葉と常識」を「文庫」に。雅川渥との対談「森鷗外―その代表作に就いて」を「新潮」に。5月、「祈祷と祝詞と散文」を「現代文学」に。7月、「現代訳日本古典 秋成・綾足集」刊、短篇「雪のはて」を「文学界」に。散文小史一名、歴史小説はよせを「新潮」に。8月、少年少女読物『渡邊華山』刊、評論随筆集『文学大概』刊。9月、「柳の説」を「文庫」に。11月、文芸時評「善隣の文化に就いて」を「新潮」に。
昭和16年 1941年	42歳	1月、「文学の今日」を「文芸情報」に。3月、伝記「渡邊華山」刊。「ヴァレリーの仮定」を「文庫」に。「歴史と文学」を「文芸情報」に。4月、「マラルメ」を「文芸情報」に。6月、「俳諧初心」を「文芸情報」に連載(〜7月)。8月、「鷗外覚書」を「文庫」に。10月、短篇「張柏端」を、11月、「鷗外とリルケ」を「文庫」に。11月、坂口安吾を識る。12月、「森鷗外」刊。
昭和15年 1940年	41歳	3月、「短篇小説の構成」を「現代文章講座」第一巻に。「悪文の魅力」を同月報に。4月、「雑文に就いて」を「文芸情報」に。5月、「文章の形式と内容」を『現代文章講座』第三巻に。アナトール・フランスの芸術観を「文芸情報」に。6月、長篇「白描」刊、評論の執筆が多くなる。津田季穂、稲垣足穂らと親交。7月、「スタンダールの芸術観を」、9月、「芸術に於ける虚構」(のち「虚構について」に改題)を「エコー」に、12月、「バルザックの芸術観」を「文芸情報」に。
昭和13年 1938年	39歳	1月、短篇「マルスの歌」を「文学界」に。反軍国調とされ、雑誌は発禁処分、編集責任者、河上徹太郎とともに罰金刑に。短篇「野天風呂」を「文芸汎論」に。2月、「花の春を」若草に。5月、短篇「曾呂利咄」を「文芸汎論」に。9月、「奇術」を「若草」に。10月、短篇「鉄拐」を「科学知識」に。11月、短篇「巷談」を「月刊文章」に。12月、博多の一挿話「のち「ラゲエ神父」に改題)を「旅」に。
昭和12年 1937年	38歳	1月、「不二の夢」を「文芸汎論」に。2月9日、「普賢」が第4回芥川賞に決定。2〜3月、「あけら菅江」を「読売新聞」に。3月、「普賢」刊発表の場が広がる。4月、「礼儀」を「作品」に。5月、「福岡の思出」を「福岡日日新聞」に。6月、短篇「千羽鶴」を「若草」に。8月、「白鳥」を「山陽中国合同新聞」に。9月、「何でもない文章」を「文芸汎論」に。10月、中篇「履帯」を「文芸春秋」に。12月、小説集「山桜」刊。



「普賢」版画社 1937年



「渡邊華山」三笠書房 1941年



「文学大概」小学館 1942年



池上の仮寓にて 1948年8月 撮影・小島野子

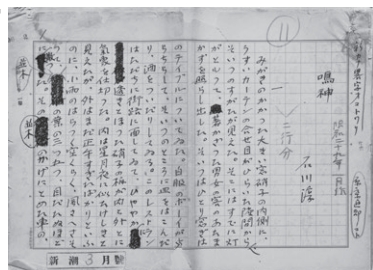


高輪の仮寓にて 1950年1月「推定」



1952年10月20日、小林秀雄との対談。梅茶屋にて © Kodansha フロコ

昭和28年	54歳	2月、杉並区清水町に転居。3月、中篇「鷹を」群像に。4月、「新秋雨月物語」を「別冊文芸春秋」に連載（〜翌年）。4月からフランス語非常勤講師として早稲田大学政経学部に出講（〜1955年3月）、6月、日本フランス文学学会で「リルケ」講演。この頃より文壇俳句会に出席。7月、小説集「鷹刊」。8月、三好達治・桑原武夫・大岡昇平らと志賀高原に遊ぶ。11月、中篇「珊瑚」を「群像」に。12月、小説集「珊瑚刊」。
昭和29年	55歳	2月、だから、いはいないことぢやない！社会時評とは何かを「文芸春秋」に。3月、中篇「鳴神」を新潮に。4月、随筆集「夷齋清言」刊。5〜12月、長篇「虹」を「文学界」に連載。9月、小説集「鳴神」刊。10月「坂口安吾との往復書簡」を「新潮」に。12月、短篇「天歳の餅」を「別冊文芸春秋」に。暮れに久保田万太郎を囲む「盆暮会」発足。 *この年の詳細は「石川淳日記 昭和29年1月1日―8月25日」本誌p.71〜73参照
昭和30年	56歳	1月、短篇「前身」を「新潮」に、しぐれ歌仙を「群像」に、長篇「虹」刊。2月、談話「坂口安吾を悼む」を「別冊文芸春秋」に。4月、短篇「狼」と、因縁深き浅きかを「新潮」に、「昭和文学全集57 伊藤整・石川淳集」刊。5月、短篇「犯人」を「中央公論」に。6月、「ホテル気質」を「文芸春秋」に、「安部君について」改稿「安部公房君鶴印」を併座座の「どれい狩り」プログラムに。8月、「すだれ越し」を「新潮」に。9月、中篇「落花」を「新潮」に。9〜10月、「虚」一巻を「東京新聞」に連載。12月、「諸国騎人伝」を「別冊文芸春秋」に連載（〜1957年）。小説集「落花」刊。
昭和32年	58歳	1月、短篇「夢の見本市」を「新潮」に。2月、短篇「灰色のマント」を「中央公論」に。4〜5月、「人生ノート 狂気と正気」を「サンデー毎日」に連載。6月、「安吾のある風景」を「文学界」に。7月、中篇「紫苑物語」を「中央公論」に、「墓とホテルと……」を「新潮」に。9月、短篇「まぼろし車」を「新潮」に。10月、野沢喜左衛門節付浄瑠璃放送台本「近松」を「文学界」に、小説集「紫苑物語」刊。
昭和33年	59歳	1月、短篇「鰐」を「文芸」に。3月、『紫苑物語』により第7回芸術選奨文部大臣賞を受賞。4〜10月、「白頭吟」を「中央公論」に連載。5〜10月、「神神」古事記物語を「総合」に連載（6回で途絶のち「新秋古事記」）。6月、「京伝頓死」を「新潮」に。10月、『諸国騎人伝』刊。11月、長篇「白頭吟」刊。
昭和34年	60歳	3月、中篇「八幡縁起」を「中央公論」に。4月、短篇「今はむかし」を「別冊文芸春秋」に、「日本語と漢語」を「東京新聞」に連載。7月、中篇「修羅」を「中央公論」に。8月、短篇「盛気楼」を「別冊文芸春秋」に。小説集「修羅」刊。10月、短篇「遊船」を「声」に。12月、短篇「かくし」を「別冊文芸春秋」に。
昭和35年	61歳	1月、短篇「雲葉十二神丹」を「新潮」に。2月、短篇「怪異石仏供養」を「別冊文芸春秋」に。『南画大体系』刊。5月、短篇「狐の生肝」を「新潮」に、『新選現代日本文学全集2 石川淳集』刊。小説集「雲葉十二神丹」刊。7・10月、中篇「影」を「中央公論文芸特集号」に分載。7月「敗荷落日」を「新潮」に、「独立の精神について」を「東京新聞」に連載。8月、短篇「獅子のファルス」を「新潮」に、NHKラジオ第2で池島信平と放送対談。9月、「六世歌右衛門」を、写真集「六世中村歌右衛門」に。11月、短篇「裸婦変相」を「新潮」に。小説集「影」刊。12月、短篇「にせ神父」を「別冊文芸春秋」に。
昭和36年	62歳	1月、短篇「おあいにくさま」を「小説中央公論」に、「横綱の弁」を「酒」に。2月、筑摩書房版『石川淳全集全10巻刊行開始（〜翌年12月）』刊。4月、短篇「越天楽」を「小説中央公論」に。5月、第17回芸術院賞受賞。7月、「ことばに手を出すな」を「新潮」に。9月、戯曲「おまへの敵はおまへだ」を「群像」に。10月、「京都ぶらぶら」を「きょうと」に、「夷齋遊戯」を「文学界」に連載（〜翌年）。12月、短篇「二人権兵衛」を「別冊文芸春秋」に。この年、ナルド・キーンが「紫苑物語」を英訳。
昭和37年	63歳	5〜10月、「レス・ノン・ヴェルバ」を「世界」に連載。7月、芥川賞選考委員となる（〜1971年）。
昭和38年	64歳	1月、短篇「金鶏」を「世界」に、長篇「荒魂」を「新潮」に連載（〜翌年）。3月、随筆集「夷齋遊戯」刊。渋谷区代々木木上原に転居。8月、「わが万太郎」を「新潮」に。9月、短篇「ゆう女始末」を「世界」に。11月、小説集「喜寿童女刊」、日本文学全集53 石川淳集刊。年末、芸術院会員になる。
昭和39年	65歳	1月、「不幸でなすぎる」を「中央公論」に、「世界は金色」を「芸術新潮」に、「京劇雑感」を「読売新聞」に。7月、長篇「荒魂」刊。8月、安部公房・江川卓・木村浩らと訪ソ。東独、チェコを巡ってパリに1ヶ月滞在。10月末に帰国。11月、太宰治賞選考委員となる（〜1969年）。12月、渋谷区初台に転居。
昭和40年	66歳	1月、長篇「至福千年」を「世界」に連載（〜翌年）。3〜8月、紀行「西游日録」を「展望」に連載後、10月に刊。
昭和41年	67歳	1月、短篇「鷓鴣石」を「新潮」に。5月、短篇「無明」を「新潮」に。6月、現代文学大系52 石川淳集刊。7月3日、NHK・FMで「石川淳特集」、大江健三郎・奥野建男と対談「紫苑物語の一節を朗読」。11月、「詩的回断片」を「新潮」に。
昭和42年	68歳	1月、短篇「鏡の中」を「新潮」に、「日本現代文学全集90 石川淳・坂口安吾」刊。2月、川端康成・安部公房・三島由紀夫と「中国文化革命」に関し、学問芸術の自律性を擁護するアピールを「文芸春秋」に。長篇「至福千年」刊。4月、戯曲「一目見て憎め」を「中央公論」に（12月に刊）。5月、川端・安部・三島との座談会「われわれはなぜ声明を出したかを」を「中央公論」に。8月、「日本の文学」60 石川淳刊。11月、革命家の夢」を「朝日新聞」に。12月、「仏界魔界」を「太陽」に。
昭和43年	69歳	1月、「読み癖」を「きょうと」に、「めぐりめぐって」を「東京新聞」に。2月、「中国の孝道」を「図書」に。4月、筑摩書房版『石川淳全集全13巻刊行開始（〜翌年4月）』刊。6月、『日本文学全集16 永井荷風・石川淳・大江健三郎』刊。7月、「夕夕について」を「朝日新聞」に。9月、「肉体の運動・精神の運動」三島由紀夫との対談を「文学界」に。



「鳴神」原稿



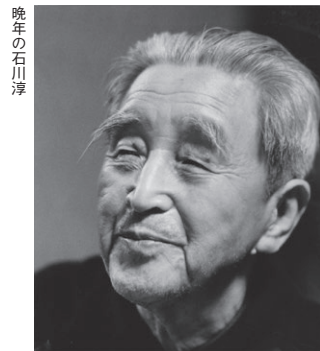
1959年6月、吉田健一と帝國ホテルにて ©新潮社



1969年12月、安部公房と初台の家にて ©東京新聞 協力 Abe Kobo official through Japan UNAgency, Inc.



昭和16年	70歳	1月、短篇「露」を「新潮」に、「吉備路」を「朝日新聞」に。「現代日本文学全集31 石川淳」「日本文学全集69 石川淳」刊。2月、「若菜」を「中央公論」に。4月、短篇「虎の国」を「文芸」に。5月、『現代日本文学体系76 石川淳・安部公房・大江健三郎集』刊。6月、「文学談断片」を「海」に。7〜9月、中篇「天馬賦」を「海」に連載。7月、インタビュー「絶対的自由と手」と聞き手・開高健を「文芸」に。11月、小説集「天馬賦」刊。タケノコの説を安部公房作・演出・棒になった男「公演パンフレット」に。12月、「無害は有害といふこと」を「朝日新聞」に。この月より「朝日新聞」で「文芸時評」開始（〜1971年11月）。
昭和15年	71歳	1月、短篇「武運」を「海」に。5月、『日本の名著21 本居宣長（中央公論社）を責任編集。6月、「カラー版日本文学全集32 石川淳」刊。7月、雑談（西脇順三郎との対談を「都市」に。12月、破裂のために集中する（三島由紀夫との対談を「中央公論」に。この年、秋の叙勲での勲三等の打診を断る。
昭和14年	72歳	1月、「舌と結ぶ」を「海」に。2月、長篇「狂風記」を「すばる」に連載（〜1980年）。5月、随筆集「夷齋小識」「現代十人の作家5 石川淳の自選作品集」刊。7月、『現代日本の文学18 石川淳集』刊。11月、岩波書店版『鷗外全集』月報連載（〜1975年）。
昭和13年	73歳	5月、「大和国原」を「週刊読売臨時増刊」に。「朝日新聞」の文芸時評集『文林通言』刊。7月31日、「江戸文学について」講演。9月、『新潮日本文学33 石川淳集』刊。
昭和12年	74歳	1月、「関谷学校」を「読売新聞」に。2月、『豪華版日本文学全集69 石川淳集』刊。3月、「一夜百詠」を「朝日新聞」に。10月、大佛次郎賞審査委員となる（〜1980年）。
昭和11年	75歳	1月、筑摩書房増補版『石川淳全集』全14巻刊行開始（〜翌年3月）。3月、安東次男・丸谷才一・大岡信と歌仙を巻き、新酒の巻を「図書」に。10月、「恩人」を「回想の古田畷」に。
昭和10年	76歳	2月、四畳半樓の下張裁判のため東京地裁に弁護側証人として出廷。3月、「遊びの精神（佐々木基一との対談を「文芸」に。3月下旬より4月上旬にかけて、学術文化使節団の一員として訪中。4月、「四畳半樓の下張裁判について」を「世界」に。5月、「文学的雑談（丸谷才一との対談を「国文学」に。6〜8月、「北京独吟」を「世界」に（3回）。9月、『鷗外全集』月報を纏めた随筆集『前賢餘韻』刊。10月29日、京都会館で「文学と生活」講演。
昭和9年	77歳	1月、「江戸と西洋（中村真一郎との対談を「海」に。3月、権一雄追悼文「花たちはなを」を「新潮」に。5月、随筆集『夷齋虚実』刊。12月、「樞」を「アニメ」に。
昭和8年	78歳	1月、「言葉・文化・政治（安部公房との対談を「波」に。4月、「夷齋華言」を「新潮」に連載（〜翌年）。8月、「江戸期の文学（トナルド・キーンとの対談を「海」に。9月、「我鬼先生のこと（大岡信との対談を「図書」に。10月、対談集『夷齋座談』刊。
昭和7年	79歳	1月、「湯ぶくれの歌」を「朝日新聞」に。5月上旬より6月上旬にかけて、活夫人とフランス、イタリヤ、オランダに遊ぶ。10月、紀行「西遊五月の花」を「すばる」に。11月、岩波書店版『鷗外全集』を単独編集。12月、「こめん下さい」を「図書」に。
昭和6年	80歳	1月、「続夷齋華言」を「新潮」に連載（〜翌年）。8月、中野重治追悼の談話「思想に詩人の感覚を」朝日新聞」に。11月、岩波書店版『石川淳選集』全17巻刊行開始（〜1981年3月）。
昭和5年	81歳	1月「東京言葉（大野晋・幸田文・丸谷才一との座談を「図書」に。5月、杉本秀太郎・丸谷才一との歌仙「旅衣の巻」を「図書」に。6月、「江戸の文人と遊び（中村真一郎との対談を「波」に。随筆集『江戸文学掌記』刊。8月、港区南青山に転居。10月、長篇『狂風記』上・下巻刊。11月、「文学の核心（丸谷才一との対談を「すばる」に。
昭和4年	82歳	1月、「宿なし日記」を「すばる」に。2月、『江戸文学掌記』により読売文学賞を受賞。安東次男・丸谷才一・大岡信との共著『歌仙』刊。6月、長篇『六道遊行』を「すばる」に連載（〜翌年）。10月、丸谷才一・結城昌治・野坂昭如・井上ひさしとの歌仙「市に五虎の巻」を「週刊朝日」に。
昭和3年	83歳	1月、昭和56年度朝日賞（文化賞）を受賞。4月、『現代の随想16 石川淳集』刊。10月半ばから、全国農協の米のCFで「鉢投げて米俵飛ばす秋の空」の句が放送された（野坂昭如・大岡信・丸谷才一の句とともに）。
昭和2年	84歳	1〜12月、「夷齋風雅」を「すばる」に連載。3月、岩波書店版『露伴随筆』全5巻を編集。4月、長篇『六道遊行』刊行。11月、大岡信・杉本秀太郎・丸谷才一らの共著『酔ひとれ歌仙』刊。
昭和1年	85歳	1月、長篇「天門」を「すばる」に連載（〜翌年）。
昭和0年	86歳	1月、大岡信・丸谷才一との歌仙「初霞の巻」を「すばる」に。12月、大岡信・丸谷才一・杉本秀太郎との歌仙「紅葉の巻」を「すばる」に。
昭和61年	87歳	1〜12月、「続夷齋風雅」を「すばる」に連載。1月、長篇「天門」刊。12月、大岡信・丸谷才一との歌仙「夕紅葉の巻」を「すばる」に。
昭和62年	88歳	1月、長篇「蛇の歌」を「すばる」に連載（〜翌年、16回で死去のため途絶）。7月、インタビュー「蜀山人とその周辺（聞き手・田中優子）を「文学」に。12月29日、東京都新宿区の社会保険中央病院で、肺癌による呼吸不全で死去。遺志により宗教的な葬儀は行わず。
昭和63年		1月22日、千日谷会堂で「石川淳と別れる会」が催され、中村真一郎・加藤周一・安部公房・丸谷才一・武満徹が別れの言葉を述べる。4月、長篇『蛇の歌』随筆集『夷齋風雅』刊。
昭和64年		筑摩書房版『石川淳全集』（〜1992年、全19巻）
昭和65年		
昭和66年		
昭和67年		
昭和68年		
昭和69年		
昭和70年		
昭和71年		
昭和72年		
昭和73年		
昭和74年		
昭和75年		
昭和76年		
昭和77年		
昭和78年		
昭和79年		
昭和80年		
昭和81年		
昭和82年		
昭和83年		
昭和84年		
昭和85年		
昭和86年		
昭和87年		
昭和88年		
昭和89年		
昭和90年		
昭和91年		
昭和92年		
昭和93年		
昭和94年		
昭和95年		
昭和96年		
昭和97年		
昭和98年		
昭和99年		
令和元年		
令和2年		
令和3年		



晩年の石川淳



1981年3月、原宿を歩く © 新潮社



初台の家の庭にて、愛犬クロ（フクロ）ぼうやとも。1967年〜80年まで飼う。

# 椎名麟三 年譜

本年譜は、『椎名麟三全集』(全23巻、冬樹社、斎藤末弘「椎名麟三の文学」(校風社)、姫路文学館「特別展 没後50年 姫路が生んだ二人の作家 阿部知二と椎名麟三展」図録ほかを参照し、講演記録に焦点を当て、作成しました。

明治11年	0歳	10月1日、兵庫県飾磨郡曾左村之内書写村(現・姫路市書写東坂)に、父・大坪熊次・母・みすの長男として生まれる。本名・大坪昇。生後3日目に母の自殺未遂事件があり、大阪で警察官をしていた父のもとへ母子ともに移る。
1918年 大正7年	7歳	4月、大阪市立中大江尋常小学校に入学。
1920年 大正9年	9歳	11月、父母が別居し、母、妹、弟と曾左村に帰る。12月、曾左村立尋常高等小学校に転入学。
1922年 大正11年	11歳	この頃、近所の青年画家・福本熊一のもとで文芸雑誌に親しむ。
1924年 大正13年	13歳	3月、曾左村立尋常高等小学校を卒業。4月、県立姫路中学校(現・姫路西高等学校)に入学。
1926年 大正15・昭和元年	15歳	5月、姫路中学校を退学。6月、父からの送金が途絶え貧窮。交渉のため一人大阪の父のもとに行くが追い返され家出。見習コック等の職を転々とする。
1927年 昭和2年	16歳	この頃、アウグスト・ペーベル『婦人論』を読み、社会主義を知る。独学で専門学校入学者資格検定試験(英語)を受け合格。
1929年 昭和4年	18歳	4月、母が須磨海岸で入水自殺を図る。新聞記事でこの記事をみた昇は、匿名にもかかわらず母親だと直感。カフエを辞し、須磨署で母と面会。これをきっかけに6月、宇治川電機電鉄部(現・山陽電気鉄道)に車掌見習いとして入社。その後労働運動に参加、刷新同盟を結成し、さらに全協(日本労働組合全国協議会)の組織下に入る。
1931年 昭和6年	20歳	8月、関西を中心にした日本共産党の一斉検挙があり、東京へ逃れる。9月、目黒にいた父を訪ねた際に高輪署員に検挙され、神戸地裁で懲役4年の判決を受ける。
1932年 昭和7年	21歳	未決囚として、神戸の留置場をたらい回しにされる。7月、大阪刑務所の未決監に回される。拘禁中、ニーチェの『この人を見よ』を読み、衝撃を受ける。
1933年 昭和8年	22歳	獄中で転向上申書を書く。4月、父熊次と母みすの協議離婚が成立。その後みすは自殺を遂げる。同月末、昇は懲役3年、執行猶予5年の判決を受け、大阪刑務所から出所。5月頃、マッチ工場で雑役夫として働く。8月、父を頼って上京、防水紙の製造、運送屋などを転々とする。
1934年 昭和9年	23歳	12月、銀座のレストラン「ニュー・パレス」でともに働いていた祖谷寿美と実質上の結婚。芝区(現・港区)に住む。
1935年 昭和10年	24歳	本所区(現・墨田区)の寿美の実家に住む。8月、長男一裕誕生。
1936年 昭和11年	25歳	2月、同心社に就職し、筆耕となる。
1938年 昭和13年	27歳	1月、祖谷寿美との婚姻届出。4月、筆耕の仕事ぶりが評価され、東京丸の内の新潟鉄工所社員となる。同僚に詩人の北川省一がいた。この頃、ニーチェに導かれ、ドストエフスキーの『悪魔』を読む。衝撃を受け、文学への関心を高める。6月、本名で「島長の家」を脱稿。12月、「焰の槍」で初めてペンネーム「椎名麟三」を用いる。この名前は労働運動時代の変名を組み合わせたもの。
1939年 昭和14年	28歳	1月、「男の言葉」脱稿。短篇「悪魔と神を」「文芸首都」へ送る。年末、佐々木翠「のちの船山馨夫人」を紹介され、同人雑誌「創作」を知る。
1940年 昭和15年	29歳	8月、同人雑誌「新創作」(旧「創作」)の正式な同人となる。同人には船山馨、佐々木翠、寒川光太郎(この年、芥川賞受賞)らがいる。12月、「第壹号試掘井」を脱稿。
1941年 昭和16年	30歳	1月、「家」を「新創作」に発表。2月、「新創作七人集」(創作社)に「第壹号試掘井」が収録される。
1942年 昭和17年	31歳	3月、新潟鉄工所が戦車製造を開始したことに嫌気が差し、同社を退職する。6月、長女真美子誕生。この頃、長篇「胎動」を書き上げ、船山馨が河出書房に持ち込むが、不採用。原稿は預けられたまま、1945年5月の空襲で社屋と共に灰燼に帰す。
1943年 昭和18年	32歳	3月、豊国社の高田俊郎を保証人として、世田谷区松原に家を買ひ、転居。同月、妹和子の結婚式のため、大阪へ旅行。9月、第1回の召集を受けるが、肺浸潤のため即日帰郷。12月、大阪旅行を材料として「霧の旅愁」を脱稿するが未発表。
1944年 昭和19年	33歳	1月頃、近所に住んでいた友人荒本守也から『キルケゴール選集』を借りて読み、強い影響を受ける。この年、2度目の召集を受けるが、タバコを水に溶かして飲み、体調不良となった結果、即日帰郷となる。
1945年 昭和20年	34歳	3月10日、東京大空襲。翌日、船山馨と妻の実家を目指し本所の焼跡を歩き、その帰途、文学への決意を確認しあう。8月15日、終戦。9月頃、船山馨や実弟、実らと資本・印刷・出版を目的とした創美社を創立。世田谷区の京王線・千歳烏山駅前に事務所を設ける。
1946年 昭和21年	35歳	1月、創美社から船山馨『稚情歌』を1万部刊行。売れ行き好調のため、第2回配本として井野貞一の反戦小説『軌の下』を2万部刷りが、民間情報教育局の検閲で削除訂正の注文がつき、発行を断念。借金がのこり、創美社は春頃に廃業となった。8月、第3回配本として予定していた「黒い運河」を脱稿。その後、「深夜の酒宴」と改題改作し、出版社各所へ持ち込むが不採用。その後、田村元の実存主義的論文を掲載していた筑摩書房の雑誌「展望」に送る。年末、編集者臼井吉見より採用の電報を受ける。
1947年 昭和22年	36歳	2月に「深夜の酒宴」が「展望」に掲載され、作家としてデビューする。6月、「重き流れのなかに」を「展望」に発表。



1921年頃  
後列左から、昇父・熊次妹・和子弟・実母・みす



中学2年頃



1930年  
車掌時代  
前列・椎名



1936年頃  
寿美と



1939年頃  
井の頭公園にて長男・一裕と



小石川・豊国社にて。同社は「新創作」の支援者であった

昭和36年 1961年	50歳	1月、文庫判随筆集『私の人生手帖』刊。5月『長い谷間』刊。8月、上原教会夏期集会で「交りの現実性」と題して講演。10月、キリスト教兄弟団15周年記念の講演旅行の一環として、西南学院大学で講演。11月、武田泰淳、堀田善衛、中村光夫とともに訪中文学者代表团の一員として広州、北京、上海等を訪問。12月に帰国。同月、シドニー・ジェファード訳による『愛の証言』がイギリスで刊行。
昭和35年 1960年	49歳	3月、教文館遺愛室にて、佐古純一郎・阿部光子・高見沢潤子らとプロテスタント文学集団「たねの会」を結成。6月、中野重治・高見順らとともに「安保批判の会」に入り、デモに加わる。同月、軽井沢星野温泉でひらかれた「キリスト教と文学の会」で「表現について」と題して講演。7月、上原教会夏期集会で「芸術と方法」と題して講演。10月、名古屋市名鉄ホールにて「自由と文学について」と題して講演。同月、『畏と毒』刊。この年、テレビドラマ「自由への証言」により芸術祭奨励賞受賞。
昭和34年 1959年	48歳	3月、指「百号記念会で聖書の非神話化問題をめぐり、赤岩栄牧師との信仰的立場の違いが表面化する。4月、随筆集『生きる意味』刊。5月、テレビドラマ「その男」がNHK大阪で放送。6月、『新選現代日本文学全集25』 椎名麟三集刊。7月、『明日なき日』刊。キリスト教兄弟団夏期修養会で「信仰と文学」と題して講演。8月、上原教会夏期集会で「現代の状況」と題し、遠藤周作とともに講演。9月、創作集『断崖の上で』現代長編小説全集39。 椎名麟三・武田泰淳集刊。11月、同志社大学で「矛盾と自由」と題して講演。
昭和33年 1958年	47歳	2月、『現代日本文学全集82』 椎名麟三・野間宏・梅崎春生集刊。8月、上原教会夏期集会で「人間の復権」と題して講演。11月、大阪府池田市五月山教会で「文学と救い」と題して講演。創作集『雨は降り続けている』刊。
昭和32年 1957年	46歳	2月、新書刊『私の聖書物語』刊。4月、詩人の大岡信と劇作家の深瀬サキの婚礼で仲人をつとめる。7月、関西学院大学で「現代とニヒリズム」と題して講演。8月、上原教会夏期集会で「聖書における不条理について」と題して講演。同月、川原湯温泉高山旅館で原稿執筆中に心筋梗塞で倒れ、翌月、慶應病院に入院。退院後、自宅療養を続けたが、再び東大病院に入院。11月、『椎名麟三作品集』(講談社、全7巻)刊行開始。12月、連作推理小説集『新作の証言』刊。
昭和31年 1956年	45歳	1月、新書刊『文芸での座談会をきっかけとして梅崎春生、武田泰淳、中村真一郎、野間宏、埴谷雄高、堀田善衛と「あさって会」を結成。2月、新書刊『私の聖書物語』刊。4月、詩人の大岡信と劇作家の深瀬サキの婚礼で仲人をつとめる。7月、関西学院大学で「現代とニヒリズム」と題して講演。8月、上原教会夏期集会で「聖書における不条理について」と題して講演。10月、川原湯温泉高山旅館で原稿執筆中に心筋梗塞で倒れ、翌月、慶應病院に入院。退院後、自宅療養を続けたが、再び東大病院に入院。11月、『椎名麟三作品集』(講談社、全7巻)刊行開始。12月、連作推理小説集『新作の証言』刊。
昭和30年 1955年	44歳	1月、指「50号記念会で「文学と宗教をめぐって」と題して講演。5月、長篇『美しい女』を『中央公論』に連載(〜9月)。7月、上原教会夏期集会で「聖書をどう読んできたか―聖書の三段階―」と題して講演。8月、東京YMCAで「宗教と文学」と題して講演。10月、創作集『神の道化師』『美しい女』刊。同月、日本青年会館にて新日本文学協会創立十周年記念講演「最近の小説について」と題して講演。11月、新書判『愛の証言』刊。法政大学五十五年館ホールにてキルケゴール没後百年記念講演会がひらかれ「キルケゴールの立場」と題して講演。同月、3月、映画『煙突の見える場所』(原作「無邪気な人々」)が全国上映、のちにベルリン国際映画祭で上映され、国際平和賞を受賞した。4月、五所平之助と新潟県高田市へ講演旅行を行う。6月、聖書神学校 実践女子大学で講演。9月、初のオリジナルシナリオを収録した創作集『愛と死の谷間』刊。12月、『新日本文学』の文学学校で講演。
昭和29年 1954年	43歳	1月、『昭和文学全集29』 椎名麟三・野間宏・梅崎春生集刊。2月、東京YMCAで講演。同月、かつて勤務していた山陽電鉄に招かれ、久しぶりに姫路の書写に帰郷。3月、『自由の彼方で』刊。5月、『新日本文学』の文学教室で講演。6月、早稲田奉仕園で講演。8月、上原教会夏期修養会で「文学的生活における信仰の意味」を講演。10月、日本読書会で講演。12月、『第三の証言』が、劇団青年座の旗揚げ公演で上演される。
昭和28年 1953年	42歳	3月、映画『煙突の見える場所』(原作「無邪気な人々」)が全国上映、のちにベルリン国際映画祭で上映され、国際平和賞を受賞した。4月、五所平之助と新潟県高田市へ講演旅行を行う。6月、聖書神学校 実践女子大学で講演。9月、初のオリジナルシナリオを収録した創作集『愛と死の谷間』刊。12月、『新日本文学』の文学学校で講演。
昭和27年 1952年	41歳	4月、長篇『邂逅』を『群像』に連載(〜10月)。5月、東京大学五月祭「アヴァンギャルド文芸大講演会」に安部公房・白井健三郎・佐々木基一らと参加。6月、YMCA、國學院大学で講演。7月、『無邪気な人々』を『文学界』に発表。映画プロデューサーの内田義重から同作映画化の申し入れがあったが、はじめる。その後、映画監督・五所平之助の強い希望があり、小国英雄と合作を下敷きにした脚本「煙突の見える場所」を完成させる。同月、横浜YMCAで講演。8月、東電文化会館にて講演。10月、『新文学全集』 椎名麟三集刊。新日本文学協会東京支部長となる。11月、京都大学、同志社大学で講演。12月、『邂逅』刊。
昭和26年 1951年	40歳	4月、創作集『嫉妬』書き下ろし長篇『赤い孤独者』刊。5月、早稲田大学大隈講堂で赤岩牧師とともに講演。11月、東京大学で講演。
昭和25年 1950年	39歳	2月、新宿の中村屋にて「新日本文学」平和を守る会主催の講演会で豊島与志雄とともに講演。創作集『病院裏の人々』刊。4月、ライオンはみがきKKにて講演。11月、自由大学で講演。この年は思想的に行き詰まりを感じ、毎日のように新宿駅西口のハモニカ横丁を飲み歩く。12月下旬、日本基督教団上原教会(赤岩栄牧師)で洗礼をうける。雑誌「指」を創刊。
昭和24年 1949年	38歳	2月、評論集『自由を求めて』刊。5月、夜の会「新しい芸術の探求」刊。椎名の「人間の条件について」が収録される。11月、月曜書房版『深尾正治の手記』、『その日まで』刊。12月、野間宏、花田清輝とともに編集の『戦後主要作品全集』刊。この年、失踪していた父熊次が自殺していたことを知る。
昭和23年 1948年	37歳	1月、創作集『重き流れのなかに』、創作集『深尾正治の手記』刊。同月、岡本太郎、花田清輝らが結成した「夜の会」に参加。4月、書き下ろし長篇『永遠なる序章』を脱稿。この頃、荒本守也が腸捻転が原因で死去、大きなショックを受ける。5月、船山馨と新人発掘のために雑誌「次元」を創刊。同月、松本市の松本中学校、慶応義塾大学で講演。6月、『永遠なる序章』刊、『近代文学』第二次同人拡大に伴い、梅崎春生、武田泰淳らと共に加入。同月、雑誌「個性」の座談会で赤岩栄牧師と出会う。10月、戦後派作家を集めた雑誌「序曲」のための座談会に出席する。同月、戦後派作家として注目を集めていた梅崎春生が松原に引越して行く。以後親しく付き合うようになる。12月、「序曲」創刊号の編集人をつとめたが、同誌は1号で終了となる。



1948年 梅崎春生宅にて。左から梅崎 頼善、清隆、椎名 尾熊次



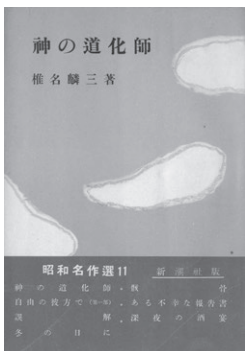
1948年頃 寿美夫人、長女真美子と



赤岩栄牧師と



『自由の彼方で』講談社 1954年  
コックや書生時代の経験をもとにした自伝的小説



『神の道化師』新潮社 1955年  
少年の出家を題材にした表題作をふくむ短編集

昭和37年 1962年	51歳	3月、東京神学大学同窓会で「自由と共存」と題して講演。5月、創作集『媒酌人』刊。7月、たねの会総会で「小説の技術について」と題して講演。8月、女子学院で講演。10月、たねの会で「小説の面白さについて」講演。神奈川労働大学で「私は何故小説を書くか」と題して講演。仙台尚綱女学院(現・尚綱学院)で「文学とは何か」と題して講演。11月、京都医大で「自由の方向」、関西学院で「文化と自由」と題して講演。 * 椎名麟三講演メモ9(本誌上巻に収録)
昭和36年 1963年	52歳	1月、文芸首都の会で講演。2月、『新日本文学全集17 椎名麟三集』刊。4月、国際日本研究所で「愛について」と題して講演。6月、墨田の聖パウロ教会で「生きる意味」と題して講演。同月、同志社大学で「現代の非人間性」と題して講演。7月、大阪文学学校で「文学の視点」と題して講演。9月、創作集『カラチの女』刊。秋頃より心臓病が悪化し、医師から執筆を禁止された。11月、同志社中・高等学校生徒に「ヨハネによる福音書第八章について」と題して講演。同月、ミュージカル「姫山物語」の試演が姫路高等学校で行われる。12月、『日本文学全集61 椎名麟三集』刊。 * 椎名麟三講演メモ16(本誌p.86~88参照)
昭和39年 1964年	53歳	6月、『姫山物語』が姫路市厚生会館で上演。12月、新書判随筆集『信仰というもの』刊。
昭和40年 1965年	54歳	3月、『日本現代文学全集98 椎名麟三・梅崎春生集』刊。7月19日、梅崎春生が肝硬変で急逝。葬儀委員長を務める。同月、『日本青春文学名作選24 夏目漱石・太宰治・椎名麟三集』刊。8月、国際日本研究所夏期セミナーで「文学と宗教」と題して講演。10月、梅崎春生文学碑建立のため、檀・雄・埴谷雄高らと鹿児島県内をめぐる。11月、たねの会総会で「文学における救いの視点」と題して講演。
昭和41年 1966年	55歳	3月、朝日新聞社講堂にて「信徒の友」たねの会の共催で講演会が行われ、「ドストエフスキーと私」と題して講演。5月、鹿児島県坊津で梅崎春生文学碑除幕式が行われる。同月、鹿児島教会で「現代人は孤独に耐えられるか」と題して講演。7月、日本基督教団三鷹教会へ転籍、『現代の文学』28 椎名麟三集刊。8月、たねの会総会で「信仰と実作」と題して講演。『現代文学大系56 椎名麟三集』刊。12月、評論・随筆集『地底での散歩』刊。
昭和42年 1967年	56歳	5月、『私のドストエフスキー体験』、自伝『凡愚伝』、『われらの文学』3 椎名麟三・梅崎春生集刊。8月、たねの会総会で「キリスト教における文学の理念」と題して講演。
昭和43年 1968年	57歳	1~12月、『椎名麟三人生論集(全5巻)』刊。7月、創作集『動人の休日』刊。8月、たねの会総会で「小説における方法」と題して講演。9月、『日本短篇文学全集21 有島武郎・椎名麟三・遠藤周作集』刊。
昭和44年 1969年	58歳	8月、たねの会総会で「表現にたいする積極的態度」と題して講演。同月、書き下ろし長篇『徴役人の告発』刊。12月、『カラー版日本文学全集36 椎名麟三・梅崎春生・武田泰淳集』刊。
昭和45年 1970年	59歳	6月、『椎名麟三全集』(1979年全23巻・別巻1巻)刊行開始。10月、創作集『変装』刊。11月、戯曲『悪霊』刊。この年、英訳本『媒酌人』がアメリカで刊。
昭和46年 1971年	60歳	1月、自選戯曲集『蠟を飼う女』刊。2月、『現代日本の文学』38 椎名麟三・梅崎春生集刊。『新潮日本文学』40 椎名麟三集刊。8月、『現代日本文学大系』80 椎名麟三・梅崎春生集刊。この年、「展望」の全4回の座談会に中村真一郎・埴谷雄高・武田泰淳・野間宏・堀田善衛らと出席。
昭和47年 1972年	61歳	3月、『現代キリスト教文学全集(教文館)』の監修を遠藤周作とともに引き受ける。8月、たねの会総会で「リアリズムについて」と題して講演。心臓発作にたびたび襲われる。
昭和48年 1973年		3月28日、脳出血のため、松原の自宅2階の書斎で逝去。61歳。30日、三鷹教会で葬儀を営んだ。喪主は長男・大坪一裕、葬儀委員長は埴谷雄高。本多秋五、堀田善衛、大江健三郎、船山馨、佐古純一郎らが弔辞を述べた。6月、富士霊園に埋葬。
昭和50年 1975年		2月、『椎名麟三初期作品集』刊。
昭和52年 1977年		『椎名麟三信仰著作集』(1982年、全13巻)刊。
令和5年 2023年		4月22日~9月3日、世田谷文学館コレクション展で「没後50年・椎名麟三と『あさっての会』」開催。12月2日~翌年2月4日、姫路文学館で「没後50年 姫路が生んだ二人の作家 阿部知二と椎名麟三展」開催。



1963年頃 軽井沢にて椎名夫妻



梅崎春生文学碑除幕式の道中 左から椎名、埴谷雄高



晩年の姿 松原の自宅前にて



椎名麟三葬儀、埴谷雄高が葬儀委員長をつとめた

## 謝辞

本誌刊行にあたり、格別のご協力を賜りました関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力（敬称略・50音順）

安部賢治  
池澤一郎  
石川眞樹  
梅崎知生  
大坪真美子  
木村剛太郎  
白洲明子  
永井頼子

講談社  
新潮社  
SOMPO美術館  
東京新聞  
日本ユニ・エージェンシー

## 世田谷文学館 収蔵資料〈調査と探究〉02 石川淳／椎名麟三〔下巻〕

監修 紅野謙介  
翻刻・編集 世田谷文学館  
小池智子 瀬川ゆき 竹田由美 中垣理子 原辰吉  
校閲 株式会社尾野製本所校閲部  
撮影 栗原論 高橋宗正  
デザイン 溝端眞 (ikaruga.)  
印刷 共同製本株式会社

発行日 2025年2月27日  
編集・発行 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文学館  
〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10  
Tel.03-5374-9111  
<https://www.setabun.or.jp>

\*著作権等については極力調査いたしましたが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

©2025 Setagaya Literary Museum